禰ノ神・栗木沢・砂田

塩尻東地区県営圃場整備
発掘調査報告書

1986

塩尻市教育委員会

序

事業施工三年目を迎えた塩尻東地区の県営ほ場整備事業は、昨年、一昨年と数多くの貴重な成果を提供してまいりましたが、今年度も３地区３遺跡が工事区域内にはいり、遺跡全体あるいはその一部が破壊されることになりました。長野県中信土地改良事務所では工事施行に先立ち発掘調査を行い、記録保存をはかるために、塩尻市教育委員会に調査の委託をされ，調査は地元の考古学研究者・市教委・信州大学考古学研究会員を中心に地元の方々の御協力により実施されました。

発掘調査は６月末から９月初めにかけて行われ、その結果数多くの成果をあげることができました。特に柿沢の禰ノ神古墳では、松本平初の葺石古墳であることを確認した他、鏡をはじめ貴重な出土遺物を得ることができ、同地区の古代史解明に大きな前進をもたらしたものといえましょう。

終わりにあたり本調査が無事完了し報告書が発刊されるにあたって、調査員の先生方をはじめとして地元改良区役員の方々、また作業に献身的に御協力いただいた多くの地元の方々の深い御理解と御尽力によるものであり、ここに深甚の謝意を表するものであります。

昭和61年２月

塩尻市教育委員会

教育長　小　松　優　一

例　言

1．本書は、昭和60年度塩尻東地区県営圃場整備事業に伴う、中信土地改良事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて昭和60年６月12日から９月２日にわたって発掘調査した塩尻市内３地区３遺跡の調査報告書である。

2．調査経費については、中信土地改良事務所からの委託金および国庫・県費補助金による。

3．本書の執筆は各調査員・調査補助員が分担して行い、文責は文末に記した。

4．本書の編集は小林、鳥羽、伊東が行った。

5．調査にあたり次の方々の御指導、御協力を得た。記して厚く感謝申し上げたい

（敬称略）

桐原　健、西沢晃寿、笹沢　浩、寺島俊郎。

6．本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古学博物館に保管している。

目　次

例　言
第Ⅰ章調査状況…… 1
第1節　発掘調査に至る経過…… 1
第2節　調査体制…… 2
第3節　調査日誌…… 3
第4節　遺跡の状況と面積…… 7
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境…… 8
第1節　自然環境…… 8
第2節　周辺遺跡…… 9
第Ⅲ章　調査遺跡…… 11
第1節　禰ノ神古墳…… 11
1　位置…… 11
2　調査概要…… 14
3　第1号墳…… 14
1)　墳丘…… 14
2)　内部主体…… 17
3)　前庭部…… 19
4)　遺物…… 19
(1)装身具　(2)鏡　(3)鉄器　(4)土器　(5)人骨
4　第2号墳…… 32
1)　墳丘…… 32
2)　内部主体…… 33
3)　遺物…… 33
(1)装身具　(2)鉄器　(3)土器
5　第3号墳…… 36
1)　墳丘…… 36
2)　遺物…… 38
(1)装身具　(2)鉄器　(3)土器
6　調査の成果と課題…… 40
7　まとめ…… 44
第2節　栗木沢遺跡…… 45
1　位置…… 45
2　調査概要…… 46
3　遺構…… 48
1)　住居址…… 48
2)　小竪穴…… 48
3)　ピット群…… 48
4　遺物…… 50
5　まとめ…… 50
第3節　砂田遺跡…… 51
1　位置…… 51
2　調査概要…… 52
3　遺構…… 53
1)　中世建物址…… 53
2)　集石土壙…… 54
4　遺物…… 56

1) 土器…… 56
2) 石器…… 58
5　まとめ…… 59
第IV章　結語…… 60

第Ⅰ章　調査状況

第1節　発掘調査に至る経過

1月8日　昭和60年度文化財関係補助事業計画について（提出）

3月20日　関係各地区圃場整備役員、市耕地林務課、市教育委員会により、調査時期および調査箇所についての協議

4月5日　昭和60年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）

4月24日　昭和60年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）

4月26日　中信土地改良事務所、市耕地林務課、市教育委員会により今年度予定されている発掘調査についての協議

5月10日　昭和60年度文化財保護事業県補助金の内示について（通知）

5月21日　塩尻東地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約について

5月27日　昭和60年度文化財保護事業県費補助金交付申請書について（提出）

6月7日　埋蔵文化財根ノ神古墳の発掘調査について（通知）

6月17日　昭和60年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）

6月19日　埋蔵文化包蔵地栗木沢遺跡の発掘調査について（通知）

7月17日　栗木沢遺跡埋蔵文化財の収得について（届）

8月1日　昭和60年度文化財保護事業県費補助金の交付決定について（通知）

8月7日　栗木沢遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

8月13日　埋蔵文化財包蔵地砂田遺跡の発掘調査について（通知）

8月31日　禰ノ神古墳埋蔵文化財の収得について（届）

9月10日　砂田遺跡埋蔵文化財の収得について（届）

9月24日　禰ノ神古墳・砂田遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

2.遺跡名　　栗木沢遺跡、根ノ神古墳、砂田遺跡

4.発掘調査の目的及び概要　　関発事業県営ほ場整備事業に先立ち300m² 以上・円墳一基を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和60年8月31日までに終了する。調査報告書は昭和61年3月25日までに刊行するものとする。

5.調査の作業日数　　発掘作業19日　整備作業19日　合計38日

6.調査に要する費用　　発掘調査費全額3,200,000円　文化財農家負担軽減額－720,000円　計2,480,000円

7.調査報告書作成部数　300部

第2節　調査体制

(1)禰ノ神古墳

団　長　　小松　優一　（塩尻市教育長）

担当者　　小林　康男　（日本考古学協会員、市教委）

調査員　　伊東　直登　（長野県考古学会員、　〃　）

　　鳥羽　嘉彦　（　　〃　　、　〃　）

　　市川二三夫　（　　〃　　）

　　寺内　隆夫　（下総考古学会員）

調査補助員　龍堅　守、前田清彦、腰原典明、藤田英博、山本淳子、百瀬顕正。

参加者　　清水年男、白木正富、中島房美、米久保勇、小松弘一、中村　啓、中村ちか子、福山茂喜、米山米三郎、中野久美子、中村ふき子、山本敬子、金田和子。

(2)栗木沢遺跡

団　長　　小松　優一　（塩尻市教育長）

担当者　　鳥羽　嘉彦　（長野県考古学会員、市教委）

調査員　　小林　康男　（日本考古学協会員、　〃　）

　　伊東　直登　（長野県考古学会員、　〃　）

　　市川二三夫　（　　〃　　）

参加者　　上條宮雄、中村芳晴、米窪さだゑ、樋口　彰。

(3)砂田遺跡

団　長　　小松　優一　（塩尻市教育長）

担当者　　小林　康男　（日本考古学協会員、市教委）

調査員　　鳥羽　嘉彦　（長野県考古学会員、　〃　）

　　伊東　直登　（　　〃　　、　〃　）

調査補助員　前田清彦、龍堅　守、腰原典明、掬川由里子。

参加者　　小松幸美、村山　明、白木正富、清水年男、中島房美、伊沢みきゑ、中島寿子、芦沢元子、米窪とみゑ、中垣内秋人、米山米三郎、市川きぬえ、塩原よし子、柄澤貞久、春日隆幸、中島民夫、千村哲也。

事務局

市教委総合文化センター所長　二木三郎
〃　文化教養担当課長　清水良次
〃　文化教養担当次長　原田　博
〃　平出遺跡考古博物館学芸員小林康男
〃　文化教養担当主事　鳥羽嘉彦
〃　文化教養担当主事　伊東直登

協力者

塩尻東土地改良区理事長　平林袈裟男
塩尻東土地改良区工事委員長　笠原和晃
塩尻東土地改良区理事（柿沢地区地区長）　笠原　進
〃　（塩尻町地区長）　小沢亀子男
〃　（下西条地区地区長）　石川敏幸
塩尻東地区換地委員（柿沢地区補助監督員）　笠原春人
塩尻東地区工事委員（長畝地区補助監督員）　吉江昭次
地権者（根ノ神古墳）　増田千一
〃　中村光夫
〃　（栗木沢遺跡）　増田栄治
〃　（砂田遺跡）　足助善人

第3節　調査日誌

(1)禰ノ神古墳

○昭和60年6月11日（火）曇　発掘器材・テントを現地搬入。古墳から約70mの東の尾根上にテント設営時、周囲から土師、須恵器片を採集する。
○6月12日（水）曇時々雨　墳丘上および周囲の立木・腐食土除去作業。当初墳丘上に散見されされた人頭大の河原石が、他にも多くあることが判明。墳丘西側に、比較的大きな礫を伴う直径1.5m程の窪みがあり、主体部入口部分の可能性あり。
○6月13日（木）雨　作業中止
○6月14日（金）曇　腐食土除去作業。多数の礫が露出しはじめ、作業が難航する。ボーリングの結果、墳丘上部を中心として広範囲に礫があることを確認。葺石もしくは積石古墳の可能性が強まる。梅雨特有のじめじめした天気が続く。
○6月15日（土）晴　腐食土除去作業。墳丘東北部で人頭大の河原石がきれいに並べられて検出された。ボーリングの結果、墳丘内に礫は少なく、葺石古墳とほぼ確認。
○6月16日（日）晴　発掘前古墳全体図測図。入口部分と思われた西の落ち込みを半截調査した結果、炭焼き跡と判明。主体部方向不明となる。墳頂部から放射状に8本のトレンチ設定。
○6月17日（月）　葺石露出作業と並行して葺石測図開始。墳丘の主に南側で、土師・須恵器片多数のほか、鉄鏃、刃子出土。グリッド設定。梅雨にはめずらしい好天が続いた。
○6月18日（火）曇時々小雨　葺石露出作業および葺石平面図測図続行。
○6月19日（水）、6月20日（木）雨　連日雨天により作業中止。

禰ノ神1号古墳　表土除去作業

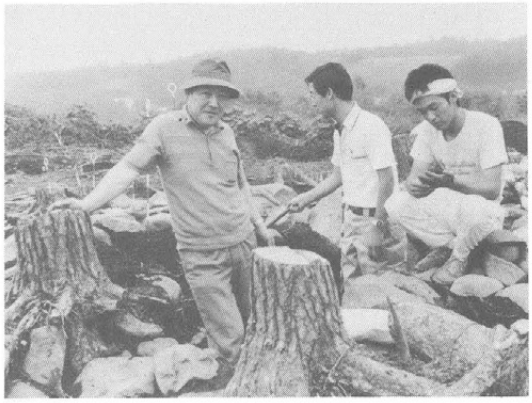
○６月21日（金）曇　葺石露出作業を進めるが、墳丘のほぼ全面にわたり検出され、中々捗らない。東西南北４本のトレンチ（第１～４）掘下げにより調査することとし、葺石測図の終了した第４トレンチから掘下げを開始する。東南側から南側にかけて土器片多数と管玉１個出土。
○６月22日（土）雨　作業中止。博物館にて今後の作業方針を検討中、「塩尻町誌」（1937）中に、「子の神塚」は「三基」の古墳が存在しているとする記載を見つける。
○６月23日（日）定休日
○６月24日（月）、６月25日（火）雨　作業中止。
○６月26日曇　現在調査中の古墳東隣の弱干盛り上った場所および、テント西の礫露出部分よりボーリング調査により、土中に多数の礫があることを確認。西から１、２．３号古墳とする。１号墳、トレンチ掘下げを進める。第２トレンチ内から、多数の土師・須恵器片出土。葺石平面図測図続行。
○６月27日（木）曇　１号墳、葺石平面図測図およびトレンチ掘下げ。第２トレンチで石積み検出。主体部と思われたため、第１、３トレンチでの掘下げとボーリング調査により墳丘内の石積みを確認。第２トレンチ方向に入口があると推察される。２号墳立木伐採および腐食土除去開始。
○６月28日（金）雨　作業中止。
○６月29日（土）曇　１号墳、トレンチ掘下げ。第３トレンチ南側からも土器片多数出土。遺物出土範囲が墳丘南半面のほぼ全域にわたる。葺石下から鞍出土。２号墳、腐食土除去作業。
○６月30日（日）定休日
○７月１日（月）晴時々曇　１号墳、トレンチ掘下げおよび葺石平面図測図続行。２号墳、腐食土除去作業の進行により、葺石古墳であることを確認。１号墳に比して小型で、葺石の範囲も南半に集中し、北側は稀薄になっている。土師、須恵器片出土。
○７月３日（水）曇後雨　１号墳、第１、３トレンチ掘下げ。第３トレンチ、セクション図化。２号墳、葺石露出作業に並行し、葺石平面図測図開始。二木総合文化センター所長来訪。午後中止。
○７月４日（木）、７月５日（金）雨　作業中止。
○７月６日（土）曇　１号墳、主体部主軸方向で半截線を設定、掘下げ開始。石室内にも葺石と同等大の礫がつまっている。金環出土。２号墳、葺石露出作業を進めたところ、墳頂部で石室側壁と思われる大きな礫の並びを検出。
○７月７日（日）定休日
○７月８日（月）曇　１号墳、石室内から鉄鏃、刃子出土。北側で床面と思われる礫検出。第１トレンチ葺石下から轡出土。２号墳、石室掘下げ。南側で床面と思われる礫敷検出。金環出土。十字の1.4m幅トレンチ設定、掘下げ開始。３号墳、礫露出作業。小範囲での検出にとどまり、墳丘もないことから、ほとんど破壊されてしまっていることを確認する。勾玉出土。
○７月９日（火）晴　１号墳、主体部半截掘下げ。半截面に礫が露出し、作業が難航しはじめたため、セクション図化を並行させつつ全面的に掘下げることとする。主体部土ふるい開始。管玉小玉出土。東および西トレンチ、セクション図化。２号墳、トレンチ掘下げ、周辺部葺石露出作業および葺石平面図測図。３号墳平面図測図。
○７月10日（水）曇後雨　１号墳、石室側と第２トレンチ側から入口部分掘下げを進める。葺石と同等大の河原石が幾重にも置かれており、閉塞石となる可能性が大きい。石室内入口側から人骨出土。２号墳、第１、３トレンチ内南側、石室から1.3m程の所に、直径約１mの集石を検出。３号墳、東、西、北方向トレンチ（第１～３）設定、掘下げ開始。午後雨が強くなったため作業中止。
○７月11日（木）雨　作業中止。
○７月12日（金）曇　１号墳出土の人骨鑑定を、信州大学医学部西沢寿晃先生にお願いし、出土状況を看ていただいた後、囲りの土とともに取り上げ、持って行っていただく。第２トレンチを西側に拡大し、閉塞を図化しつつ進むが、大きな根があり作業難航。２号墳、トレンチ、セクションおよび集石図化。石室内精査。３号墳、トレンチ、掘下げたところ、各トレンチ内から入頭大の河原石出土。３号墳も葺石古墳であった可能性を得る。
○７月13日（土）雨　作業中止。県史編纂常任委員桐原健先生に現地を看てい

禰ノ神２号古墳立木伐採

禰ノ神古墳石室内土ふるい作業

禰ノ神古墳桐原健氏指導

ただいた後、博物館にて古墳発掘全搬にわたる視点を御教示いただく。
○７月14日（日）晴　１号墳、石室入口部分の根除去作業を進める。石室内測図。石室入口から鏡出土。２号墳、石室内測図。中日新聞小林記者取材のため来訪。
○７月15日（月）晴　１号墳、閉塞部分の礫測図を並行させながら根除去作業を進める。２号墳石室測図を終了させ調査終了。３号墳、トレンチ、セクション図化、調査終了。
○７月16日（火）晴　次の調査地、君石遺跡への器材搬入のため作業中止。
○７月17日（水）快晴　１号墳、根除去。石室内測図終了。調査区域図測図により全調査終了。


禰ノ神古墳西沢寿晃氏指導

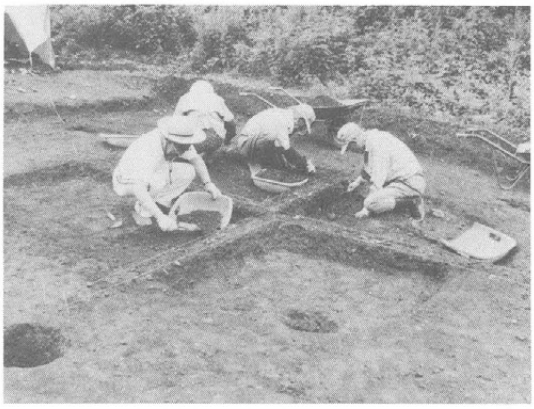
(2)栗木沢遺跡

○昭和60年６月20日（木）晴　発掘調査に先立ち表土の推積状況と遺物包含層を確認するために試掘坑を入れる。沢の河床であったことを伺わせる砂利層が続き、遺物皆無。
○６月21日（金）晴　ブルトーザーによる表土除去を行う。
○６月25日（火）雨のち曇　本日から発掘作業を開始する予定であったが、朝、降雨のため作業中止。10時頃、雨がやんだため現地へ発掘器材を搬入する。調査区中央付近で黒曜石フレークを採集する。
○６月26日（水）雨　雨天中止。
○６月27日（木）曇時々晴　本日より作業開始。市教委、小林学芸員の挨拶のあと、概要説明。終了後、テント設営と調査区周辺の草刈りを行う。午後、調査区東側（テント側）からジョレンによる削平作業を始める。砂利層のため作業捗らず。東南隅より黒曜石フレークが１点出土する。
○６月28日（金）雨　雨天中止。
○６月29日（土）曇　削平作業の続き。中央付近でフレーク２片出土。
○６月30日（日）雨　定休日。
○７月１日（月）晴　南東隅の最も高い所が調査区の中では比較的水の影響を受けていないためローム面まで一気に掘り下げる。その結果、住居址と思われる隈丸方形の落ち込みを複数検出。
○７月２日（火）雨のち曇　雨天中止。
○７月３日（水）曇のち雨　住居址と思われる落ち込みを再度削平したところ、１ヶ所を除き、他は全て小竪穴となる。昼近くに降雨が激しくなったため作業中止。
○７月４日（木）雨のち曇　雨天中止。
○７月５日（金）雨　雨天中止。
○７月６日（土）晴　住居址に十字のベルトを残し掘り下げ。住居址西側の小竪穴を第１号小竪穴とし半割、掘下げる。縄文土器片とチャート製石鏃出土。
○７月７日（日）雨　定休日。
○７月８日（月）曇時々小雨　住居址を掘り下げ、床面と壁を検出する。プランはやや不整の円形を示す。第２号・第３号小竪穴を半割し掘り下げる。
○７月９日（火）晴　住居址のセクション図化。ベルトをはずして平面図測図、写真撮り。小竪穴群のセクション図化。完掘し平面図測図、写真撮り。調査地区全体図の測図および全体写真撮り。
○７月10日（水）曇　テント取り壊し。器材撤収。

栗木沢遺跡遺構検出作業

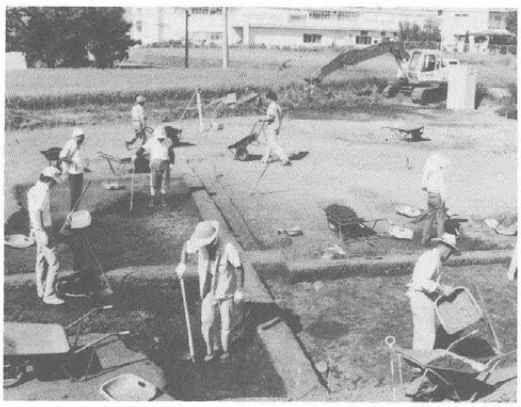
(3)砂田遺跡

○昭和60年８月19日（月）晴　バックホーによる表土除去。器材搬入。
○８月20日（火）晴　昨日に引き続きバックホーによる表土除去。中世陶器片、縄文土器片、フレーク出土。テント設営。
○８月21日（水）晴　本日より発掘作業開始。小林学芸員、鳥羽主事より発掘日程、作業方法等の説明があったのち、東側からジョレンによる掘り下げを行なう。中央付近よりフレーク多数出土。昨日に引き続き西側の表土除去をバックホーで行なう。
○８月22日（木）晴　削平作業の続き、ローム面は東側で浅いが、西側へ行くに従って自然傾斜をもつ。石錐、石匙、剥片石器、縄文中・晩期土器片出土。
○８月23日（金）晴　東側の畑は引き続き削平作業。フレーク数点出土。西側

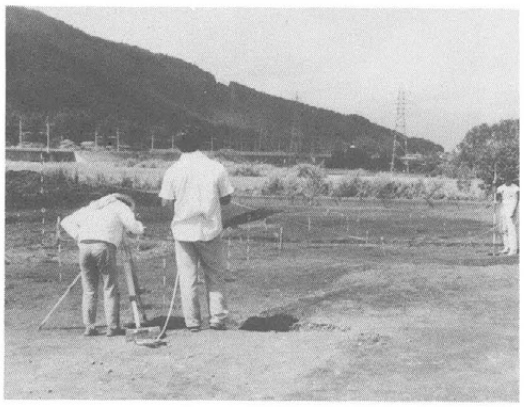

栗木沢遺跡住居址掘り下げ

の畑の削平に入ったがローム面を確認できず、かなり深いことがわかる。須恵器、有茎石鏃、フレーク出土。
○８月24日（晴）　削平作業続き。２例目の有茎石鏃出土。
○８月25日（日）晴　定休日。
○８月26日（月）晴　東側の畑で黒色落ち込み域の性格がはっきりしないため、50cm幅のトレンチを十文字に入れ掘り下げる。西側の畑は掘り下げ継続。
○８月27日（火）晴　トレンチ掘削の結果、遺構、遺物が皆無だったため、ベルトを残し全面掘り下げ開始。中央付近らしきものの平面図測図、写真撮り。西側の畑も黒土の堆積状況を確認するため幅１mのトレンチを十字に入れ、掘り下げる。５m間隔のグリッド設定。
○８月28日（水）晴　中央やや南寄りより完形土師器杯、縄文中期把手、中世陶器片出土。集石遺構の北側半割掘り下げ。西側の畑のトレンチは－15～20cmで湧水面を確認。
○８月29日（木）晴　集石遺構のセクション写真撮り。終了後完掘する。西側の畑のトレンチ東側の掘り下げ。出土遺物をグリッドごとに取り上げ。
○８月30日（金）晴　中央ベルトのセクション図化。終了後ベルトをはずし。集石遺構の完掘、平面図測図。午後、塩尻中学校生徒見学。
○８月31日（土）晴　ピットの検出状況から掘立柱建物址の存在が伺ええため、中央の土手をはずし掘り下げる。その結果、２間×３間と４間×５間のものがそれぞれ１軒ずつ検出される。
○9月１日（日）雨　定休日。
○９月２日（月）晴　建物址の平面図測図。調査区全体図測図、全体写真撮り。本日をもって現場における作業を終了する。

(1)～(3)の各遺跡の整理作業は８月～２月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、註記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の拓本、実測、写真撮り、図版作成。また報告書の原稿執筆を行う。



砂田遺跡掘り下げ



砂田遺跡全体図測図

第４節　遺跡の状況と面積

遺跡名	場　　所	現 況	種 類	全体面積	事業対称面　積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
禰　ノ　神	塩尻市大字柿沢字禰ノ神371,374	山　林	古　墳	円墳３基	円墳３基	円墳１基	円墳３基	円 1,200,000
栗　木　沢	塩尻市大字塩尻町字栗木沢925-1	畑	包蔵地	m² 8.000	m² 2,000	m² 100	m² 540	円 500,000
砂　　田	塩尻市大字大小屋字道成海道50-1	水　田	包蔵地	m² 15,000	m² 12,000	m² 200	m² 760	円 1,500,000

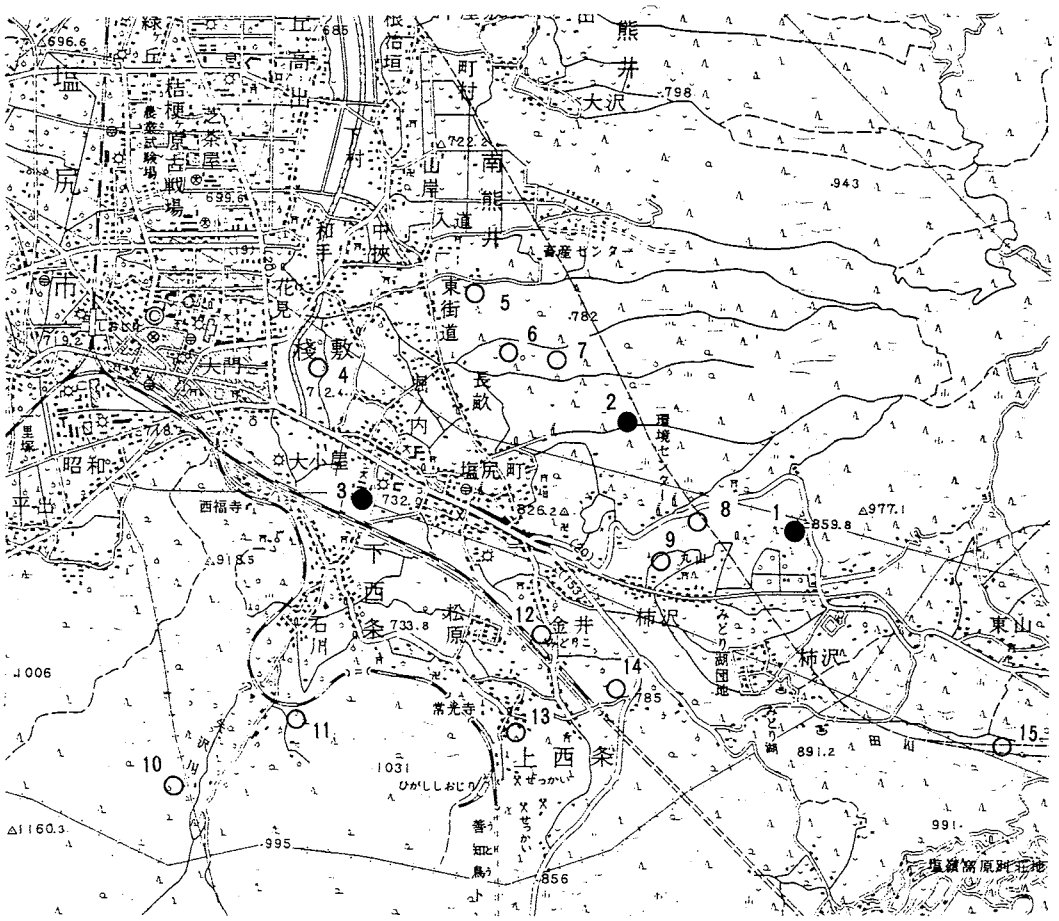
第１表　発掘調査経過表

遺跡名＼月	6	7	8	9	10～2	主な遺構	主な遺物
禰ノ神古墳	11 17 発掘			遺物整理 図面作成 原稿執筆		円墳３基（葺石古墳）	青銅製鏡、金環、馬具、直刀、刀子、勾玉、管玉、小玉、土師器、須恵器 縄文早期押型文土器、石器
栗木沢	20 10 発掘			遺物整理 図面作成 原稿執筆		縄文時代住居址　1 小竪穴　3	縄文時代土器、石器 土師器
砂田		19 2 発掘		遺物整理 図面作成 原稿執筆		中世建物址　2 小竪穴　1	縄文中期土器、石器 縄文晩期～弥生土器 中世土器

第II章　遺跡周辺の環境

第1節　自然環境（第1図）

塩尻東地区は塩尻市街地の東側を流れる田川から東は塩尻峠まで、南は伊那路へ連絡する善知鳥峠までを地区域としている。ここは中山道（国道20号線）と三州街道（国道153号線）の分岐点として交通の要所となり、塩尻宿を中心として繁栄してきた。



1 禰ノ神古墳群　2 栗木沢遺跡　3 砂田遺跡　4 中島
5 向陽台　6 福沢　7 堂ノ前　8 御堂垣外　9 柿沢東
10久野井　11銭宮　12五輪堂　13焼町　14狐塚
15青木沢

第1図　遺跡位置図

地形的にみると塩嶺山塊に展開する広大な西向山麓斜面と田川によって形成された扇状地形からなり、その中を数本の小河川が開析流下している。扇状地は約4.5km、幅2kmの広大な規模を持ち、その扇端は下西条西福寺の付近から桟敷、入道部落に至る狭長な低窪地を挟んで奈良井川扇状地（桔梗ヶ台地）に連なっている。標高は扇頂で900m、扇端で710m、平均斜度3°である。

田川は東山山麓に源を発しており、塩尻峠の山間渓谷を西へ下り、中・下西条周辺で権現沢川、四沢川、矢沢川などを集めながら下西条の北側で向きを北に変え、松本平の東側を一直線に北流し奈良井川に合流している。（鳥羽嘉彦）

第2節　周辺遺跡（第1図）

今回発掘調査が実施された禰ノ神古墳、栗木沢・砂田遺跡の所在する塩尻東地区は筑摩山地山麓にあり、その裾を切るように田川が貫流している。付近一帯は松本平でも遺跡の稠密な地域の１つであり、先土器時代から中世にかけての数多くの遺跡が残されている。以下、時代を追って遺跡の在り方を概観したい。

先土器時代　昭和59年に発掘した青木沢で、ナイフ形石器、尖頭器、石刃、神子柴型石斧の出土があり、禰ノ神では尖頭器、柿沢では神子柴型尖頭器、掻器、石刃がそれぞれ出土している。塩尻峠中復にはかなり濃厚に該期遺跡の分布が認められる。

縄文時代　早期には八窪、向陽台で押型文期の住居址が、福沢では集石が発見されている。後半では堂の前で５軒の住居が発見され、７号住居址は長径13mの楕円大形住居で、該期の拠点的集落であったことがうかがえる。前期は社宮寺、御獄神社面などで土器片が採集されている程度で痕跡的である。中期にはここでも遺跡が急増し、大規模な遺跡も発見されている。柿沢東、焼町・峯畑・中島・堂の前・御堂垣外などで住居が発見され、特に柿沢東では中央に小竪穴を配しその周辺を住居群が取り囲む典型的な環状集落が掘り出されている。後期に入ると４軒の敷石住居が検出された御堂垣外が知られ、他に柿沢、ちんじゅなどで遺跡の採集がある。晩期に入ると、青木沢、堂の前、福沢、館、ちんじゅで土器、石器、土製品が出土しているが、遺構の発見はなく、遺物の量も多くない。

弥生時代　初期の遺物が福沢、ちんじゅ、銭宮、砂田で出土し、資料的に空白の時期がようやく埋まりつつある。中期の遺跡は少ないが、後期に下ると下西条を中心として幾つかの遺跡が分布している。久野井、砂田、西福寺前、大門３番町、中島、銅鐸を出土した柴宮があり、東山の青木沢でも土器が出土している。これらの遺跡はいずれも田川流域にあり、この河川が該期の人間活動に果した役割は大きかったことが分かる。

古墳時代　柿沢禰の神、上西条記常塚、狐塚、下西条銭宮１・２号など山麓部に古墳が築造され、久野井では住居も発見されている。古墳の数に比較し、その背景となった集落址の発見が少なく、今後の課題といえる。

奈良・平安時代　奈良時代の遺跡は殆んど見当らない。平安時代には剣ノ宮、久野井、栃久保、堂の前、福沢、栗木沢、樋口、中島で住居が発見されている。しかし、集落規模は小さく、平地に立地する平出、吉田向井、川西、丘中学校など大規模集落とは質的な差がある。拠点集落に付

属する分村、出作り集落的な性格をもったものかもしれない。

中世　中世に属する遺構も近年、除々に資料が集積しつつある。中島の館地、堂の前、砂田の建物址、剣の宮の墓壙など、多様な遺構が検出され、考古資料からの中世への発言もようやく可能になりつつあるといえる。（小林康男）

第Ⅲ章　調査遺跡

第１節　禰ノ神古墳

１　位置

(1)　位置と地形（第２図）

禰ノ神古墳は、塩尻市大字柿沢字禰ノ神地籍にある。旧塩尻宿東端にある国道20号線仲町交差点から塩尻峠方面へわずか登った所に、国道から分かれて柿沢の部落中央を一直線に東進する永井坂（旧中山道）があるが、この坂道が東山山麓沿いを走る国道20号線と再び接続する直前左手に広がる松本営林所塩尻苗畑北側に隣接した独立小丘陵上に禰ノ神古墳は存在する。

古墳の立地する台地上は標高860m前後で、台地下南側に広がる畑地との比高差は15mを計る。丘陵東側は畑地をはさんで国道20号線が走り、西には中央道長野線が隣接し、また北側では丘陵の急斜面下に田川の支流四沢川の流れが望まれる。東西に延びた台地は、東から北にかけて東山山麓の山並みを背負い、南から西側では眼前にゆるく西斜して広がる田畑を経て柿沢、金井地区から遠くは西条地区に至る盆地部を一望する高所に位置する。

(2)　過去の調査経過

古墳はその性格上、口承形態を経て人々の記憶に留まりやすい。当該古墳も例外でなく、現在に至るまで地元では知られた存在となっていた。「塩尻町誌」(1937) 中にも記載がみられるが、その一部は次のとおりである。

「子の神塚も亦四澤川に沿った丘陵上に築造されたものであるが、今は附近一帯の松林の中に包容されてゐて、原形を覗うに困難である。

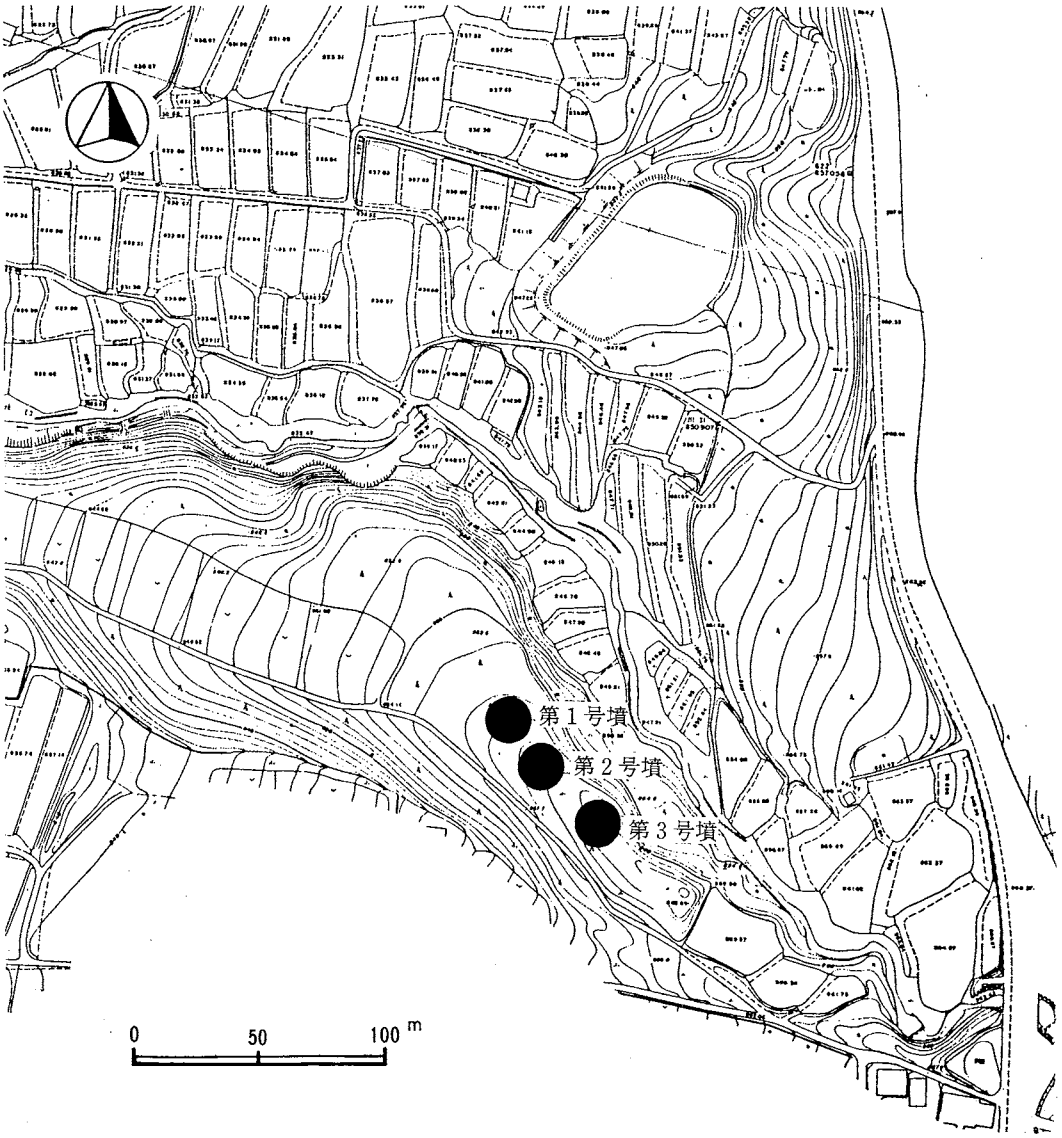
大体に於て東西の一直線上に三基竝列し、其の東端のものが最大で、西のものは小である。東端のものは十数年前に発掘されて石室用の石材は他に利用され、基の際出土せる鐵刀は今も堀内千萬藏先生によって保管せられてゐる。羨道は今尚痕跡を明らかにしてゐるが、長さ五米、巾二米ある、他の二基は発掘されていない。」

他にも同誌は、出土した鉄刀が50cmを測る「直刀」であること、四沢川北の柿沢後林地籍で検出されたと「塩尻地史」に記された「窯爐の遺址」と古墳との関連性などに言及し、今回の発掘における調査員一同の不明を補う一助をなした。

(3)　発掘区の設定

別記したとおり、調査当初最も西の古墳のみ発掘対象となっていたため、その後３基の古墳の存在が明らかになるに至り西から１、２、３号墳とし調査を進めた。

１号墳は、墳頂部の任意点から発掘当初入口部分と思われた墳丘西側の窪みを半截する形で基準線を設定したため、この方向で西東１～10、北南A～Lの２mグリッドを設定した。その後この



第２図　禰ノ神古墳群立地図

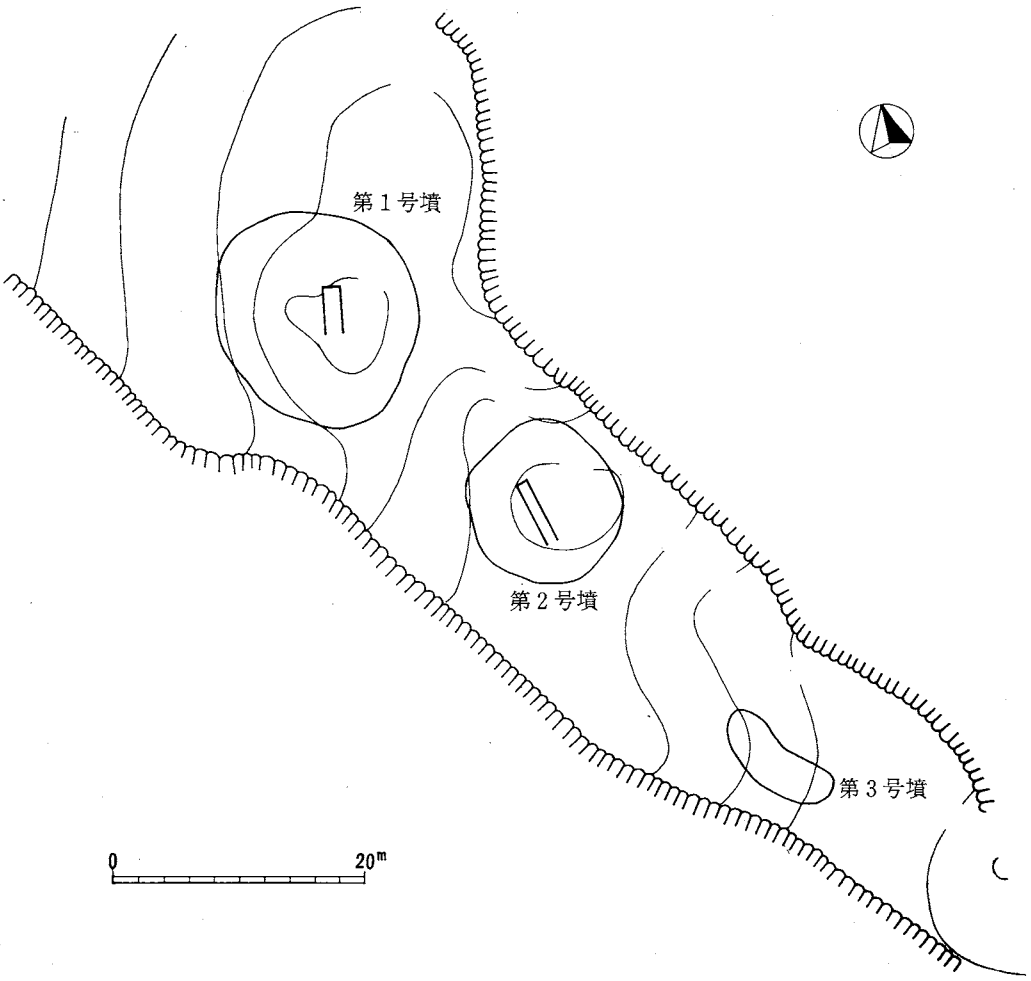
窪みが炭焼跡と判明したことにより、石室方向確認と墳丘状況記録化のために、墳丘を十字に切る形で１mトレンチを設定した。

２号墳は、腐食土除去作業中に石室側室と思われる礫列が検出されたため、この方向で２mグリッドを北南１～10、東西A～Hに設定し、墳丘の範囲確認と築造状況記録のため1.4m幅トレンチを十字に入れた。

３号墳は、すでに大幅な破壊、削平をうけていたため、東、西、北方向に70cm幅トレンチを設定し、墳丘の範囲と残存部の調査を行なった。

なお、本古墳の用字について、当初塩尻東土地改良区での使用に準じ「根ノ神」が用いられた。その後調査を進めるなかで、公図上この台地に「根ノ神」と「祢ノ神」があわせて使用されていること、「塩尻町誌」中で「禰ノ神」および「子ノ神」により記されていること、地元の方から「彌ノ神」であるとの指摘をうける等、現在にいたり多くの用字が付されていると判明し、幾分かの混乱をきたした。こうした中で、文献初出と思われる「塩尻地史」(1933) においては手書きのためか「禰」の略字が使用されていることから、続く「塩尻町誌」での「禰ノ神」を用いることとした。

(伊東直登)



第3図　禰ノ神古墳群全体図

2　調査概要（第３図）

塩尻東地区県営ほ場整備事業関連の中で行われた禰ノ神古墳緊急発掘調査は３基の古墳を対象として、調査を行った。調査された３古墳は、いずれも盗掘破壊されており、第１号・第２号墳は墳丘及び石室の築造状況を確認することができたが、第３号墳においては破壊が著しく墳丘状態は不明で、石室内部の床面と思われる敷石の一部を検出したのみであった。

出土遺物は第１号墳より鏡・金環・管玉・小玉の装身具、直刀・鉄鏃・刀子・轡・鞍の武具馬具の類、土器では須恵器の提瓶・高坏・短頸壺、土師器の坏・盌・短頸壺・蓋坏などが出土した。また縄文土器片も少量検出された。玄室内床面覆土にまとまった人骨が確認された。大部分が大腿骨で鑑定の結果、５体以上と推察された。墳丘の葺石も一部崩落していたが、その構築状態は明確にされた。

第２号墳は第１号墳に比べると墳丘も小さく出土遺物も少なかったが、小玉の出土量が多かった点が注目される。

第３号墳からの遺物は土師器・須恵器の土器片と勾玉１個出土したのみであった。

以上調査の概要であるが、第１号墳・第２号墳の葺石による墳丘の構築形態は松本平では後期古墳としては他に例のないものであり、また鏡も松本平で古墳からの出土の物としては４例目の発見であった。同一箇所に３基もの古墳が造られた点から長期間この地を支配していたかなりの有力者がいたものと思われる。時期は６世紀後半から７世紀前半と推定される。（市川二三夫）

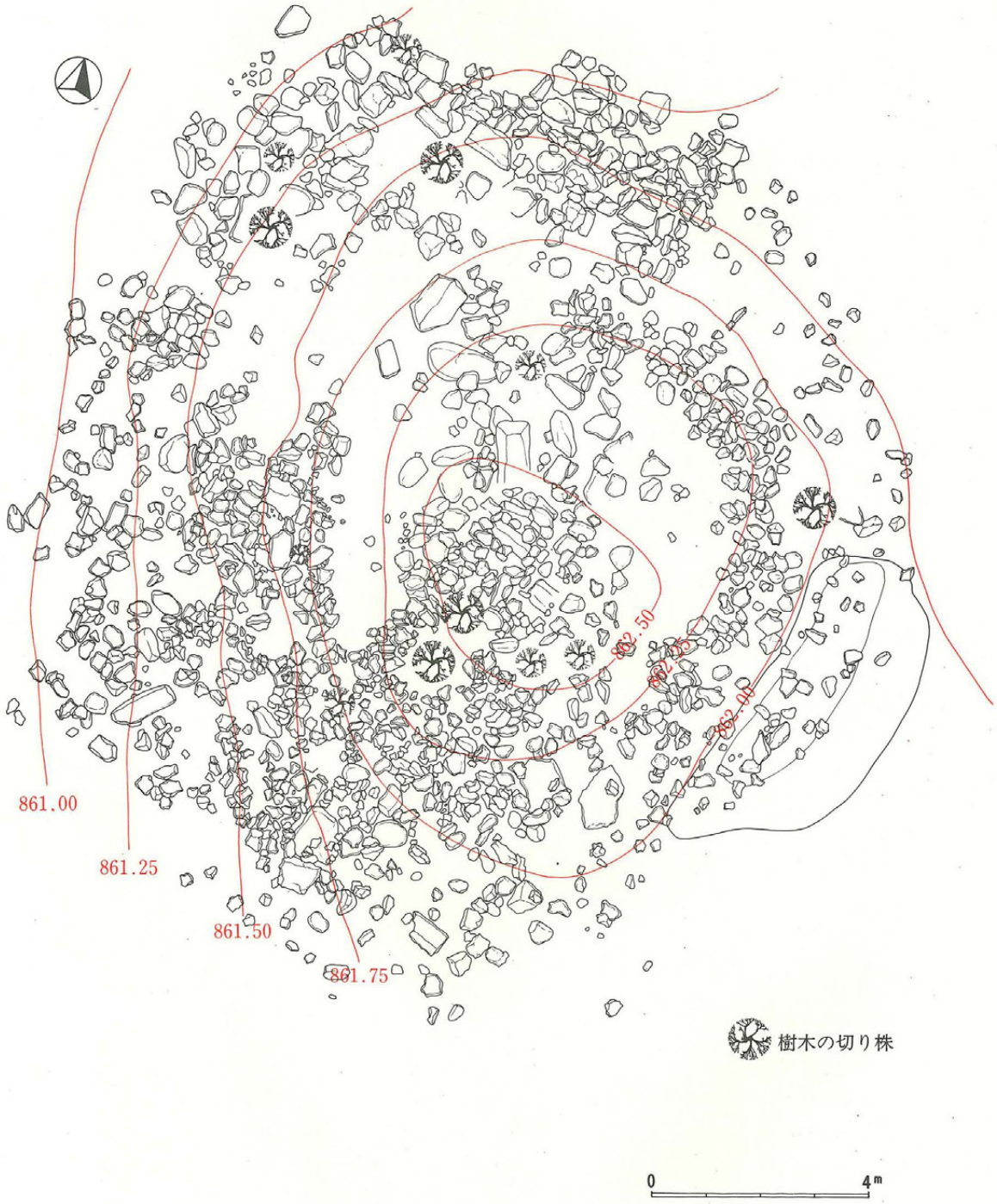
3　第１号墳

1）　墳丘（第４図、第５図）

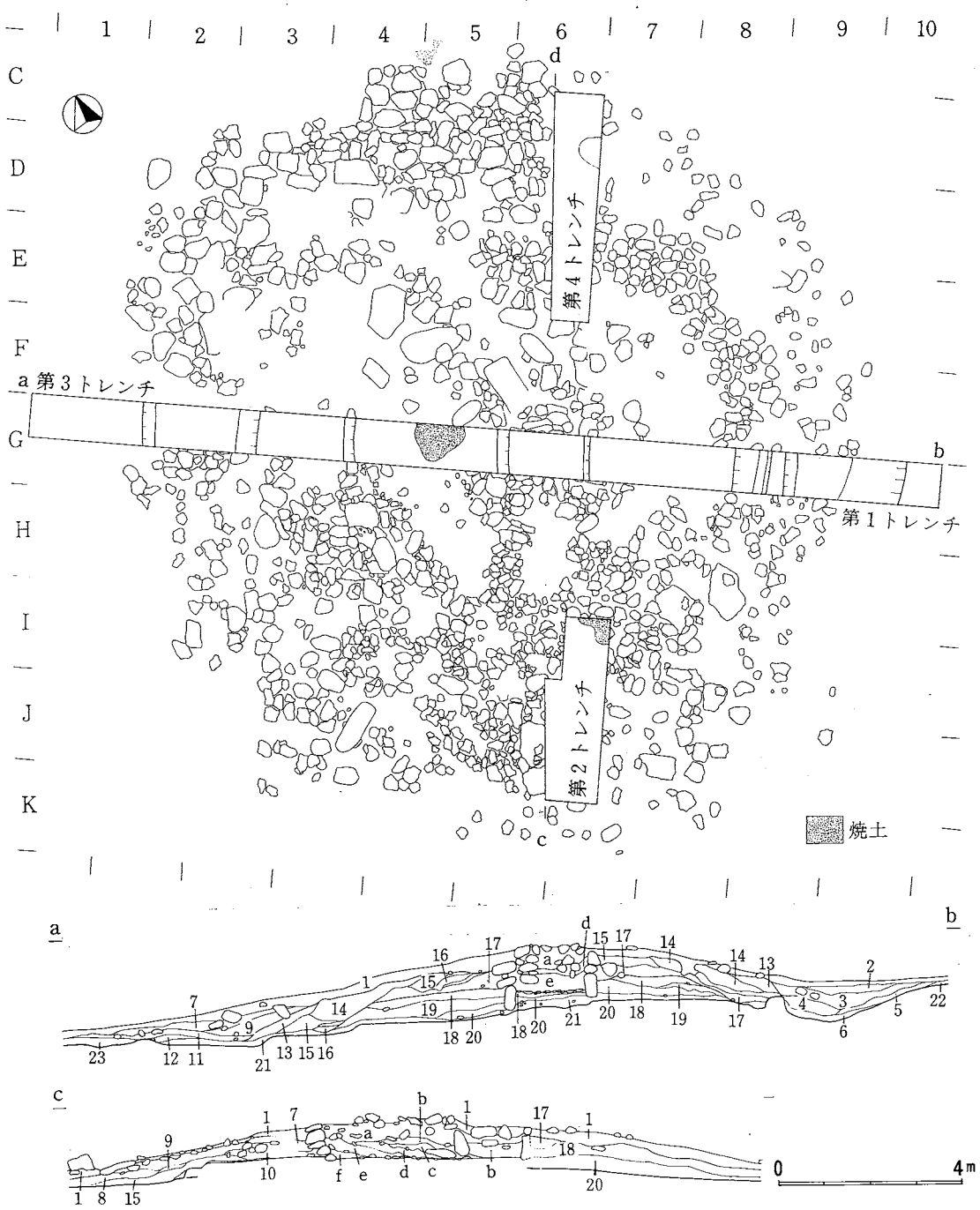
本古墳は３基中の西端に位置する。尾根筋上に立地し、墳頂部の現標高は862.76mを計る。すでに破壊を受けており、墳形にはかなりのくずれが見られる。しかし、平面形については葺石の偏在によって本来から不整形であり、二枚貝の形状に近い。規模は第１、第３トレンチで確認された地山の土堤状部分間で14.30mを計る。東側ではこの外側に最大幅3.30mの溝が掘られている。この溝は周溝として意図されたものと言うよりも、盛土の労力を軽減し墳形を整えるために尾根筋を切断したことによって生じたものと考えられる。すなわち、尾根筋の高位にあたる東側でのみ深く握削され、谷側へ向かうにしたがって浅くなり、第４及び第２トレンチでは消滅している。また、尾根筋の低位にあたる西側においても確認されなかった。溝の断面形態は墳丘側では墳形を整えるため急傾斜をなしており、反対側では尾根の傾斜に合わせ緩やかに立ちあがらせている。

次に、第１、第３トレンチでの状況から墳丘構築の工程を順次追ってみよう。

墳丘下の整形はローム層に及んでいる。まず、盛土の流出を抑えるため地山の傾斜を段状にし、数段の平担面を作り出している。さらに東側溝への流出に対しては、墳丘側の地山を土堤状に堀り残し、加えてその内側に浅い溝を掘っている。西側においても、最下段の平担面外側が土堤状に掘り残されている。



第４図　第１号墳全体図



第1層 表　　土
第2層 黒褐色土
第3層　〃　（2層より黒く、ローム粒子を混入）
第4層 暗褐色土
第5層 褐色土（ローム粒子を多量に混入し、しまり有）
第6層 暗黄褐色土（ロームブロックを多量に混入）
第7層 暗褐色土（しまり弱）
第8層 茶褐色土（ローム粒子混入）
第9層 暗褐色土（しまり有）
第10層 褐色土（ローム粒子、砂を混入する）
第11層 黒褐色土
第12層 褐色土
第13層　〃　（粘性、しまり有、ローム粒子混入）
第14層 （暗）黄褐色土（ロームブロック粒子を多量混入）
第15層 暗褐色（粘性・しまり有）
第16層 暗褐色土と黄褐色土のサンドイッチ層
第17層 褐色土（ローム粒子、黒色土粒子混入、硅少量混入）
第18層 黒褐色土（粘性・ほり強、礫混入）
第19層 暗褐色土（　〃　）
第20層 褐色土（粘性・しまり強、礫混入）
第21層 黄褐色土（粘性、しまり強、褐色土粒子がブロック状に混入、礫混入）
≪石室内土層≫
第a層 暗褐色土（粘性、しまり弱）
第b層
第c層 （暗）黄褐色土（ロームブロック混入）
第d層 暗褐色土（小砂利混入）
第e層 暗褐色土（ローム粒子少量混入）
第f層 褐色土（ローム粒子、小砂利混入）

第5図　第1号墳墳丘図

盛土の最下層は、ローム土に拳大の礫などを混在させた土から成っている。この層の上面では焼土が３ケ所で検出され、また同層中から鏡片が１点出土した。このこのは、地山の整形後、石室の構築に先立って何らかの祭式が行なわれた可能性を示していよう。石室の基礎となる石は同層上に設置されている。石室の重量に対して強度を保障するため地山に近いレベルに裾えられており、東西で礎石のレベル差が生じている。その関係上、東側では礎石がそのまま壁石に利用されている。

第18層～第21層は石室の基壇となる部分にあたり、各層とも粘性の強い土質を示し拳大の礫を混入させている。第18層上面、石室の床礫直下においても鏡片の出土があった。第13層～第17層は石室の壁石を積み上げるとともに順次盛られたものである。石室の裏込めにあたる部分は、礫が多くなる傾向は認められるものの、多量の礫を詰め込んだり、版築を行なうなどの処置はとられていない。礎石同様、石室の構築はかなり簡略化されて行なわれたようである。盛土は第７層～第12層につづくが、１部で地山の土堤状部分の外側へ広がっており、本来の墳丘が若干流出しているようである。第１層～第６層は盛土の崩壊土及び埋没土である。墳頂部の盛土は大幅に削られており、石室直下の地山面から現存する盛土の最高部までの厚さは1.32mにすぎない。

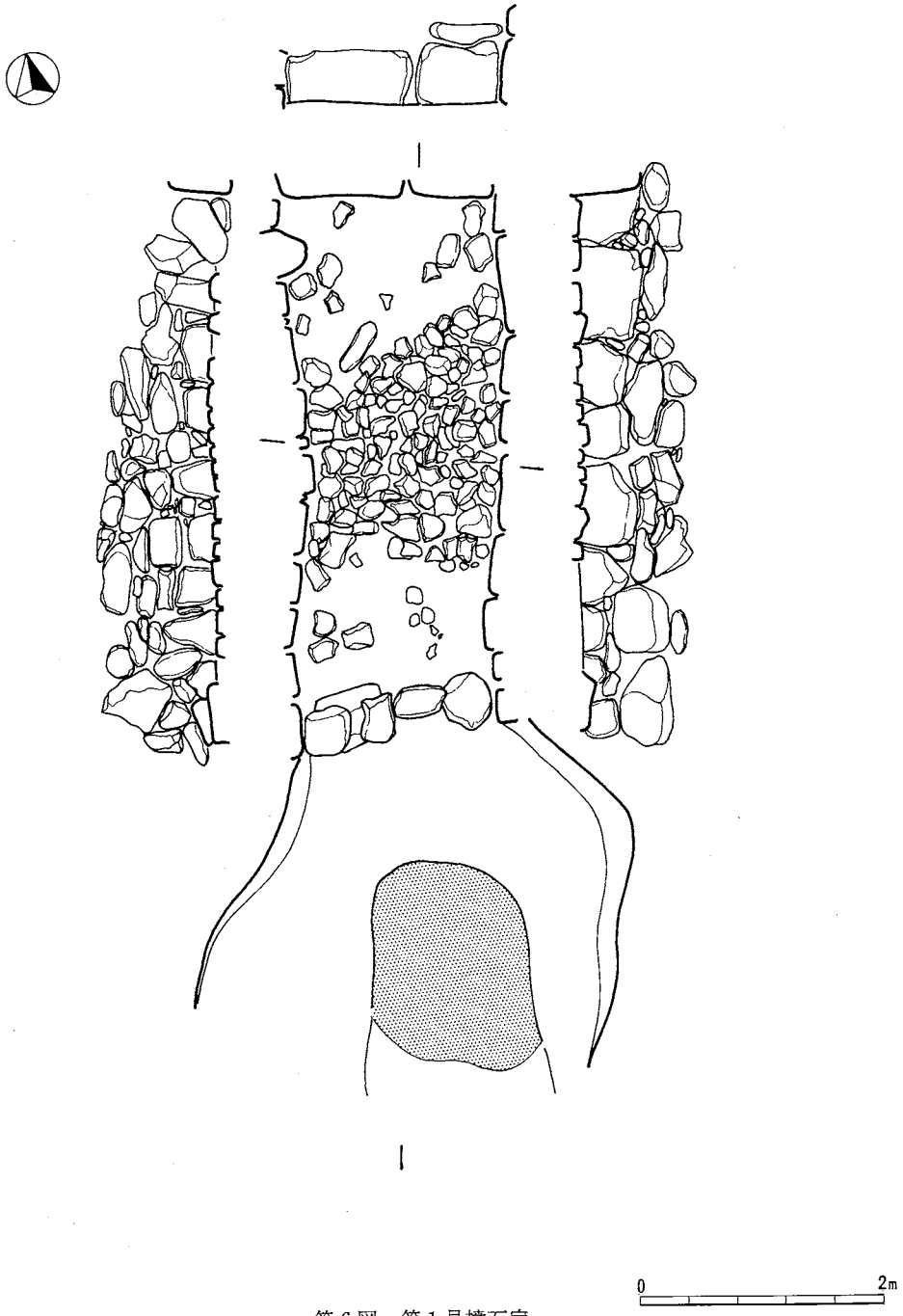
盛土の外表は、ほぼ全面に渡って葺石が貼られている。葺石の範囲は大きく２つに分けられ、帯状に敷設されている。一方は墳丘の東側部分で、幅狭の帯状を呈している。北東側で良好な残存状況を示している。他方は西側部分である。この方角は当時の集落が道に面していたと考えられ、葺石の帯が幅広くなっている上、使用されている個々の礫も東側のものに比べて大形のものが多い。また、石室付近及び石室内に河原石が落ち込んでおり、墳頂部にも葺石が存在した可能性を示している。

葺石の間からは須恵器片、土師器片をはじめ、副葬品であったと思われる管玉や鉄製品が散乱した状態で出土した。これらは墳丘の南側半分に集中する傾向が認められるものの、原位置を保つているとは考えにくいものが多い。

２）　内部主体（第６図）

墳丘のほぼ中央に存在し、入口をほぼ南に向ける横穴式石室である。主軸方向はN－８°－Eである。破壊が及んでおり、天井部や壁上部の構造は不明である。平面形態は玄室と羨道の区別がない無袖式で、中央付近からやや西側にゆがんでいる。玄門の敷居石内側から奥壁まで4.00m、奥壁幅1.70m、玄門幅1.54mを計る。

壁は面取りを行なっているものと自然礫をそのまま使用しているものがあり、大形礫の間に小礫を詰めて安定を計っている。残存している範囲ではほぼ垂直に立ち上がっており、上部で持ち送りになるか否かは判然としない。もっとも残りの良い所で床面から0.94mを計る。壁面には酸化鉄の付着が認められる。壁石の石室内を向く面に付着が顕著であることや類例が存在することから、意図的に塗付したかあるいは自然に付着していた礫を選択して運びこんだ可能性が考えられる。



第6図　第1号墳石室

床面には、入口部と奥壁付近を除いて平担に加工した礫や自然礫を敷いている。床面が荒らされており、本来の敷石の範囲がどこまで広がっていたかは不明である。また、入口付近において

赤色顔料が礫のない床面と同一レベルで確認された。

埋没土中には多量の礫が転落しており、攪乱が一部床面にまで達っしているため、遺物は散乱した状態で各層位で認められた。埋没土中及び床面出土遺物は第７～11図・第２～４表のとおりである。特に注目すべき点は、第b層における集骨である。その成因としては、石室に手が加えられた際主だった骨をまとめて埋め戻したか、あるいはまったく後世のものであるかなどが考えられよう。

次に閉塞施設について見よう。玄門の閉塞はまず100×48×35cmの大形礫を敷居石上に乗せて封鎖をはじめ、順次外側に向かって主に人頭大の礫を積み上げ、最終的には前庭部の大半を礫で埋める形をとっている。また、礫と礫のすき間などにはロームや砂が多く用いられており、若干の土器片も認められた。

３）　前庭部

多量の閉塞石を取りのぞくと、通路状の窪地が3.3×2.5mの範囲で認められ、石室床面とほぼ同レベルの底面には小砂利が敷かれている。　（寺内隆夫）

４）　遺物

(1)装身具（第８図）

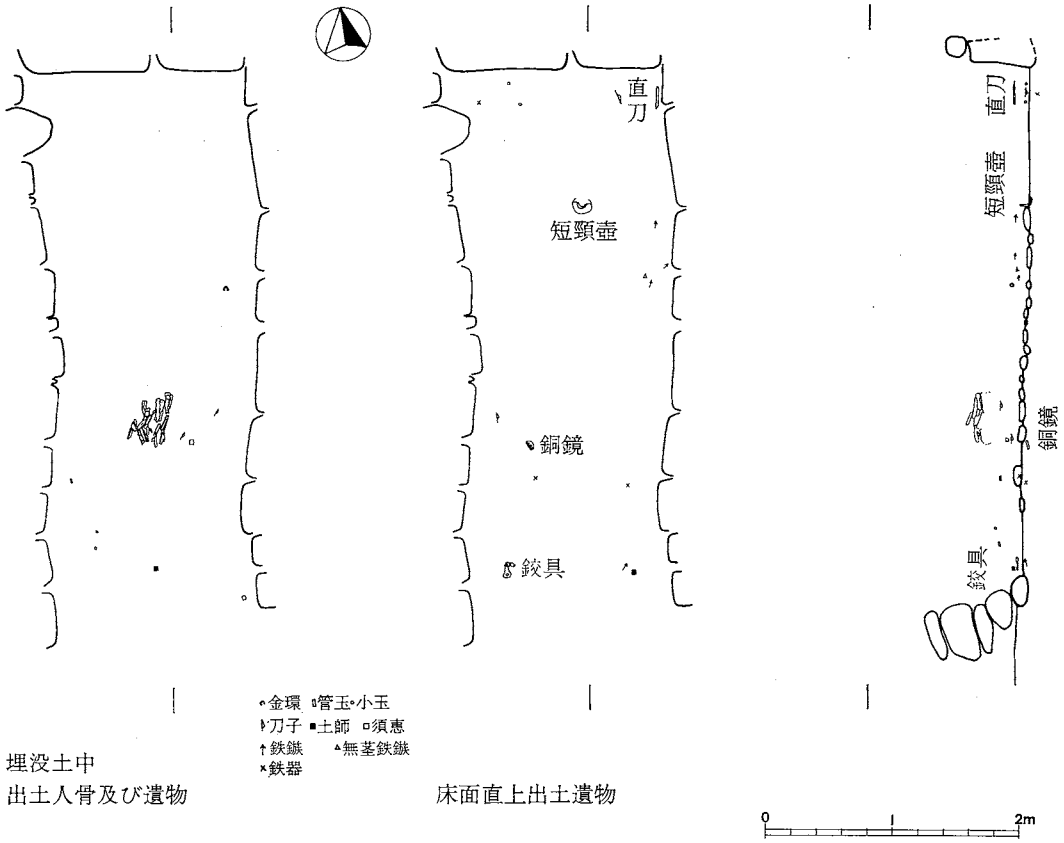
本古墳からは、金環、管玉、丸玉、小玉の計59点のほか、性格不明のもの１点が出土した。盗掘による破壊のため、石室内全体から盗掘侵入箇所の外にいたる部分まで広範囲にわたってその大部分を出土した。また一部は墳丘南側中復からの出土をみている。

金環（第８図１～２）石室内から２点の出土をみた。１は長径29.0mmを計る大形品で、２は長径19.2mmの小形品であり、両方とも保存状態が良好で現在でも全体に光沢を放っている。

管玉（第８図３～９）合計７個出土した。緑色から深緑色の碧玉を使用し、大きさは長さが最大で32.7mm、最小で20.1mm、直径が最大12.0mm、最小7.0mmを計る。孔は何れも一方が大きく他方へ小さくなる円錘形をなしている。３は盗掘侵入箇所の外脇から出土したため盗掘の際運び出されたものと思われるが、６、９は墳丘南側中復の葺石下から出土し、盗掘に伴うものとするか、あるいは同箇所で多く出土さた土器類と同様に古墳の周囲に置かれていたものと推察しうるかは判然としない。

丸玉（第８図10～13）４顆が石室内から出土し、いずれも硬砂岩を使用し黒色を呈している。大きさは厚さ8.8～9.2mm、直径8.1～9.3mmでほぼ同一規格で作られている。

小玉（第８図14～59）合計46顆が出土し、43、44が墳丘葺石下で出土したほかは石室内からの出土である。大きさ、形状は材質により違いをみせている。計測値は第２表に示したが、ガラス36顆、硬砂岩６顆、ヒスイ３顆、チャート１顆で、39、45、47、48、52には貫通しない穿孔痕が見られた。



第７図　第１号石室内遺物出土状態図

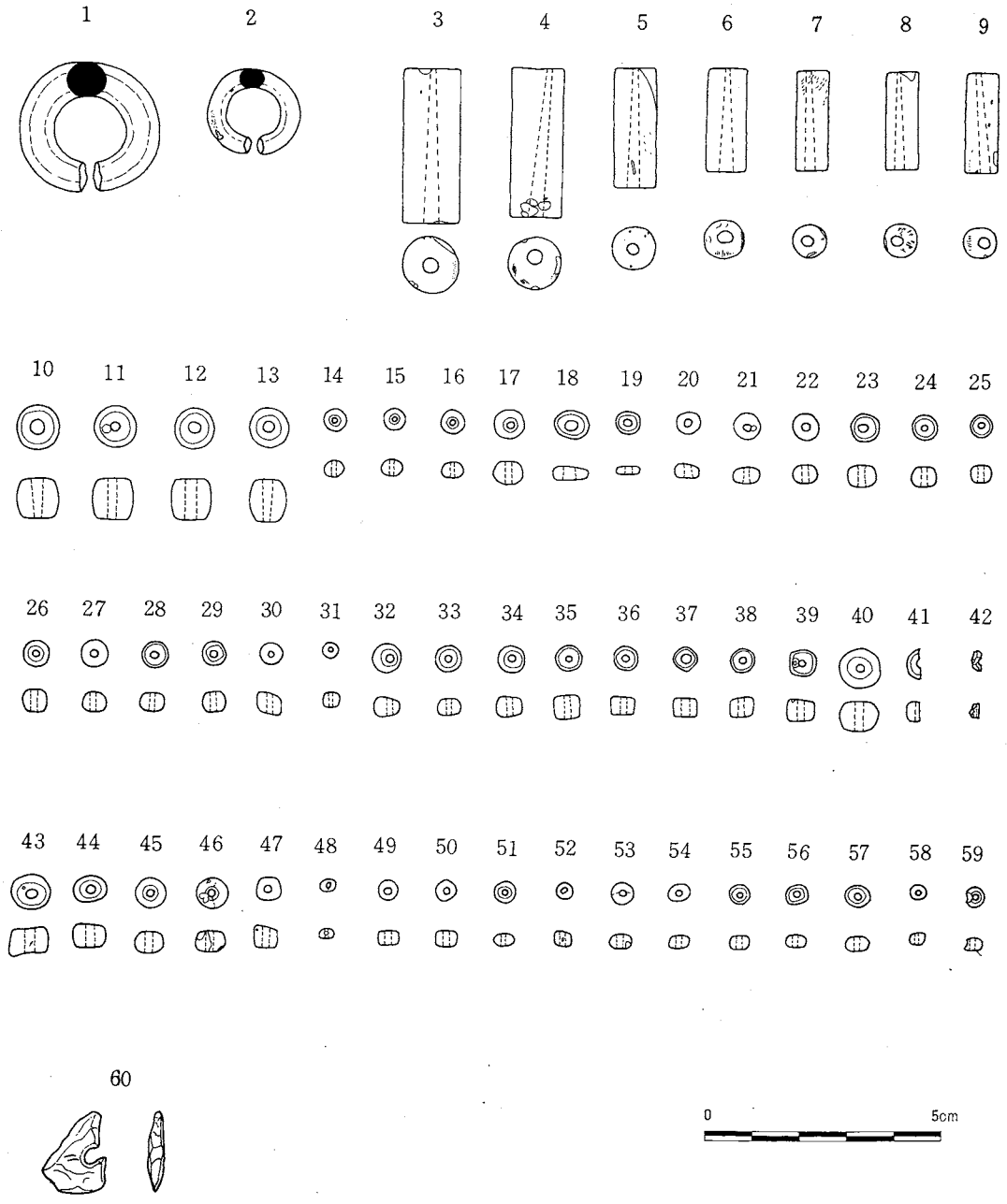
その他（第８図60）石室内から出土した。泥岩が使用され、穿孔がみとめられるが周囲に破損をうけ、本来の形状は不明である。　（伊東直登）

(2)鏡（図版）

鏡は石室内および石室外の２ケ所から出土した。石室内からは鏡の半分が出土し、石室外からは縁の部分が出土した。石室内のものは入口側、閉塞石から１mほど奥より、西側壁ぎわからの出土で、床面上の礫敷の礫に半分ほど埋まっていた。裏面が上になっていた。石室外のものは、西側壁ぎわからの出土で、封土最下部ないし地山上から発見された。

出土した鏡は、全面に火熱を受けており、破損が著しい。面径9.0cm、鈕高0.82cm、鈕径1.55cm、鈕孔の最大径0.6cmである。淡青緑色を呈し、鏡背は損傷が著しく、文様が失なわれているが、部分的に文様がうかがえるところもある。外区は巾約1.3cmの平縁に接して外向鋸歯文帯があり、これから0.7cm内側に櫛歯文がめぐり、内区文様は明確さを欠く。来年度、東京国立文化財研究所にて保存処理および鉛同位体・サビ・材質の分析を行うことになっているので、別の機会に詳細な報告をしたい。

（小林康男）



第８図　第１号墳出土装身具

(3)鉄器（第９図、第10図）

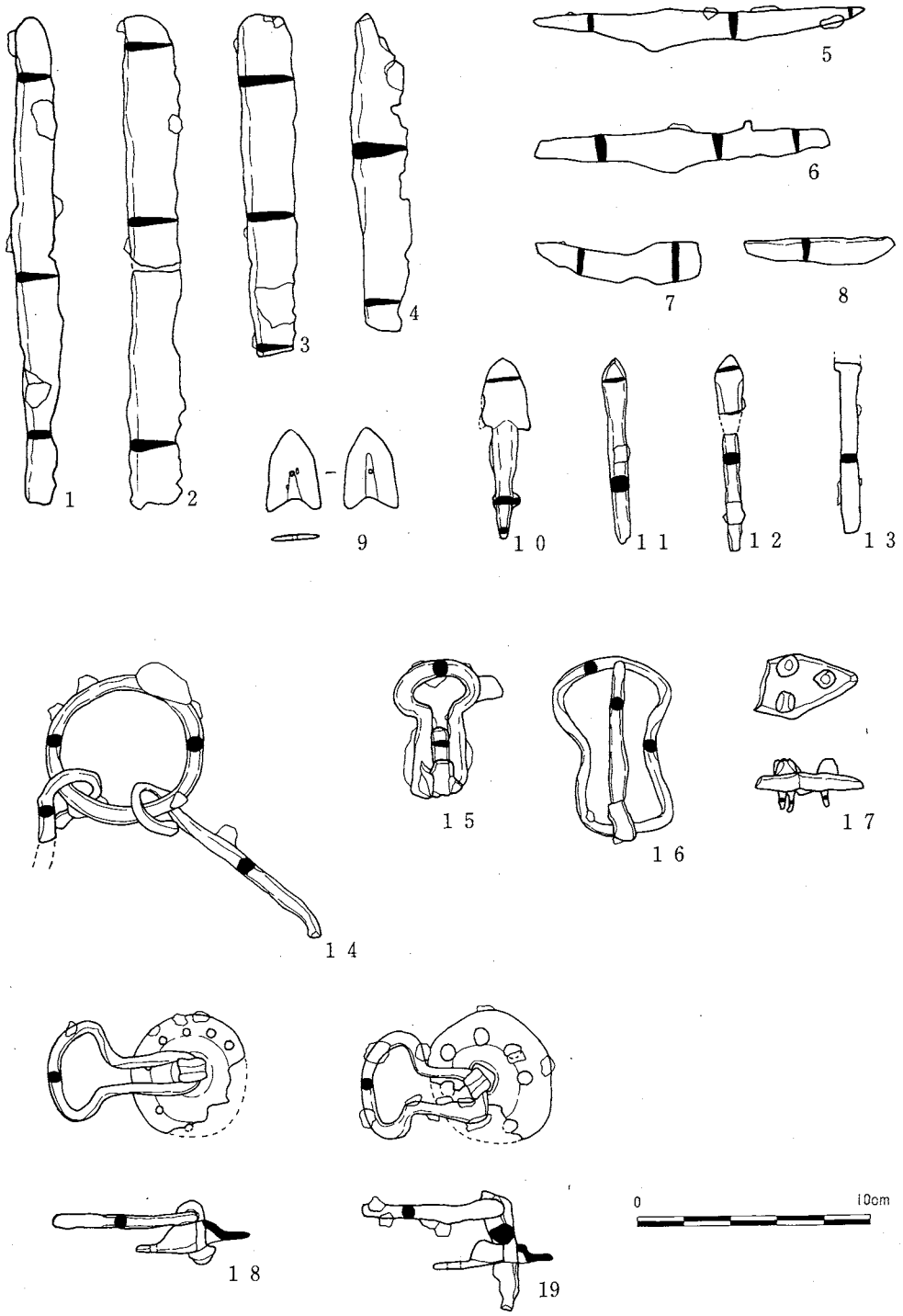
第１号墳において、武器類では直刀４、刀子４、鉄鏃５(無茎１、有茎４)、馬具類では轡１、鞍２、鉸具３、飾り金具１が出土している。他に種別分類が不可能な鉄片が多数出土しているが本稿最後で扱う２点以外、すべてが細片である。ここで取り扱う鉄器中、墳丘盛土より出土したものも

第2表　禰ノ神1号墳出土装身具一覧表

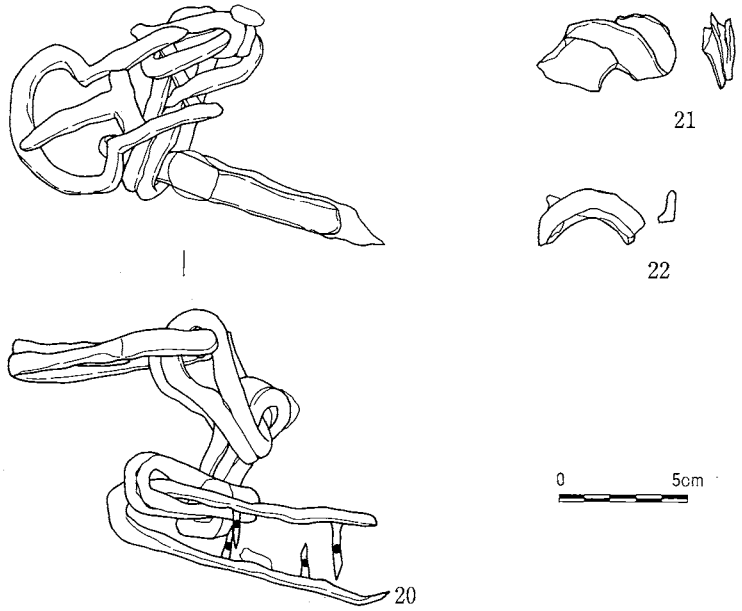
番号	径(mm)	高(mm)	材　質	色調	備　　考	番号	径(mm)	高(mm)	材　質	色調	備　　考
1	29.0	7.2			金環	31	4.1	2.9	〃	〃	
2	19.2	6.0			〃	32	6.2	4.0	〃	〃	
3	12.0	32.7	碧　玉	深緑	管玉,墳丘部出土	33	5.8	3.5	〃	〃	
4	11.2	31.1	〃	〃	〃	34	6.0	4.3	〃	〃	
5	9.3	24.5	〃	〃	〃	35	5.4	4.4	〃	〃	
6	8.3	21.8	〃	〃	〃　〃	36	5.5	4.1	〃	〃	
7	7.0	20.8	〃	緑	〃	37	5.6	3.1	〃	〃	
8	7.0	20.1	〃	深緑	〃	38	5.2	3.3	〃	〃	
9	7.6	23.5	〃	〃	〃　〃	39	6.5	4.4	〃	〃	
10	9.3	8.9	硬砂岩	黒	丸玉	40	8.7	5.7	〃	〃	
11	8.7	9.0	〃	〃	〃	41	6.5	4.0	〃	〃	
12	8.4	9.2	〃	〃	〃	42	4.7	3.5	〃	〃	
13	8.1	8.8	〃	〃	〃	43	8.4	5.6	〃	〃	墳丘部出土
14	4.6	3.8	〃	〃	以下59迄小玉	44	6.9	4.8	〃	〃	〃
15	4.6	3.8	〃	〃		45	6.1	4.4	ヒスイ	水色	
16	5.0	3.7	〃	〃		46	6.2	4.5	〃	〃	
17	6.6	5.0	〃	〃		47	5.7	5.0	〃	〃	
18	7.2	2.9	ガラス	藍色		48	3.7	2.0	チャート	赤	
19	5.1	1.9	〃	〃		49	4.3	3.0	硬砂岩	黒	
20	4.6	3.0	〃	〃		50	4.3	2.5	〃	〃	
21	5.5	3.6	〃	〃		51	4.3	2.9	ガラス	水色	
22	5.3	4.0	〃	〃		52	3.6	3.2	〃	〃	
23	5.8	4.7	〃	〃		53	4.4	2.8	〃	〃	
24	5.1	4.0	〃	〃		54	4.5	2.9	〃	〃	
25	4.6	3.6	〃	〃		55	4.4	3.2	〃	〃	
26	5.3	4.2	〃	〃		56	4.6	2.7	〃	〃	
27	5.6	3.9	〃	〃		57	5.4	3.2	〃	青	
28	5.3	3.8	〃	〃		58	3.8	3.3	〃	青緑	
29	5.3	4.3	〃	〃		59	4.4	2.6	〃	青	
30	5.2	4.5	〃	〃		60	17.4	3.4	泥　岩	灰色	性格不明

多数あるが、墳丘北側を除く全面より散在して出土しており、古墳破壊時における攪乱によるものと思われる。以下、武器類と馬具類に二分して詳細を述べる。

武器類　直刀1～4は何れも欠損品ではあるが、現寸から判断するに一般的な直刀より短小である。これら4口のうち直刀1だけが石室内出土である。これは石室内埋没土最下層、奥壁近くの東側側壁に沿って出土し、追葬時に隅に寄せられた可能性が強い。刀子5、6は残存度が高く前者は完形品である。鉄鏃4は無茎鉄鏃であり、基部に扶りを有する。形状は五角形を呈し、中央には1つの孔が穿たれている。また木質部も付着しており、比較的保存状態が良かったと言える。本墳出土の有茎鉄鏃中、図示し得るものは10～13の4本のみである。10は平根鏃であり、



第９図　第１号墳出土鉄器(1)



第10図　第１号墳出土鉄器(2)

第３表　第１号墳鉄器観察表

番号	発掘区	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
1	石室内	直刀	21.0	1.9	0.4	
2	墳丘 G－9	〃	21.4	2.6	0.6	
3	〃	〃	14.5	2.1	0.6	
4	〃	〃	13.8	2.3	0.8	
5	石室内	刀子	14.2	1.7	0.4	完存品
6	〃	〃	12.7	2.0	0.4	
7	〃	〃	7.1	1.8	0.3	
8	墳丘 G－9	〃	6.5	1.1	0.4	
9	石室内	鉄鏃（無茎）	3.5	2.3	0.2	孔1
10	〃	〃（有茎）	7.8	2.0	0.2	
11	墳丘 G－9	〃 〃	8.1	1.1	0.2	
12	石室内	〃 〃	8.4	1.2	0.2	
13	墳丘 H－9	〃 〃	7.3	1.1	0.2	
14	墳丘 G－9	轡				
15	〃 西側	鈴具				
16	〃	〃				
17	石室内	飾り金具				
18	墳丘南側	鞍				
19	〃 西側	〃				
20	石室内	鈴具				
21	〃	不明				
22	〃	〃				

逆刺を有する。11～13は尖根鏃であり、明確な稜は認められない。

馬具類

本墳より出土した馬具類は飾り金具17、鉸具20が石室内より出土した他、すべて墳丘からの出土であり、かなりの攪乱を窺せる。また鞍が２点出土しており、これは副葬品として鞍が納められたことを示すものと言えよう。　（龍堅　守）

⑷　土器（第11図、等12図、第13図）

土師器

坏（１～５）　口径12.1cm・器高4.45cm～6.3cmで４タイプに分類できる。まず第１は底部から立ち上がりすぐに直線的に外へ開くもの（１、２）、第２は底径が大きく、内弯しながら立ちすがり浅いもの（３）、第３は底形が小さく内弯しながらたちあがり深いもの（４）、第４は丸底で内弯しながらたちあがり、体部中頃でわずかにくびれ直線的に開くもの（５）がある。調整は、内外ともにタテヨコのヘラミガキが行なわれている。５以外は内黒である。

高坏（６、７）

脚部が高いものと低いものがある。前者は、１の坏に脚が付けられたもので脚部はヘラミガキが行なわれており内面はナデ調整がされている。ゆるやかに外反して脚端部へ至る。後者は脚部のみで端部付近で直線的に開く。外面はヘラミガキで内面はヘラ削りが行なわれており、受部は内黒である。

須恵器

蓋坏（蓋）（８～10）　口径13.25cm～15.45cm、器高5.25cmで天井は丸い感じを残し、肩部にみられる稜は退化しつつある。口縁端部は外方へ開き、口端部が丸くつくられ、内側に段がついている。

坏身（11～17）　口径12.6cm、13.65cm、器高5.15cm～5.3cmで法量は近接している。全体に形がよくととのっており高さに対し、やや浅い。薄手である。立ち上がりは内傾し、途中から直立する。内面にわずかに段がみられる。

高坏（18～21）　無蓋のもので、坏部の口縁が直角に立ち上がり、器高に対し深いもの（19）と、ゆるやかに立ち上がり、口縁が水平に近い状態で外反し、浅いもの（20）とに分けられる。脚部は、外部に１条又２条の沈線を配し、２方に２段スカシをつけている。

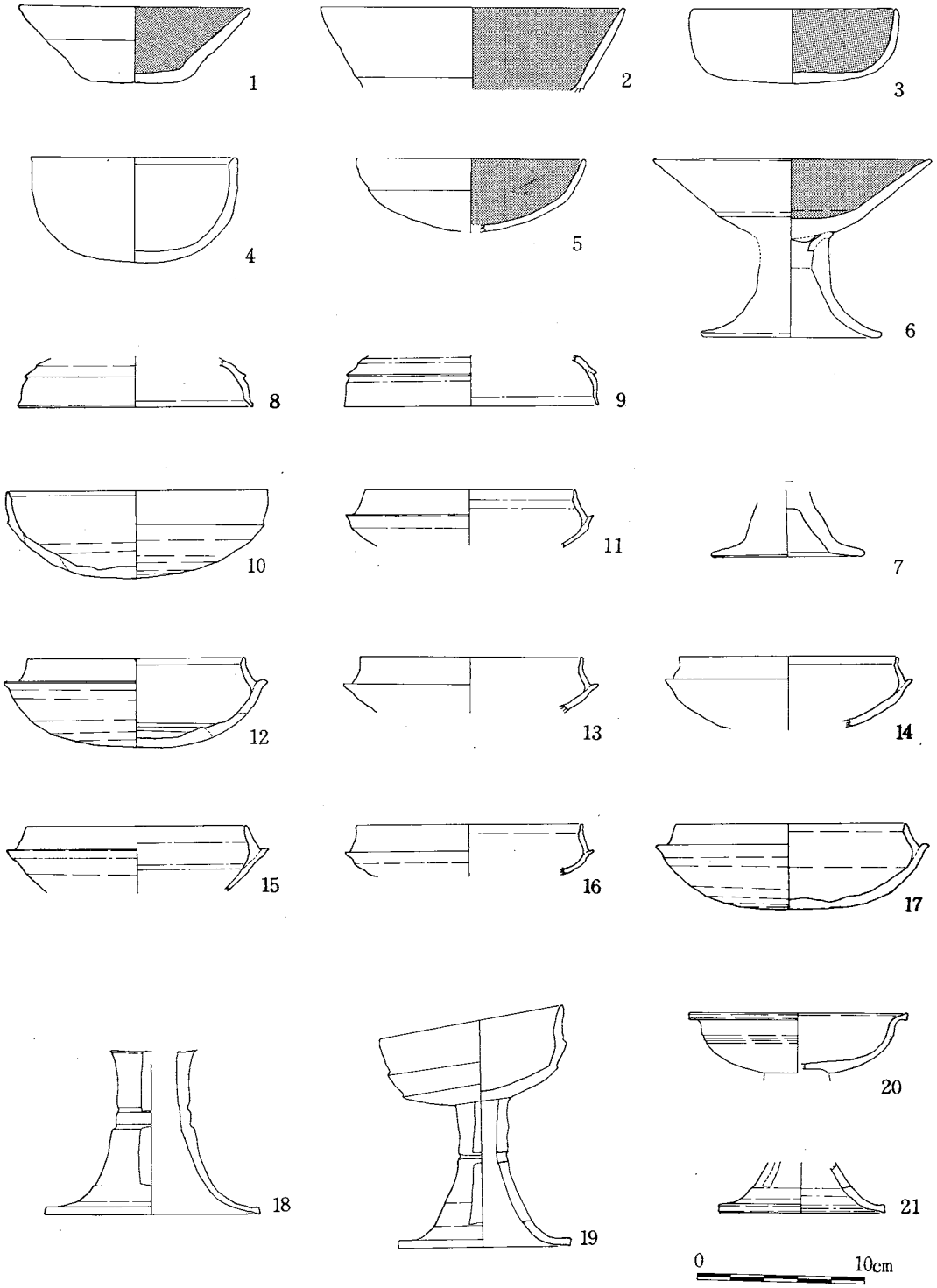
短頸壺（23、24）　底部が小さく球形をなし、肩部に沈線が施されている（23）と底径が大きく、扁平な球形で胴部にカキメが施されている（24）また22の蓋はこれらに付くものと思われる。

平瓶（26、27）口頸部が体部にくらべやや大きく、体部は球形を呈する。26は口縁部に段を有し、体部肩部に２条の沈線が施されている。27は底部、体部全面にカキメが施されている。

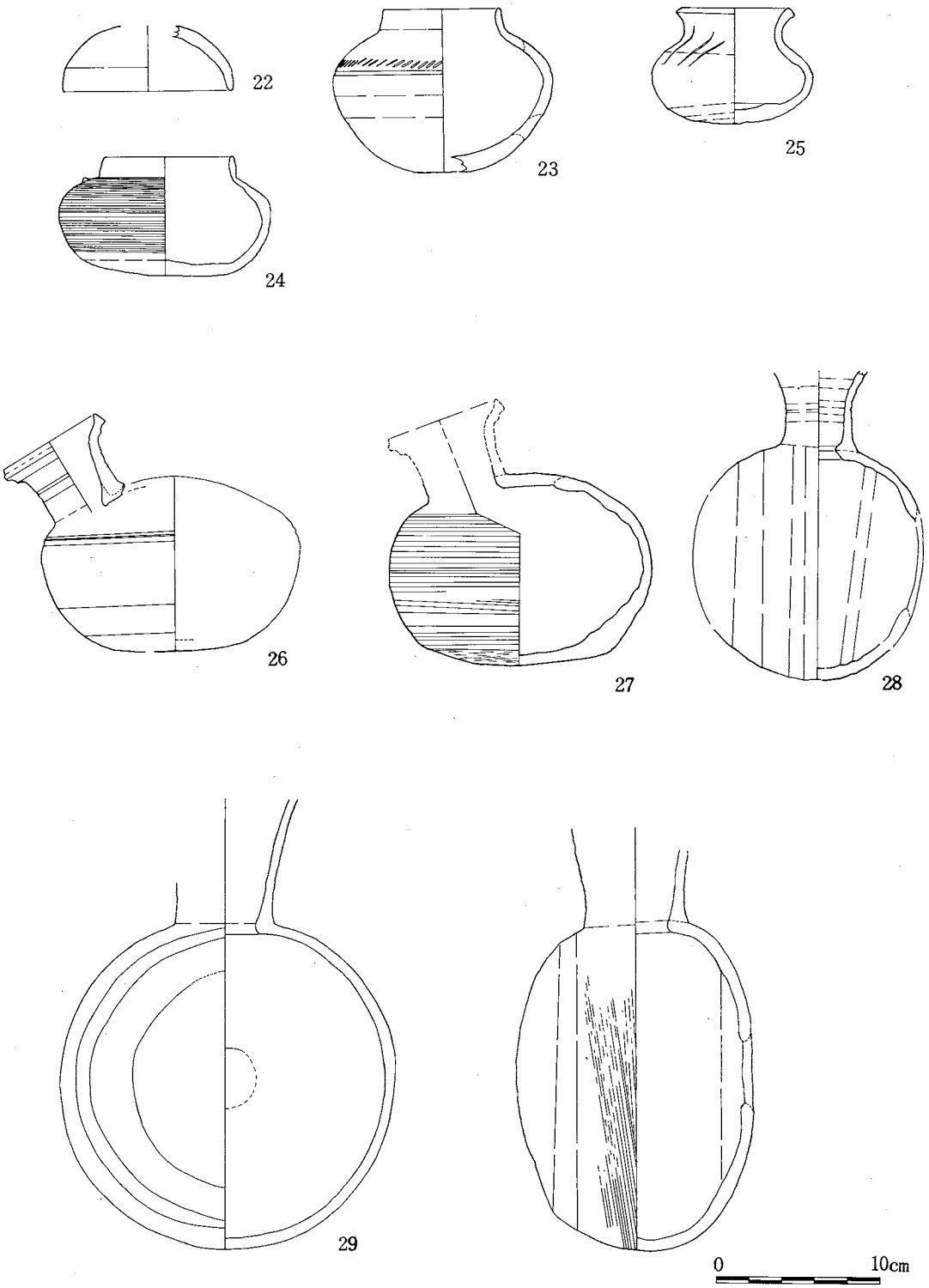
広口壺（30）口頸部が大きくラッパ状に開いて長い。頸部には２条の沈線が２ケ所に施され３分し、間に２条の櫛目文と、ヘラによる沈線が施されている。体部には、１条と２条の平行沈線が３ケ所に施され、タタキメを削って４区分している。底は丸底である。

その他、胴径10cm位の小形の球形をした師器の短頸壺が出土している。

（寺島俊郎）



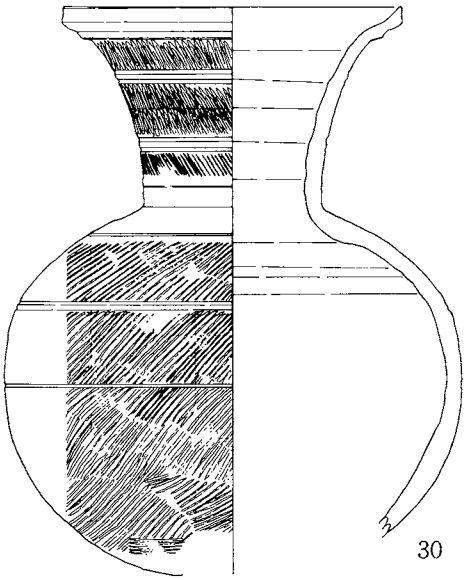
第11図　第１号墳出土土器(1)



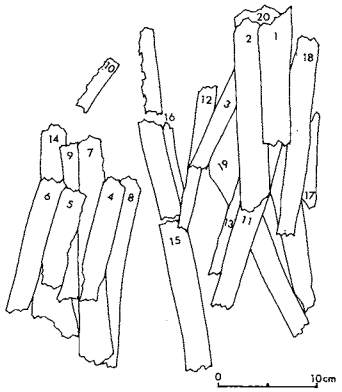
第12図　第１号墳出土土器(2)

第4表　第1号墳出土土器一覧表

図版番号	種別	器形	口径	底・脚径	器高	受部胴部径	外	内	焼成	ロクロ	胎土	残	成形	備考	出土位置
1	土師器	杯	13.2	7.0	4.6	—	黒色	赤茶褐色	良好	—	1mm以下の長石・石英・黒雲母砂粒を含む	1/4	タテ・ヨコヘラミガキ		西側
2	〃	〃	18.1	—	—	—	黒色	褐色	〃	—	1mm以下の長石・石英・黒雲母砂粒を含む	1/5	〃		I－5
3	〃	〃	11.85	9.8	4.45	—	黒色	薄赤褐色	〃	—	0.1mm以下の長石・石英・黒雲母・砂粒を含む・緻密	1/2	〃		J－5
4	〃	〃	12.1	—	6.3	—	赤褐色	赤褐色	〃	—	1mm以下の砂粒を含む	3/4	〃		G－9
5	〃	〃	13.2	—	(4.4)	—	黒色	褐色	〃	—	0.1mm以下の長石・石英・黒雲母・砂粒を含む・緻密	1/4	〃		J－8
6	〃	高杯	16.1	10.4	10.65	—	黒色	赤褐色	〃	—	1mm以下の長石・石英・マンガン・砂粒を含む	2/3	〃　ヨコナデ	外器面が荒れている	F－9,I－8 G－2
7	〃	〃	—	9.1	—	—	黒色	赤褐色	〃	—	2mm以下の砂粒を含む	1/2	〃　ヘラケズリ		西側
8	須恵器	蓋杯(蓋)	13.25	—	—	—	灰色	灰色	良好	↘	0.1mm位の長石・砂粒を含む(緻密)	1/5	マキアゲ・ミズヒキ成形 ロクロナデ・ヘラ削り		G－9
9	〃	〃	15.2	—	—	—	青灰色	青灰色	〃		0.5mm以下の長石・砂粒を含む 1mm以下の黒色粒を含む	1/3	〃		西側
10	〃	〃	15.45	—	5.25	—	暗青灰色	暗青灰色	〃	↘	3mm以下の長石・砂粒を含む	1/1	〃		G－9 I－7
11	〃	蓋杯(身)	12.6	—	—	受部径 14.7	青灰色	青灰色	〃	↘	1mm前後の長石・砂粒を含む	1/4	〃		
12	〃	〃	12.85	—	5.3	受部径 14.7	暗青灰色	暗青灰色	〃	↘	2mm以下の砂粒を含む	1/1	〃		I－7,8
13	〃	〃	13.0	—	—	〃 15.7	青灰色	青灰色	〃	↘	0.5mm以下の砂粒を含む		〃		I－7 H－9
14	〃	〃	13.0	—	—	〃 15.0	青灰色	青灰色	〃	↘	〃	1/2弱	〃	外胴面に自然袖が黄褐色に発泡している	H－9
15	〃	〃	13.2	—	—	〃 14.7	青灰色	青灰色	〃	↘	0.5mm以下の長石・砂粒を含む 1mm以下の黒色粒を含む	1/3	〃		石室内 I－5
16	〃	〃	13.6	—	—	〃 15.6	暗青灰色	暗青灰色	〃	↘	0.5mm以下の砂粒を含む		〃		G－9
17	〃	〃	13.65	—	5.15	〃 16.25	暗青灰色	暗青灰色	〃	↘	4mm以下の小石を含む	1/1	〃	外胴部に自然袖が黄褐色に発泡	G－9
18	〃	高杯	—	13.0	脚高 9.8	—	灰白色	灰白色	軟質	↘	1mm以下の砂粒を含む　0.5mm以下の長石・黒色粒を含む	1/2	〃	2方共スカシ	J－5
19	〃	〃〃	11.1	10.3	13.3	—	暗青灰色	暗青灰色	良好	↘	3mm以下の砂粒を含む	4/5	〃	2方スカシ	F－9
20	〃	〃〃	13.0	—	受部 3.6	—	暗青灰色	暗青灰色	〃	↘	2～3mmの砂粒をわずかに含む	1/4	〃		I－8
21	〃	〃〃	—	10.0	—	—	青灰色	青灰色	〃		0.5mm以下の長石・砂粒を含む	1/8	〃		F－9
22	〃	蓋	9.9	—	—	—	青灰色	灰色	〃	↘	0.1mm以下の長石・砂粒を含む緻密	1/5	マキアゲ・ミズヒキ成形 ロクロナデ		
23	〃	短頸壺	9.95	3.5	9.95	胴径 13.5	灰白色	灰白色	〃	↘	緻密	1/2	〃　ロクロヘラ削り	自然袖－淡緑色	石室内 J－5,6,7
24	〃	〃	7.55	—	7.2	〃 12.8	暗青灰色	暗青灰色	〃	↘	2mm以下の砂粒を含み,0.5mm以下の砂粒を多く含む		〃　〃	肩部に重ね焼き痕	J－4
25	〃	壺	6.4	4.9	7.1	〃 9.75	暗灰白色	暗灰白色	〃	↙	2～3mm位の砂粒を含む	4/5	〃　〃	胴部から頸部にかけてヘラによる3条の横線	H－8 G－9
26	〃	平瓶	6.4	—	—	—	黒色	暗青灰色	〃	↘	1mm以下の砂粒を多く含む	9/10	〃　〃	釉　自然袖－暗濃緑色	東側
27	〃	〃	—	11.2	胴高 11.6	胴径 15.9	暗青灰色	暗青灰色	〃	↘	4mm以下の小石を多く含む	9/10	〃　〃	断面－赤褐色	東側
28	〃	長頸壺	—	—	—	〃 14.0	暗青灰色	暗青灰色	〃	↘	2mm以下の砂粒を含む	1/2	〃　〃	肩部に2条の沈線 断面－暗赤褐色	I－8 H－9
29	〃	提瓶	—	—	—	〃 20.4	青灰色	青灰色	〃	↘	2mm以下の砂粒を含む	3/4	〃　〃		
30	〃	広口壺	16.4	—	(26.7)	〃 22.0	青灰色	青灰色	〃	↘	0.5mm以下の長石・黒色粒・砂粒を含む	3/4	胴部タタキ・頸部ヘラによる沈線 2条のクシによる櫛文		



第13図　第１号墳山土土器(3)



（番号は上部より下部への順を示す）

第14図　人骨出土状態図

(5)　禰ノ神古墳出土人骨について（第14図）

人骨の出土状態：人骨は石室内の入口寄り向って左側壁際で、床面より約50cm上層の位置に、複数の個体の長骨のみが集積された状態で検出された。長骨群は大腿骨・脛骨が殆んで（上腕骨、腓骨各１本が混在）、骨体部分のみを残す各骨は長軸に約40cm、幅30cmの範囲内で、２・３段に積み上げられ、一括された位置関係を示していた。このような状態は、各骨の遺存の程度に相違はあるが、すでに白骨化し、崩壊の始った骨格のなかから原型を残す長大な骨のみを収集し、後世の或る時期に一個所に移せしめた結果と推察される。なお、石室内の他の位置において残存する骨はまったく認められなかったという。

人骨の残存状態：残存する各骨はすでに著しく脆弱化し、欠損部分が多いため、辛うじて各部位が認定できる程度に止まった。すべての骨は近位・遠位の関節部分が欠失し、骨体中央部が主として残るのみで、これらの部分の骨表を構築する緻密質も剝落が著しく、粗糙となっている。しかし、一部の骨で滑沢な表面を残して保存の好い形状を保つものもあり、土中における腐蝕の進行の差異をうかがわせる。細片として残る部分は比較的少ない。

骨の部位と形状：

上腕骨―左―⑨＝（図中の番号、以下同じ）

現存長約150mm。骨体の中央より下半部分。滑車部は欠失。骨体は伸直の傾向で腓側縁は鈍い稜を形成する。

大腿骨―右―⑦　現存長約235mm。骨体の下半部で関節部は欠失。骨の表面は滑沢である。粗線の発達は弱く、わずかな稜状に止まる。外側上線も殆ど認められない。骨体中央部における矢状径25.5mm、横径25.0mm、横断示数102.0。

同　一右一⑭　現存長約210mm。骨体の下半部分で関節部は欠失。骨表面は滑沢。粗線はやや発達するが、結節状とならず、平坦な鈍稜となる。外側上線は通常。

同　一右一⑱　数点が接合し骨体のほぼ全長を残すが、欠損部分も多い。粗線からでん筋粗面へかけての発達は弱度。

同一右一⑳　現存長310mm。近・遠位端を欠くが骨体はほぼ完存。出土人骨中もっとも強荘・頑丈な形状を有する。骨体の伸直、粗線の発達は強度で、特に腓側唇が著明に形成される。成人男性の個体と推定されるが、対する左側部位は残存しない。骨体中央部の矢状径32.0mm、横径29.0mm、横断示数110.3。

同一左一①　現存長135mm。小転子下部から骨体の上部⅓程度が残存。背体後面の損壊が著しい。

同一左一②　現存長190mm。骨体の中央部分のみ。粗線はわずかに残り弱度の発達を示すが、全体的に頑丈な形状が認められる。

同一左一⑥　現存長140mm。骨体の下部で前面は殆と欠失。

同一左一⑪　現存長260mm。長大に残るもので、転子間線より下部で遠位関節部を欠く骨体中央部である。骨体は湾曲に乏しい伸直の傾向で、転子間線はやや稜状に鋭く、でん筋粗面は比較的平滑で粗糙性は弱い。粗線は小部分が欠失し、横断面形は不明であるが骨体上部でやや扁平性が認められる。

同一左一⑲　現存長235mm。骨頭を欠くが頚部より骨体の上半部が残る。大・小転子も欠失するが骨頭頚部まで残る唯一の例である。でん筋粗面や恥骨筋線の発達は微弱で全体的にきゃしゃな形状を示す。

同一左右不詳一③　現存長135mm。骨体上部で前面のみが残る。

同一左右球詳④　現存長　125mm。骨体の中央から下方とみられる部分が円筒状に残る。

腓骨一右一⑬　現存長175mm。骨体中央部分であるが崩壊が著しい。

同　右一⑮　上下でずれた2点が接合。骨体中央より下部で関節部は欠く。やや鋭い伸直な前稜が認められる。

同　一左⑧　現存長185mm。骨体中央より上半で関節部は欠く。骨間稜は断続的で発達は弱度。頑丈で形状を有する。

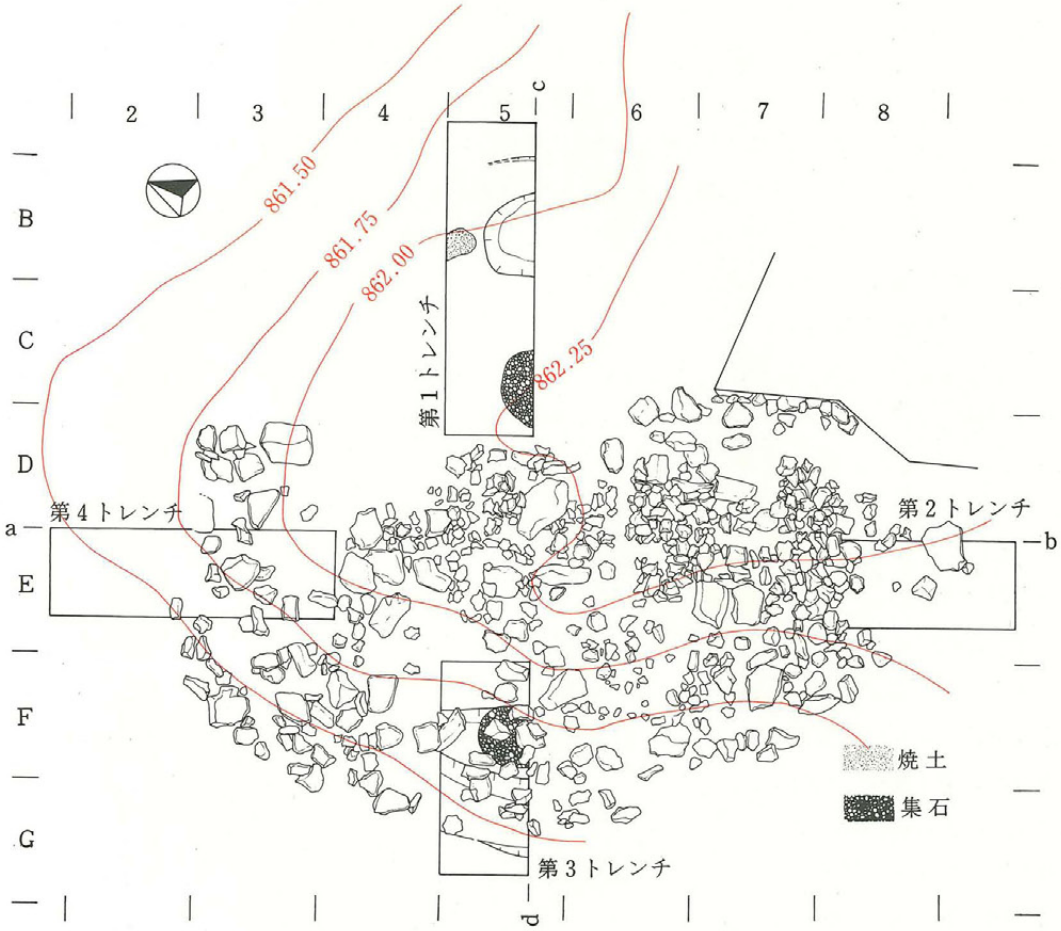
同　一左右不詳⑤⑫　いずれも現存長10mm内外の骨体の一部分である。

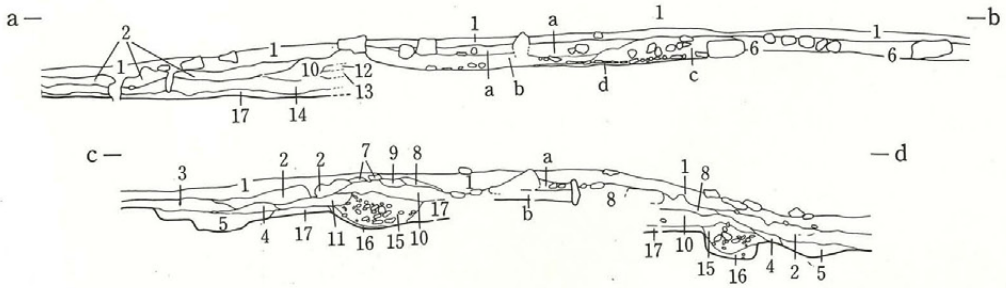
腓骨一左右不詳一⑯　現存長60mm。骨体の一部のみ。

⑩⑰　部位不明の小片。

まとめ：出土人骨は複数の大腿骨・腓骨に上腕骨・腓骨の混在が認められ、他の部位の骨はまったく残存しなかった。それぞれの骨は損壊の程度が著しく、全体的な形質を現わす計測や観察は概ね不可能であった。

個体数の推定についても欠失する個所が不特定で、左右を対比しうる確実な例に乏しく、あえて断定を避けた。しかし、大腿骨の場合、右側4例、左側5例となり左右不詳2例を含め最小5体の個体数の存在が勘考されることになる。





第2号墳　層序

第1層 表　土
第2層 暗褐色土(粘性弱、しまり有、ローム粒子混入)
第3層 黒褐色土(粘性、しまり弱)
第4層 褐色土(粘性、ローム粒子混入)
第5層 明褐色土(〃　〃　ロームブロックを多量混入)
第6層 黒褐色土(〃　〃　礫混入)
第7層 褐色土(粘性、しまり弱、ローム粒子多量混入)
第8層 暗褐色土(粘性、しまり有)
第9層 〃　(〃　〃　ローム粒子をサンドイッチ状に混入)
第10層 黒褐色土(粘性、しまり強)
第11層 褐色土(粘性、しまり有、ーム粒子を混入)
第12層 黒褐色土(粘性、しまり有)
第13層 茶褐色土(〃　〃　)
第14層 褐色土(粘性、しまり有、炭化物粒子混入)
第15層 暗褐色土(粘性、しまり強、礫を多量に混入)
第16層 明褐色土(〃　〃　ロームブロック混入)
第17層 〃　(粘性、しまりあり、ローム粒子を多量に混入)

<石室内土器>

石室内
- a層 暗褐色土(粘性弱、しまり有、ローム粒子、小砂利混入)
- b層 〃　(粘性、しまり有、ローム粒子混入)
- c層 褐色土(粘性弱、しまり有、小砂利を多量に混入)
- d層 暗褐色土(粘性、しまり強、ロームブロック混入)

第15図　第2号墳全体図

各人骨の形態や骨体の矢状径・横径などの数値をみると、古代から現代人までの各期を通しての平均値を上廻る大きさと頑丈さを具えた男性人骨とともに女性的なきゃしゃな形質を示すもの、また筋内附着部や各稜の形成などの程度にそれぞれ差異の認められる傾向から、異なった体格を有する男女の成人人骨の共存が推定されるものである。（西沢寿晃）

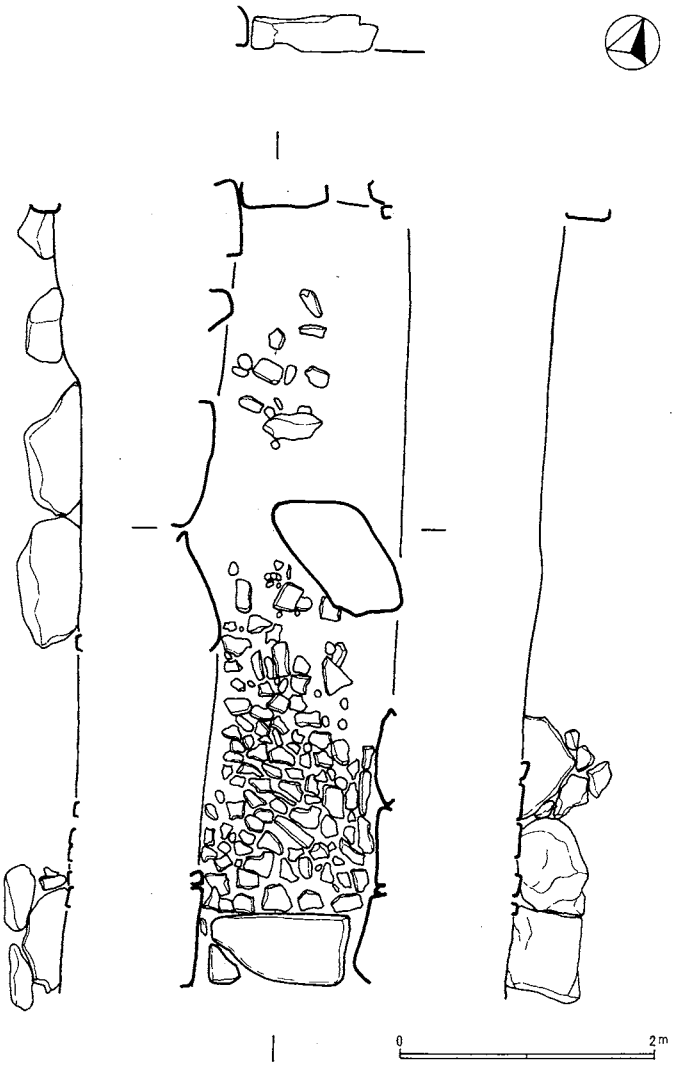
4　第２号墳

１）　墳丘（第15図）

本墳は３基中の中央に位置し、第１号墳の南東側に位置する。本墳もまた破壊が激しく、本墳築造時の規模は判断しかねるが、現状規模は平面プランで南北に13m×11mを測る円墳であり墳高は75cmを測る。規模的には、３基中最も小規模なものである。

本墳の調査にあたって、東西南北方向に４本のトレンチを設定した。各トレンチの層序（第15図）より墳丘の盛土過程は、第１号墳と同様にまずローム面における墳丘下の整形から始まる。傾斜のあるこの面を削平し、平担面をつくり出しその上に第14層と第17層と盛り、その上に石室を築いている。これより上層の盛土状況は、墳丘の上部大半が破壊されているが残存する範囲でみる限り、第１号墳とそう大差はないようである。

周溝は、第１トレンチ、第３トレンチにおいて検出された。両者ともローム層を掘り込んだもので掘り方は双方ともだらだらな掘り方であり、東側は２段になっている。この周溝は、東側において幅130cm、深さ25cm、西側では幅125cm、深さ20cmを測る。



第16図　第２号墳石室

尚、第1トレンチで周溝が切れ、消滅し、第4トレンチでは検出されなかった。これは、南より北へ傾斜している地形によるものと思われ、この周溝が墳丘整形を主なる目的として掘られたものと推察し得る。

また、第1トレンチ、第3トレンチからローム層を掘り込んだ集石土壙が各1基、計2基検出された。第1トレンチの集石土壙は石室東側側壁より約130cm、第3トレンチのそれは石室側側壁より約140cmとほぼ同距離にあり、両者を結ぶ直線は石室主軸とほぼ直交する方向に位置する。双方とも径120cm、深さ30cm程度の掘り込みで、中に親指大から拳大の若干焼性を受けた礫が集石してある。集石してある礫は土壙底面に近づくほど、平担になり、大きくなる傾向が観察された。第1トレンチでは、やはり同一面で焼土が検出されており、集石土壙、焼土ともに古墳築造前の祭式を催した跡である可能性が強い。

本墳もまた葺石古墳であるが、現存する墳丘の墳頂部における礫は、石室が破壊された時、散乱した礫と思われる。これは、これらの礫に何ら人為的な作意が観察されないことによる。しかし、墳丘西側据部における礫の配列は半弧を描き、葺石が比較的良好な状態で検出された。葺石の範囲は、西側半分、本墳の立地する丘陵より柿沢、金井地区を見下す方向に葺かれており、逆側の東側には葺かれていない。尚、北側における葺石有無の境界は、ほぼ石室主軸方向に一致し南側（入口側）では、石室主軸方向より東側に振られると思われる。第1号墳が全面的に葺石が葺かれているのに反し、本墳では、いわゆる〝見える所〟だけに葺石を葺いた可能性が強い。

2）　内部主体（第16図）

石室は横穴式石室で、入口部を南に向けている。破壊が激しく、玄室における壁の残存度が極めて悪く、平面プランは判断しかねるが、第1号墳と同様、無袖式の可能性が強い。主軸方向はS—20°—Eで、規模は玄室の長さ6.1m、幅は奥壁部、玄門部ともに1.25mを測り、長方形を呈す。

壁は奥壁、側壁ともに石積み最下段を部分的に残す程度であり、石積みの状態、裏込め石の有無など判然としない。

床面は、玄門部より玄室中央辺りまで平担な礫を敷いており、その礫敷きの下には厚さ3cmにわたり最大径3cmの中礫を含む砂利を敷いている。これらの施設は玄室中央より奥壁側にはみられないが、攪乱によるものと思われる。第1号墳と同様、石室内埋没土中には多量の礫が転落しており、床面まで攪乱が達している。

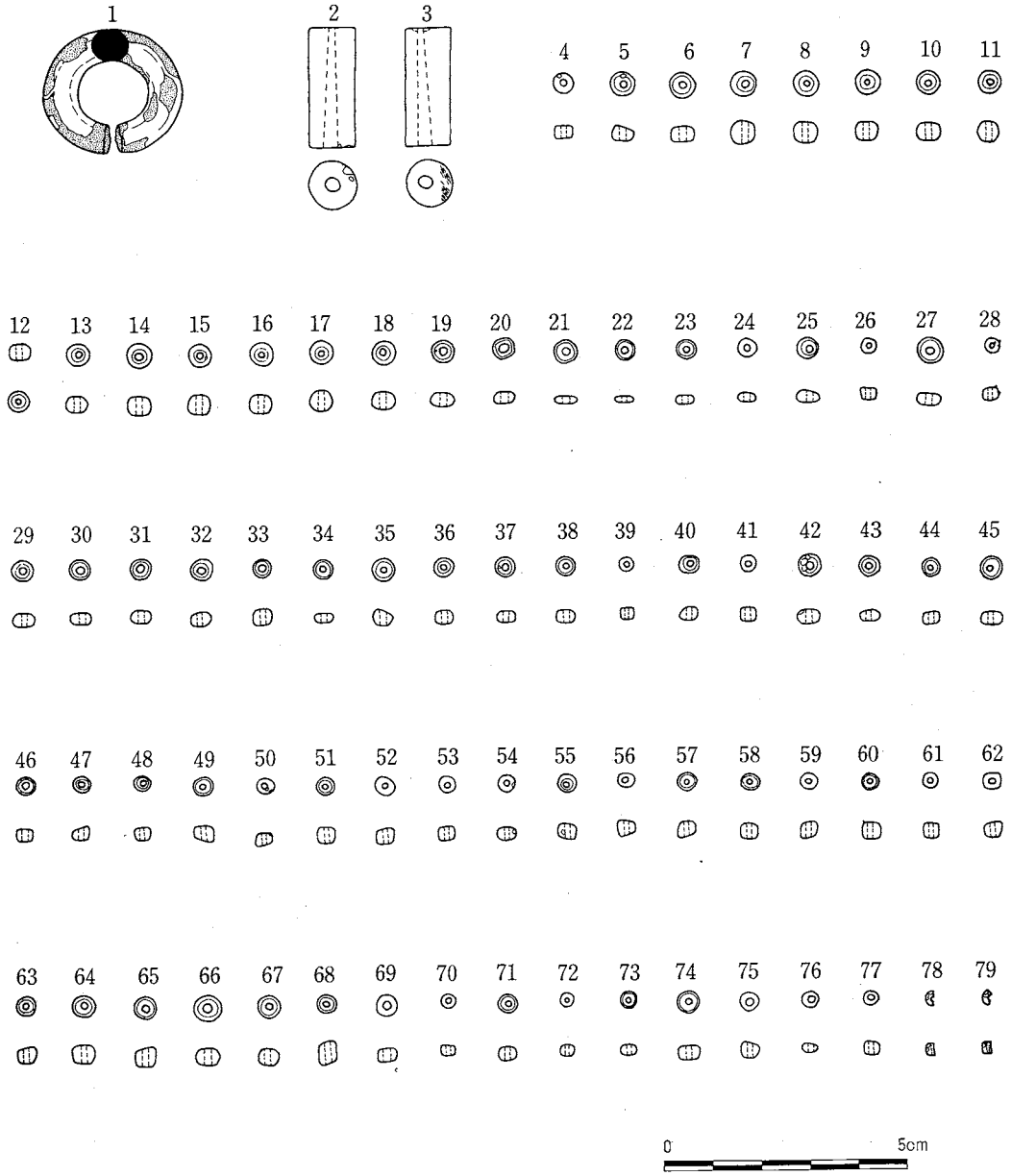
閉塞施設は比較的良好な状態で残存しており、玄門部に110cm×50cmの礫を置き、人頭大の礫を雑然と積み上げている。

尚、本墳では羨道部、前庭部などの施設は確認されなかった。　（龍堅　守）

3）　遺物

(1)　装身具（第17図）

本古墳からは、金環、管玉、小玉が合計79点で3基中最多数の出土をみた。すべて石室内から出土したが、盗掘によるためか1古墳出土の丸玉や、3古墳で出土した勾玉の出土はみなかった。



第17図　第２号墳出土装身具

金環（第17図１）１点出土し、長径27.5mm、厚さ6.9mmを計る。保存状態は悪く、大部分金張も剝れ、胴地には一部緑青部がみられる。

管玉（第17図２～３）２個出土し、深緑色の碧玉が使用されている。大きさはそれぞれ長さが24.8mm、24.4mm、直径9.9mm、9.5mmとほぼ同一規格で、円錘状の孔が穿たれている。

小玉（第17図４～70）合計67顆出土し、計測値は第５表に示す通りである。材質別の内訳は、ガラス57顆、硬砂岩15顆、チャート２顆、ヒスイ１顆、黄色を呈した材質不明のもの１顆で、それぞれ形状を異にしている。46、54、55に、貫通しない穿孔痕と思われる凹みが側面にみられる。

（伊東直登）

第５表　禰ノ神２号墳出土装身具一覧表

番号	径(mm)	高(mm)	材　質	色調	備　　考	番号	径(mm)	高(mm)	材　質	色調	備　　考
1	27.5	6.9			金環	41	3.7	3.0	〃	〃	
2	9.9	24.8	碧　玉	深緑	管玉	42	4.5	2.7	〃	〃	
3	9.5	24.4	〃	〃	〃	43	4.1	2.3	〃	〃	
4	4.1	2.6	硬砂岩	黒	以下79迄小玉	44	3.8	2.4	〃	〃	
5	4.8	3.8	〃	〃		45	4.3	2.6	〃	〃	
6	5.2	3.5	〃	〃		46	3.9	2.6	〃	〃	
7	5.2	4.5	〃	〃		47	3.9	2.7	〃	〃	
8	4.9	3.9	〃	〃		48	3.9	2.4	〃	〃	
9	5.1	4.0	〃	〃		49	4.2	3.3	〃	〃	
10	4.6	3.9	〃	〃		50	3.9	2.4	〃	〃	
11	4.5	4.1	〃	〃		51	4.2	3.3	〃	〃	
12	4.3	3.5	〃	〃		52	4.3	3.2	〃	〃	
13	4.5	3.7	〃	〃		53	4.0	2.9	〃	〃	
14	5.0	3.9	〃	〃		54	4.4	2.8	〃	〃	
15	4.8	4.0	〃	〃		55	4.6	3.2	〃	〃	
16	4.8	4.0	〃	〃		56	4.1	3.7	〃	〃	
17	4.7	4.2	〃	〃		57	4.5	3.0	〃	〃	
18	5.0	3.9	〃	〃		58	3.8	3.2	〃	〃	
19	4.9	2.7	ガラス	藍色		59	3.5	3.5	〃	〃	
20	4.5	2.3	〃	〃		60	3.5	2.8	〃	〃	
21	4.9	2.0	〃	〃		61	3.2	3.0	〃	〃	
22	4.1	1.7	〃	〃		62	3.9	3.3	〃	〃	
23	4.0	2.0	〃	〃		63	4.0	3.3	〃	〃	
24	3.9	2.2	〃	〃		64	4.5	3.9	〃	〃	
25	4.6	2.4	〃	〃		65	4.4	3.7	〃	〃	
26	3.4	2.3	〃	〃		66	5.3	3.9	〃	〃	
27	4.7	2.5	〃	〃		67	4.3	3.5	ヒスイ	黄緑	
28	3.3	2.6	〃	〃		68	4.0	4.8	不　明	黄	
29	4.5	2.9	〃	〃		69	4.1	3.0	チャート	茶	
30	4.3	2.4	〃	〃		70	3.6	2.1	〃	〃	
31	4.1	2.6	〃	〃		71	4.1	2.7	ガラス	水色	
32	4.5	2.5	〃	〃		72	3.0	2.3	〃	〃	
33	3.9	3.0	〃	〃		73	3.8	2.4	〃	青	
34	4.1	2.0	〃	〃		74	4.3	3.0	〃	〃	
35	4.5	3.1	〃	〃		75	3.9	3.5	〃	〃	
36	4.0	2.8	〃	〃		76	3.6	2.2	〃	水色	
37	4.0	2.4	〃	〃		77	3.1	2.6	〃	〃	
38	4.0	2.9	〃	〃		78	3.5	2.4	〃	〃	
39	3.2	2.5	〃	〃		79	3.0	2.6	〃	〃	
40	4.0	2.6	〃	〃							

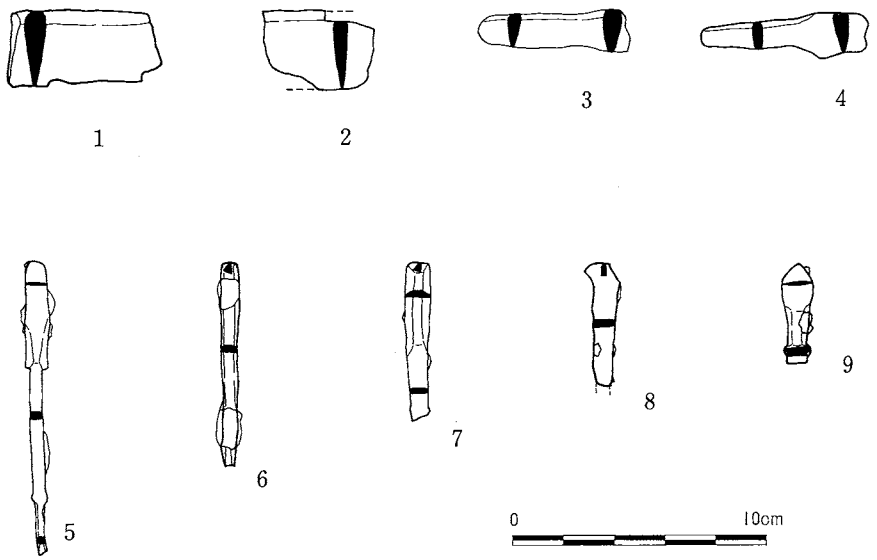
(2)　鉄器（第18図）

本墳より直刀片２、刀子2、有茎鉄鏃５が出土した。他に分類不可能の鉄片が多数出土した。

直刀１、２はともに刀身の破片であるが、第１号墳出土の直刀より厚手で、厚寸もはるかに長くなると思われる。鉄鏃５は長い箆被部を有し、６、７は片丸造りのもの、８は円頭斧箭式のものである。　（龍堅　守）

(3)　土器（第19図）

坏（１～５）口頸12.9cm～14.9cm、器高3.3cm～5.6cmで、５の小形坏を除くと、２種類に分類できる。第１は底部からゆるやかに内弯して立ち上がり、口縁付近で外反する。器高にくらべて浅い。（１）と体部中頃で稜をもち内弯した後口縁部が外反するもで端部は丸い。（２～４）両



第18図　第２号墳出土鉄器

第６表　第２号墳　鉄器観察表

番号	発掘区	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
1	H－5 グリッド	直刀	6.1	4.0	0.9	
2	〃	〃	4.3	3.1	0.6	
3	D－5	刀子	6.0	1.7	0.8	
4	墳丘	〃	6.6	1.8	0.7	
5	E－5	鉄鏃（有茎）	11.6	1.2	0.2	
6	D－6	〃 〃	8.1	0.7	0.4	
7	H－5	〃 〃	6.2	1.1	0.3	
8	E－5	〃 〃	4.8	1.0	0.2	
9	墳丘	〃 〃	4.0	1.3	0.3	

方とも内外方向へラミガキされているが、１つの口縁外側は、ヨコナデがされている。

短頸表（○～８）底径は比較的短かくなな扁平な球形で肩部がややはっている。口頸部は、比較的長く、口端部は丸くつくられ、内側に段がついている。肩部には、２条の沈線が施されている。７は、口頸は違うが、これらに付くものと思われる。

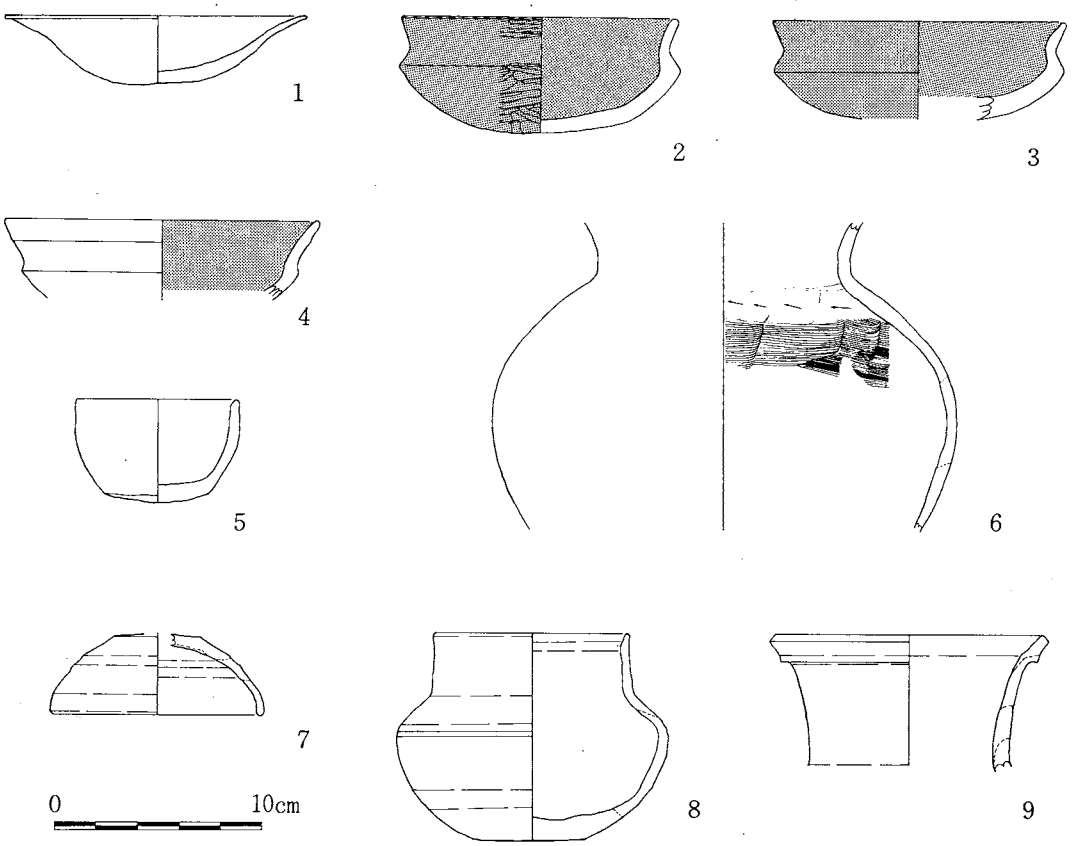
その他、土師甕・須恵甕が出土している。　（寺島俊郎）

5　第３古墳（第20図）

1）　墳丘

第３号墳は本古墳群中の東端、尾根の基部近くに位置する。すでに大幅な破壊、削平を受けており原形をうかがうことができない。

東、西、北に設定されたトレンチ（第１～３トレンチ）からは周溝と思われる溝が確認された。



第19図　第２号墳出土土器

第７表　第２号墳出土土器一覧表

図版番号	種別	器形	口径	底・脚径	器高	受部胴部径	外	内	焼成	ロクロ	胎土	残	成形	備考	出土位置
1	土師器	杯	14.4	4.0	3.3	—	赤褐色	赤褐色	良好	—	2㎜以下の長石、石英を含む	3/4	内面 タテ・モコヘラミガキ・外口縁部ヨコナデ		
2	〃	〃	12.9	—	5.6	—	黒色	黒色	〃	—	1㎜以下の長石、石英を含む	1/2	内外面 タテ・ヨコヘラミガキ		D-5
3	〃	〃	14.0	—	—		黒色	黒色 黄土色	〃	—	1㎜以下の長石、石英、砂粒を含む	1/4	内外面 タテ・ヨコヘラミガキ		C-5
4	〃	〃	14.9	—	—	—	黒色	褐色	〃	—	1㎜以下の長石、石英、黒雲母、砂粒を含む	1/4	内外面 ヨコナデ		D-4
5	〃	〃	7.5	4.9	5.0	—	褐色	褐色	〃	—	1㎜以下の長石、砂粒を含む	3/4	内外面 ナデ、外底部ヘラ削り		D-6,7
6	〃	壺	—	—	—	22.4	明褐色	明褐色	〃	—	0.5㎜以下の砂粒を含む	1/24	マキアゲ、ハケメ調整ヘラミガキ		D-6
7	須恵器	短頸壺	10.3	4.1	(3.9)	—	暗灰 白色	暗灰 白色	〃	↘	緻密(砂質感がない)		マキアゲ、ミズビキ成形、ロクロナデ、ロクロヘラ削り		D-7
8	〃	蓋	9.2	5.4	10.1	13.15	暗青 灰色	暗青 灰色	〃	↘	1㎜以下の砂粒を含む	2/3	〃 〃 〃		D-6,7
9	〃	壺	13.95	—	—	—	暗青 灰色	暗青 灰色	〃	↙	2㎜以下の砂粒を含む		〃 〃		C-5

墳丘の規模は周溝の内縁間で12.70m、外縁間で18.54mを計る。また、この周溝の内側に細い溝が確認されたが、その性格については不明である。第1トレンチの溝中には礫の流れ込みが認められ、このことから墳丘外表には葺石が貼られていた可能性が高い。第2トレンチでは盛土層中から礫が検出されており、石室下の基壇中に礫が入れられていたことが理解される。しかし、現表面で確認された礫は、原位置を保っているか否は不明であり、石室下の礫と断定することはできない。

遺物は現表面に散乱していたものが大半で、他に東トレンチ溝中から須恵器片の出土を見た。

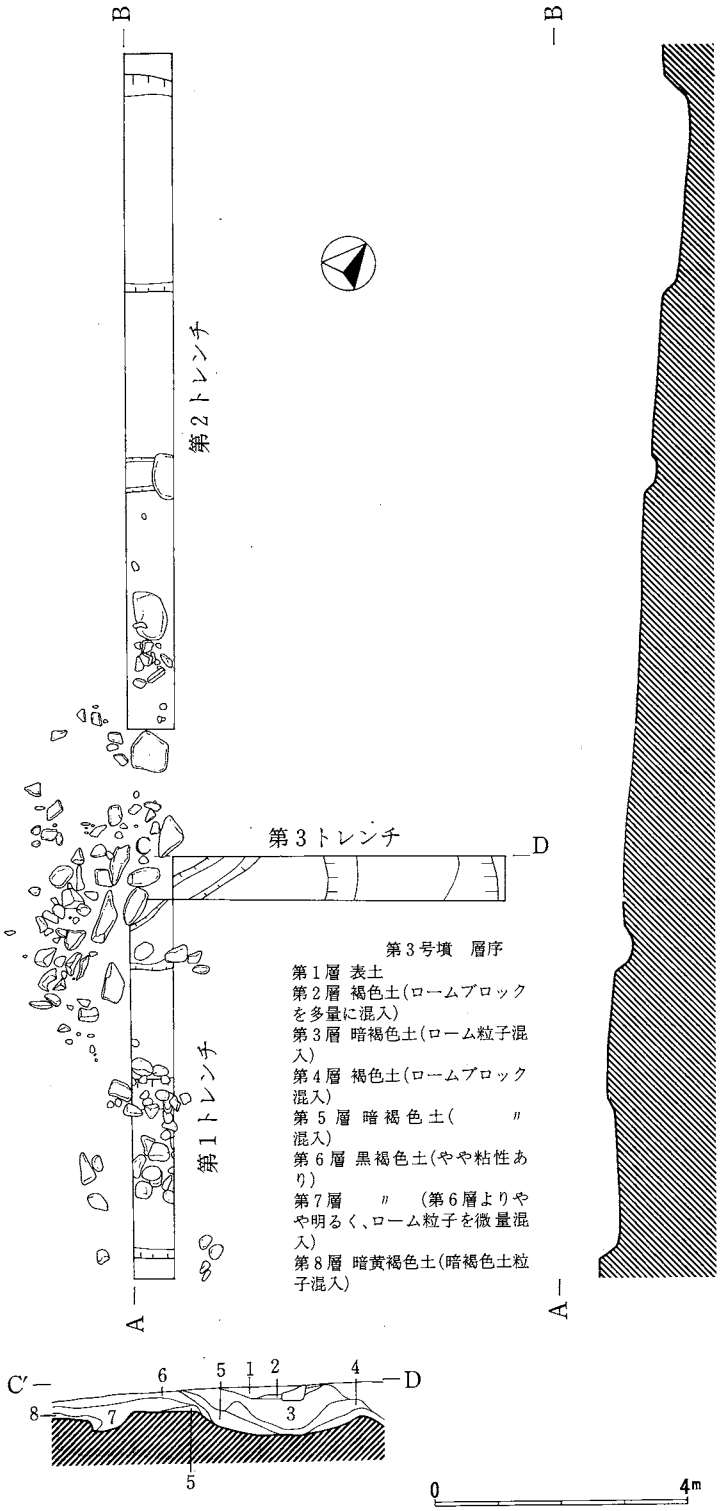
（寺内隆夫）

2） 遺物

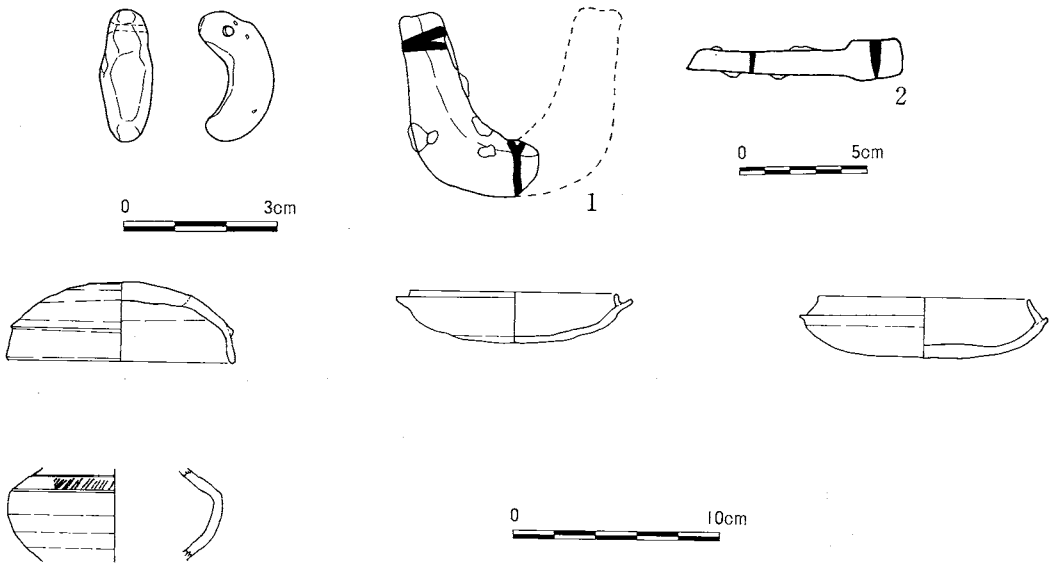
(1) 装身具（第21図）

本古墳はほとんど破壊されており、装身具は第1トレンチ内で勾玉1点の出土をみたのである。色は黒色で硬砂岩が使用され、長さ25.3mm、直径9.8mmを計る。孔は円錘状に穿たれ、一方の側面中ほどに切り込みがみられる。

（伊東直登）



第20図　第3号墳全体図



第21図　第３号墳出土遺跡物

(2) 鉄器（第21図）

本墳より鍬先１、刀子１の２点の出土をみたが、本墳は破壊が激しく２点とも攪乱土層中からの出土である。

農耕具である鍬先が副葬品として納められる例は少ない。今回の出土層位も前述通り攪乱土層中で、出土地点も石室内外どちらとも言えず明確さを欠く。　（龍堅　守）

第８表　第３号墳　鉄器観察表

番号	発掘区	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
1	攪乱土中	鍬先	7.4	2.8	0.3	
2	〃	刀子	8.5	1.4	0.4	

(3) 土器（第21図）

須恵器

蓋坏（４～６）第１古墳のものと比べ、蓋受けのかえりが内傾し、短かい。全体に小型で、成形がいちじるしく雑である。　（寺島俊郎）

第9表　第3号墳出土土器一覧表

図形番号	種別	器形	口径	底・脚径	器高	受部径 胴部径	外	内	焼成	ロクロ	胎土	残	成形	備考	出土位置
1	須恵器	蓋杯（蓋）	11.0	—	3.8	—	暗青灰色	暗青灰色	良好	↙	2㎜以下の砂粒を含む		マキアゲ、ミズビキ成形、ロクロナデ、ロクロヘラ削り		東トレンチ
2	〃	蓋杯（身）	9.8	—	2.5	受径 11.4	青灰色	青灰色	やや軟質	↘	1㎜以下の砂粒を含む	1/3	〃　〃　〃		
3	〃	〃	10.0	—	2.9	受径 11.4	灰色	灰色	良好	↘	緻密	1/2弱	〃　〃　〃	白色粘土が交ぜられている	東トレンチ
4	〃	瓶	—	—	—	胴径 10.5	灰色	灰色	〃	↙	1㎜以下の砂粒を含む		〃　〃　〃	肩部に櫛による列点文	

6　調査の成果と課題

古墳盛土中及び盛土下の遺構・遺物について

古墳の盛土中や盛土と地山の境界から各種の遺構や遺物が発見された例は、時期や地域を問わなければかなりの数にのぼっているらしい。松本平においても、墳丘直下の地表面で炭片の散布が認められた向畑2号墳（桐原1980）の例や、内部主体が確認されていないため古墳と断定することができないが、墳丘下の基盤に接した付近から土器片や多量の木炭類が発見された妙義山1古墳（大場1966）の例をあげることができる。しかし、こうした事例に対する研究は散発的に発表されているのみで、集成及び体系立った見解の提出は今後の課題となっている。こうした状況を踏まえて、本稿では禰ノ神1・2号墳の事例を検討し、いくらかの展望を述べておきたい。短時日のうちで目に触れた関連文献は少なく、充分な内容とはなり得ないが研究進展の一助となれば幸いである。

まず、現在までに報告されている類例を（A）明確な遺構を持つ例。（B）焼土、炭火物が検出された例。（C）土器などの遺物だけが発見された例。に分けて抽出し、どのような解釈が与えられて来たかを概観しておこう。

（A）明確な遺構を持つ例

1969年、今井尭氏らは墳丘盛土と地山の境界に灰・炭火物・焼土面が見られ、土師器片などが出土した六ッ塚1号墳の事例を、「古墳築成予定地の決定につづいて墳丘築成を前に行われた送葬に関連した儀礼の痕跡」（今井ほか1969）と推定した。この古墳には最下層（灰層）を切り込んだ土壙が存在し、これに対しては殉葬にかかわる埋葬施設であろう、とする説も出されている（近藤1983）。

舟塚原古墳（市毛1971）では封土中より臼玉や土器を有する土壙が検出されており、市毛勲氏は地鎮や鎮魂にかかわる祭祀遺構である可能性を示唆している。

1983年、泉森皎氏は古墳群内にみられる竪穴住居遺構を集成し、喪屋の存在を主張している（泉森1983）。その中で例示された黒石14号墳をあげると、墳丘下では竪穴状焼土遺構や焚火跡などが検出されており、喪屋を中心とした焚火を伴なう祭祀（殯）を想定している。これらの遺構が当

該古墳のものであるか否かは明らかにしていないが、概報では隣接する13号墳との関係をほのめかしている(泉森1981)。茂木雅博氏が報告された勝木3号墳は、焚火跡と土師器と墳丘の各層に持ち、内部主体が認められないことから隣接する4号墳の祭祀場と推定されている（茂木1982)。このような例から、墳丘盛土下の遺構などが一概に当該古墳に帰属するとは限らず、注意を要する点である。

(B) 焼土・炭火物が検出された例

前述の黒石14号墳や神門4号墳（田中1977）例では竪穴状遺構を焼き払った状況が指摘されており、さらに前者では遺構外にも焼土址が認められている。遺構の存在しない例としては台の内古墳（平岡1984）や上赤塚1号墳（栗田1982）例をあげることができる。多くの報告者が焼土址を祭祀と結びつけている中で、両古墳の報告者は旧表土上面に存在する焼土、炭火物を墳丘築造に先立った山焼きであろう、と推定している。

(C) 土器などの遺物だけが発見される例

遺構の存在する例の大半が遺物を有しているが、遺物のみ発見される例も存在する。たとえば鶴見古墳（小田1975）や片江8号墳（柳田ほか1973）では、墳丘下から破砕された底部穿孔の須恵器大甕が出土しており、小田富士雄氏や白石太一郎氏は地霊に対する祭祀を想定している（白石1983)。

以上、極めてわずかな例しかあげ得なかったが、そこに見られた遺構、遺物の多様性は墳丘構築に先立って種々な形式の行為がなされていたことを物語っていよう。これらの例は全てが同じ意図のもとに行なわれたとは考え難く、個々の発掘所見から考察を加えて行く必要がある。では禰ノ神古墳群の場合はどうであったろうか。上記の各古墳における所見を比較・検討の材料として分析を進めることとし、まずは、再度禰ノ神1、2号墳の状況を確認しておこう。

1号墳では盛土最下層上面で焼土址が3ケ所発見され、同層中から境片の出土があった。また2号墳では地山面で焼土址が1ケ所検出されたほか、盛土下層を切り込んだ集石土壙が2基認められた。

集石土壙に関しては純粋に盛土補強であった可能性も捨て難いが、それ以外の焼土、鏡片については、盛土構築技術に直接関連したものでないことは明白である。また、1号墳の焼土址が盛土盛下層上面にある点は、山焼きといった作業に当らないことを示している。このように、焼土の形成や鏡片の積み上げを開始するのに先立って単なる作業ではない特別な行為が展開されていたことを教えてくれる。特に貴重品である鏡が火を受けた上、破壊されて埋納されている点、あるいは鏡の魔よけ的な性格(桐原1985)、火の多用といった事柄は、祭祀的な様相を多分に含んでいると言える。

すでに提出されている説を見ると、2つの可能性が考えられる。1つは被葬者が主役となる殯に関するもの、他方は土地の神が対象となる地鎮などの祭祀である。調査がトレンチ幅に制約されたため喪屋などの遺構の有無は判断しかねるが、殯を想定するには無理がある。その理由は、隣接する古墳が一号墳よりも古くならないため、隣接する古墳の殯にはなり得ないこと。また、鏡片が盛土最下層と石室床面礫直下から出土している点は、墳丘築造途上での継続的な祭式の存在

をうかがをせており、その間に喪屋を設置し再び移動させる、といったことは考え難く、当該古墳の殯とする考えも納得の行くものとはならない。では土地の神に対する祭祀とする説はどうであろうか。こちらも断定できる証拠はないものの、『常陸国風土記』に記された土地の神に対する古代人のとらえ方（桜井1976）や、のちの寺院建立に際しては地鎮にかかわる祭祀が行なわれていたということ。など間接的な要素から、ある程度肯定してもよいのではなかろうか。いずれにせよ、今後、文献を含めて研究を展開する必要があろう。

土地の神に対する祭祀とした場合、このことが禰ノ神古墳群の築造にたずさわった集団にとっていかなる意味を持つのであろうか。この点について憶測を混じえながら考えておきたい。

禰ノ神古墳群の形成はその出土遺物から6世紀後半～7世紀前半の内にはじまったと考えられる。1古墳の遺物中には6世紀代に朔ると思われる遺物が混っており、この古墳群の築造にたずさわった集団が6世紀後半にはこの地域に居住していた可能性をうかがわせる。現在のところ近隣で集落址が発見されていないため断定的なことは言えないが、6世紀後半頃この地域を新たに開発し、7世紀前半には古墳を築造できるまでに政治・経済力を整えたのか、あるいは古くから継続的に生活を営んでいた集団がようやく発展をとげたか、のいずれかと考えられる。新興の勢力である点は、古墳の葺石の貼り方に現われている。すなわち、居住域か生産域の位置を暗示させるように、南西側だけが幅広く貼られているのである。そこには、伝統的な墓域を形成し終った古墳群の古墳とは異なり、7世紀代にあっても新たに政治・経済力を象徴させ、視覚的に強調された古墳の姿を見ることができる。沢の奥まった丘陵基部に古墳を設置した点は、この地域の開発成功を示しているのであろうか。

一方、古墳築造の問題は政治・経済といった現実的な側面ばかりにとどまるものでなく、それを支える精神的・神話的側面からもとらえることが必要である。開発を進め生産力を高めることは、それまでこの地域を支配してきた土地の神々の意志に抵触することでもあった、と思われる。開発を肯定し成功させるためには土地の神々との関係を一部修正する必要があった、と考えられよう。沢の奥まった丘陵基部に古墳が築造され、そこに祖霊が位置付けられたということは、この地域が土地の神々の支配から、住民にとって身近かな存在である祖霊に多くを負う地域に変化をとげたことを暗示しているのではなかろうか。あるいは拡大した生活圏を肯定するため、土地の神々と住民とが仲介人としての神霊の役割が重要となり、改めて周縁に近い場所に空間的位置付けを行なう必要が生じたことを示している、と言えないだろうか。

このような開発にともなった生活圏の拡大は、それを裏面から支える精神的・神話的世界も再構築させたと推定できよう。こう仮定して見ると、禰の神1号墳の墳丘築造前の祭祀は重要な意味を帯びてくる。それは今まで土地の神々に領袖されていた地域にはじめて祖霊を位置付けるといった、住民にとっては時代の大きな変換点を象徴するからである。さらに、このことは生活圏の拡大を肯定的にそれまでの宇宙観に組み込んでいくことであった、と考えられよう。当古墳群中最古である1号墳の墳丘築造前祭祀が鏡を用いるなどして手厚く行なわれていた意味はこの辺りにあるのではなかろうか。

以上、後半は推測の域を出ないものとなってしまったが、古墳の築造といった事業と、それ

に関する一連の祭式の中で、墳丘構築前の祭祀をどう位置付けるか。各地域における古代の開発と古墳の関係。開発に伴なう精神的・神話的側面の変化と古墳祭式の関係。といった問題を禰の神古墳群の調査から得た課題として提示しておきたい。現代社会にあっても宇宙開発から身近な小規模開発まで、生活圏の拡大は絶えず私たちに精神的なゆらぎを与えている。こうしたゆらぎを解消するため、古代社会にあってはどのような仕掛けを用いてきたか、そこには古くて新しい問題が含まれている。　(寺内隆夫)

引用・参考文献

泉森　皎　1981　「広陵町新山古墳」『奈良県遺跡調査概報—1980年度—』

〃　1983　「古墳と周辺施設—古墳の墓域と喪屋遺構について—『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』

市毛　勲　1971　『舟塚原古墳第一次発掘調査概報』

今井尭ほか　1969　「古墳外表の土器群」『考古学研究』16巻2号

大場磐雄　1966　『信濃浅間古墳』

小田富士雄　1975　『鶴見古墳』

桐原　健　1980　「松本市中山の古墳」『長野県考古学会誌』36号

〃　1985　「鏡と魑魅」

〃　1985　「集落研究における平出古墳群の意義」『平出遺跡考古博物館・歴史民俗資料館　紀要』第2集

栗田則久　1982　「上赤塚1号墳・狐塚古墳群」『千葉東南部ニュータウン』13

小出義治　1981　「祭祀と土器」『神道考古学講座』第3巻

近藤義郎　1983　『前方後円墳の時代』

桜井好朗　1976　『神々の変貌』

鹿田雄三　1985　「群集墳研究の現状をめぐって」『研究紀要』2

白石太一郎　1983　「古墳築造にかかわる祭祀・儀礼」『季刊考古学』3号

田中新史　1977　「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』63号

平岡和夫　1984　『台の内古墳』

茂木雅博　1982　「古墳祭祀の一例」『神道考古学講座』第5巻月報

柳田鈍孝ほか1973　『片江古墳群』

7　まとめ

禰ノ神古墳の調査はいくつかの注目すべき発見によって予想外の大きな成果を納めることができた。

禰ノ神古墳は、昭和初期に鉄刀の出土が報じられ、３基の古墳の存在が確認されていた。今回の発掘によれば、ともに既に盗掘ないし破壊が著しく、原形を保っていたものはなかった。しかし、３基とも横穴式石室で、葺石をもつことが明らかとなり後期古墳で葺石をもつものが他に知られていないことから、松本平の古墳としては特色ある古墳であったことが判明した。特に第１号墳は天井石が抜き去られ、一部石室も露呈していたが、原形を推定し得る程度には保存されていたため、その性格をある程度把えることができた。それによれば、直径14.3mの円墳で、全面に葺口を持ち、南に開口した横穴式石室を構築していた。出土遺物は、装身具、馬具、武具、鏡、土器があり、特に鞍、鏡はその出土例は僅少で本墳を考えるうえで貴重である。また、古墳築造にあたって、鏡片、焼土など築造前祭祀をうかがわせる資料も得られ、この方面の研究材料として注目されねばならない。第２、３号墳も第１号墳と同じ内容をもち、第１号、２号墳が６世紀末から７世紀前半の築造にかかり、第３号墳が７世紀中葉に築造されていることから、この３基の古墳は１つの群として把えられ継起的に築造されたものと思われる。３基の継起的な古墳築造は、ここにかなり長期にわたる権力者の存在が予測できる。塩尻市の古墳分布は、主として田川沿辺および桔梗ケ原の南縁部に展開しており、田川流域の水田地帯をその背景としていたことを物語っている。禰ノ神古墳群は、そうした観点からすれば、その立地は特異である。単なる水田経営をその基盤としたのみならず、他に何らかの要因が存したと考える必要があろう。

禰ノ神古墳は善知鳥峠を見下す塩尻峠中復にあり、善知鳥峠、塩尻峠を境として隣国と接する場所に築かれている。塩尻峠を越えると信濃16牧の１つ岡屋牧が置かれていたことや塩尻峠中復の東山に牧があったとする伝承などから、付近には牧があったことが予想される。この牧の経営には畑・水田も不可欠である。また、後に東山道が開かれる善知鳥峠から金井、上西条もすぐ眼下にあり、古代交通の要衝を手中に納め得る地域でもある。こうした立地条件を考えると、禰ノ神古墳に眠る人物は、牧、水田、畑、交通を掌握した権力者であったといえる。

塩尻市の古墳は、16基知られている。このうち、発掘調査が実施されたのは平出１、２号と今回の禰ノ神古墳のみである。未発掘のものは大半が破壊されており、その内容は全く不明である。こうした状況を考えると、禰ノ神古墳の調査は、塩尻の古墳時代、ひいては松本平南縁の古墳文化を考えるうえで基礎的資料となるものといえる。　　（小林康男）

第２節　栗木沢遺跡

１．位置

(1)　位置と地形（第22図）

栗木沢遺跡は塩尻市長畝区東方の栗木沢によって開析された谷あいの西向き緩斜面に位置し、標高は765mである。

付近はちょうど片丘丘陵と東山山麓の縫合線上にあり、群小の河川による東西方向の小支谷が発達しており、前年度市教委によって発掘調査が実施された堂の前、福沢の両遺跡が所在する鋳物師屋川は、ちょうど尾根１つ隔てた北側の谷にあたる。

栗木沢は周囲の河流に比して勾配が急な分だけ浸食作用が大きく、狭小の開析谷を形成している。このため谷底にはおびただしい量の礫層が分布しており、現在、段々地形に利用されている畑や水田の表土を僅かに剝ぐと赤土混りの堅い礫層が顔を覗かせる。

栗木沢は上流でほぼ同規模の２つの支谷に分かれるが、この付近から斜面は急岐になり、沢との比高差も出て水の影響を比較的被らない小尾根状地形が生まれる。遺跡はこの尾根上に展開し、今回実施された調査区は尾根の末端、即ち２つの支谷の合流点に位置する。

第22図　栗木沢遺跡付近図

(2) 土層

本遺跡の基本層序は上位から黒褐色土層、暗褐色土層、ローム質混りの砂礫層に識別される。このうち住居址の掘り込みは砂礫層になされており、暗褐色土が覆土となっている。小竪穴やピット群は例外なく上位の黒褐色土を覆土としている。このことは小竪穴やピットが位置的には住居址に隣接しているにもかかわらず、異なる時代のものであることを示唆しているものであろう。これらの3層が比較的良好に残されているのは調査区南東域の最も高い所のみであり、北側から西側にかけては下位の層が欠除し、径10～20cmの大礫がおびただしく分布し、度重なる河床の痕跡を物語っている。

(3) 発掘区の設定

遺跡の分布すると考えられる尾根状地形は、極めて小範囲に絞られ、しかもそのほとんどは昨年度発掘調査が実施された中央道用地内となり、圃場整備の対象となる範囲は、今回の発掘区を含めて限られる。

調査に先立ち区域内の試掘調査が行われた。それによると南側では深さ40cmでローム質の礫層にかわり、北側では僅か20cmでやはり礫層にあたった。過去の河床跡であることを考慮して礫層下に遺構の可能性がほとんどないと判断し、礫層の直上で捉えることにした。

まずブルトーザーによる表土除去が行われ、続いて助簾による遺構検出作業が行われた。北側から西側にかけては、おびただしい礫群が広がっており、ほとんど遺構の可能性も薄かったが、これに対し南東隅が比較的安定していたため、途中から調査の主体をここへ置くことにした。発掘区総面積は540m^{2}である。

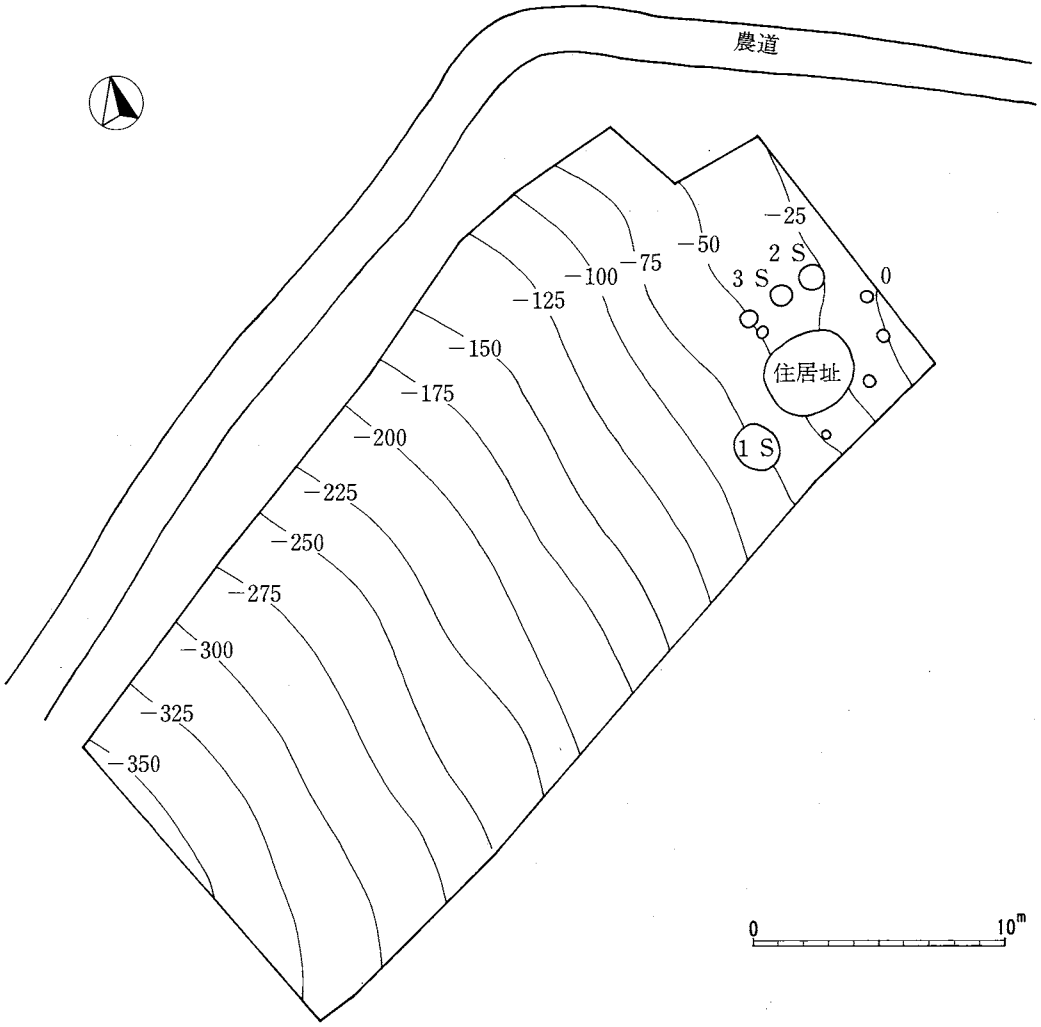
(4) 過去の調査経過

以前よりこの付近では縄文土器、石鏃、石斧などが採集でき、遺跡として知られた地域であった。

近年、中央道長野線が本地区内に計画されたことにより、昭和59年5月～7月、今回の調査地区の隣接地を長野県埋蔵文化財センターによる緊急発掘調査が実施された。長野県埋蔵文化財ニュースNo9の調査速報によると、平安時代の住居址4軒、集石遺構1基が検出されたほか該期の土師器、灰釉陶器、鉄滓が出土し、また縄文時代早期の集石遺構4基と、それに伴う山形押型文土器、茅山下層式土器、条痕文土器などが出土しており、本遺跡が縄文時代早期と平安時代の複合遺跡であることが判明している。（鳥羽嘉彦）

2. 調査概要（第23図）

栗木沢遺跡は塩尻市大字塩尻町にあり、栗木沢の小河川が開析した谷あいに立地する。遺跡は2つの支流が合流する尾根上に立地するため、今回の調査区は圃場整備事業が行われる谷あいに面した遺跡の下限縁辺部に位置する。



第23図　栗木沢遺跡遺構全体図

発掘総面積540m² に及ぶ調査の結果、住居址１軒、小竪穴３基、ピット６基が検出され、遺物として縄文時代土器片、石鏃１、さらに平安時代土師器片が出土したが、いずれも量的には極僅かである。

住居址は縄文時代の楕円形プランであるが、居住後、かなり流水の影響を受けたことが覆土から推察され、保存状態としては必ずしも良好とは言えなかった。磨滅し詳細の不明な縄文土器片が床面直上から１片だけ出土している。

遺構は全て調査域東部の最も高所に集中しており、北側から西側にかけての区域ではおびただしい礫が散在している。ここに元々居住区が設けられなかったものか、あるいは遺構が当初は存在していたが沢の浸食により消滅してしまったものなのかは、もはや確めることはできないが、いずれにしても本調査域が遺跡のはずれにあたり、これにより低い地域にまで遺跡が及んでいないことを今回の調査によって確認することができた。　（鳥羽嘉彦）

3．遺構（第24図）

1）住居址

調査経過　本址は調査区の南東隅で検出され、西傾斜である本調査域の最高部に位置する。おびただしい礫群が分布する中で、この付近は唯一、土層の保存状態が良好であったため、遺構の存在を期待しつつ検出作業を進めていったところ、ローム混りの砂礫土層中に暗褐色土の覆土を持つ大型の落ち込みを3ケ所検出する。しかし砂礫混りのかなり不明確な土層であるため容易にプランの確認ができず、さらに削平作業を進めたところ北側と西側の2ケ所の落ち込みは縮少し小竪穴となり東側のものだけ残る。この落ち込みに水糸を十字に設定し、ベルトを残して掘り下げたところ、やや柔かな床面を確認することができ住居址とする。覆土が含礫の汚い暗褐色土であることから堆積時にはかなり水の影響を被ったものと思われ、出土遺物も磨滅し時期不詳の縄文土器片のみであった。

遺構　本址はほぼ北東方向に長軸をもつ不整楕円形のプランを有し、長径3.9m、短径3.3mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込み、凹凸は激しい。壁高は北壁と西壁が10cmと小さいが、南壁が17cm東壁が27cmと大きい。床面は礫が多く露出しているため凹凸が激しく、しまりも弱い。やや西へ傾斜しているが、検出面が大きく西へ傾斜しているため西壁の壁高を小さくして床面水平に近づけようとしている。ピットは計12個が確認され、その中でP_5(-16)、P_7(-16)、Z_{10}(-16)、P_{11}(-18)、P_{12}(-10)が柱穴と考えられる。P_{10}を除き残りは全て壁より20～30cm内寄りにあり規則的な配置となっているが、共に深さが浅いためP_{10}の柱を中心にその囲りを取り巻く壁柱穴的な構造を有していたものと思われる。

なお、本址からは炉址や周構といった付属施設、及び焼土などは全く確認し得なかった。

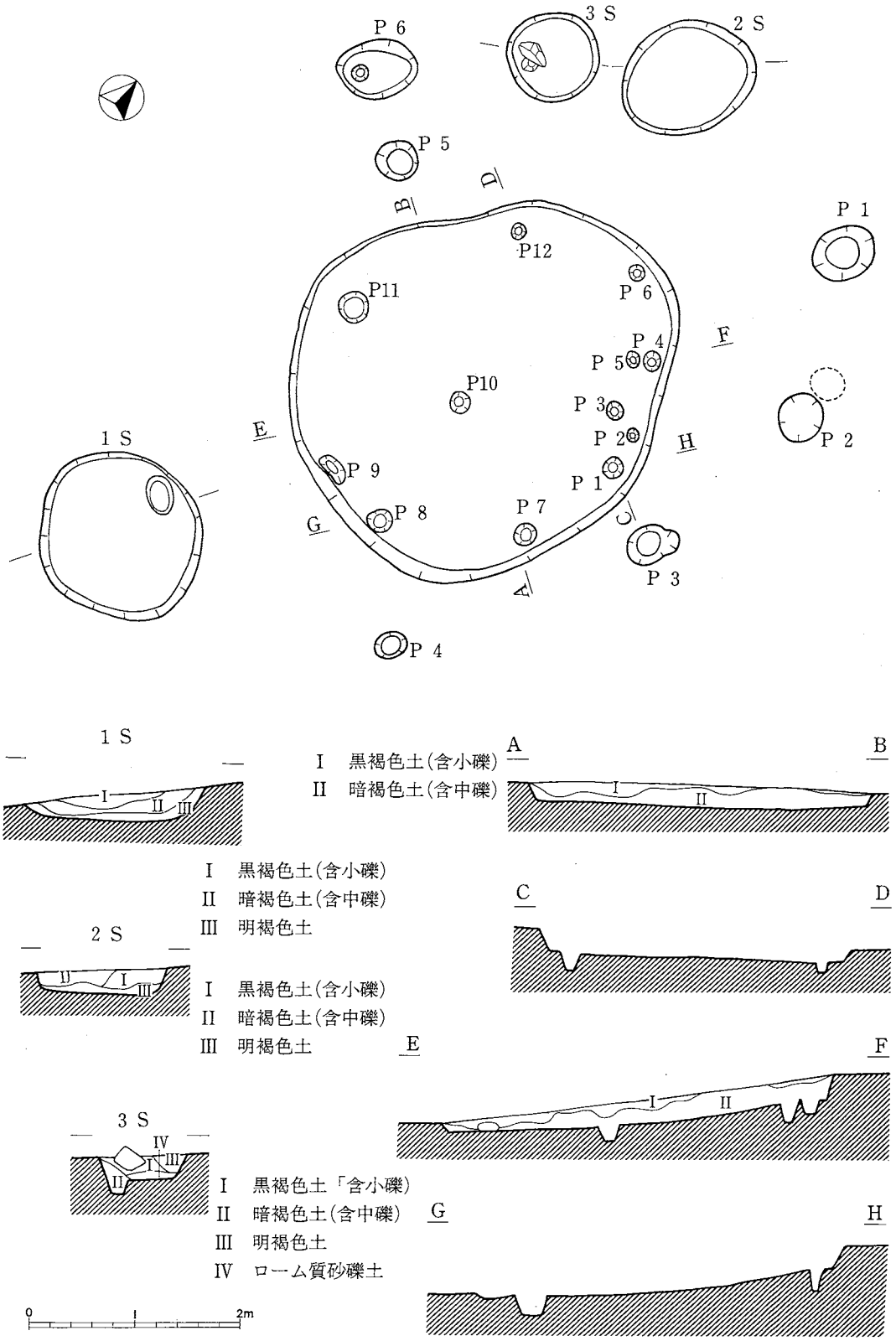
2）　小竪穴（第10表）

今回の調査で計3基の小竪穴が検出され、全て調査区東側の住居址の囲りに集中している。1Sは径1.6mと大型のもので、断面タライ状を呈するが、北側底面に小孔が穿たれている。覆土から縄文土器数片、チャート製石鏃1点、フレーク数点が出土し、本調査区では最も遺物を包含する遺構であった。2Sと3Sは住居址北側に並んでおり、両者とも円形タライ状を呈するが、3Sには人頭大の巨礫が2個入っており注目に値するものであった。

3）　ピット群

住居址を取り囲むかのように6基のピットが検出された。当初、検出時には住居址の屋外柱穴かと考えられたが、配置が不規則なことと、住居址床面からピットが検出されたことから柱穴である可能性は薄れた。それぞれの性格は不明である。

（鳥羽嘉彦）



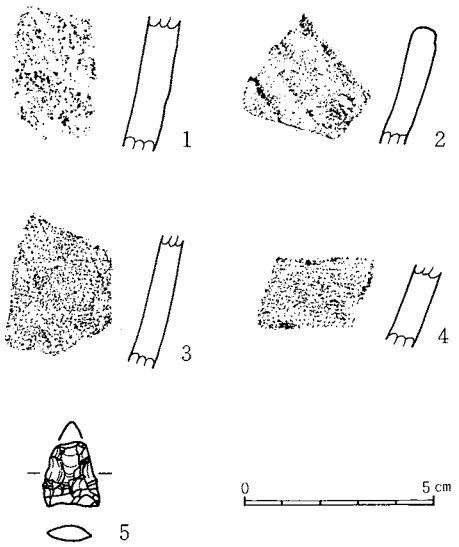
第24図　栗木沢遺跡住居址，小竪穴，ピット群

第10表　小竪穴一覧表

No.	確認規模	平面図	主軸方向	断面形	底面規模	底　面	深さ	備　　考
1	170×160	隅丸方形	N-50°-W	タライ形	160×140	丸　底	30	縄文土器片、石鏃
2	130×105	楕　　円	N-30°-E	タライ形	115×95	平　坦	25	
3	90×90	円　　形	—	タライ形	80×75	平　坦	35	大礫２個

4　遺物（第25図）

出土遺物は、住居址、第１号小竪穴から得られている。量的には少ない。住居址では、その南側の床上10cmから縄文施文の小破片が１点出土した。第１号小竪穴では、石鏃、土器片が得られた。石鏃（第　図）は、先端欠除した無柄平基で、チャート製。1.1g。土器は、いずれも小片で、縄文施文の１を除き、無文土器である。２は口縁部破片。これらの他に、調査区全域から黒曜石片が出土しているが、やはり量的には僅少であった。　（小林康男）



第25図　栗木沢遺跡出土遺物

5　まとめ

栗木沢遺跡は、筑摩山地西麓に伸びた尾根と尾根との間の谷部に立地した山間地の遺跡である。昭和59年には、今回の調査区域より上方の山寄りの部分を中央道長野線建設に伴って発掘調査が実施されている。ここでの結果を参考にすると、この遺跡は縄文時代早期から平安時代にかけて人々が居住、往来したことがうかがえる。

縄文時代早期には、住居の発見はないが押型文、茅山下層、粕畑式と絡条体圧痕文、条痕文の土器が出土している。これらの遺物は、中央道路線内からのみ出土しており、今回の調査区域からは発見されていないことからその分布はより上方高所の地点にあったものと推定される。次の中期にも住居の確実な調査例はないが、今回の調査で検出された住居がこの時期に属するとすれば、その分布はやや下方までのびていたことがうかがえる。平安時代には、中央道路線内で４軒の住居が検出されているが、南地区３軒、北地区で１軒あり、立地に若干差がある。両地域の接する地域ともいえる今回の調査域では該期の遺物が全く出土していないことを考慮に入れると、両地域を果して同一地域としてよいか疑問が残る。

いずれにしても、栗木沢遺跡は、山間地に短期間営まれた小集落で、平安期の山間部への進出を考えるうえで好資料となる遺跡である。同時に、縄文中期には、こうした谷部には余り進出しなかったことも判明し、筑摩山地山麓での該期遺跡立地を論じるうえで参考となろう。

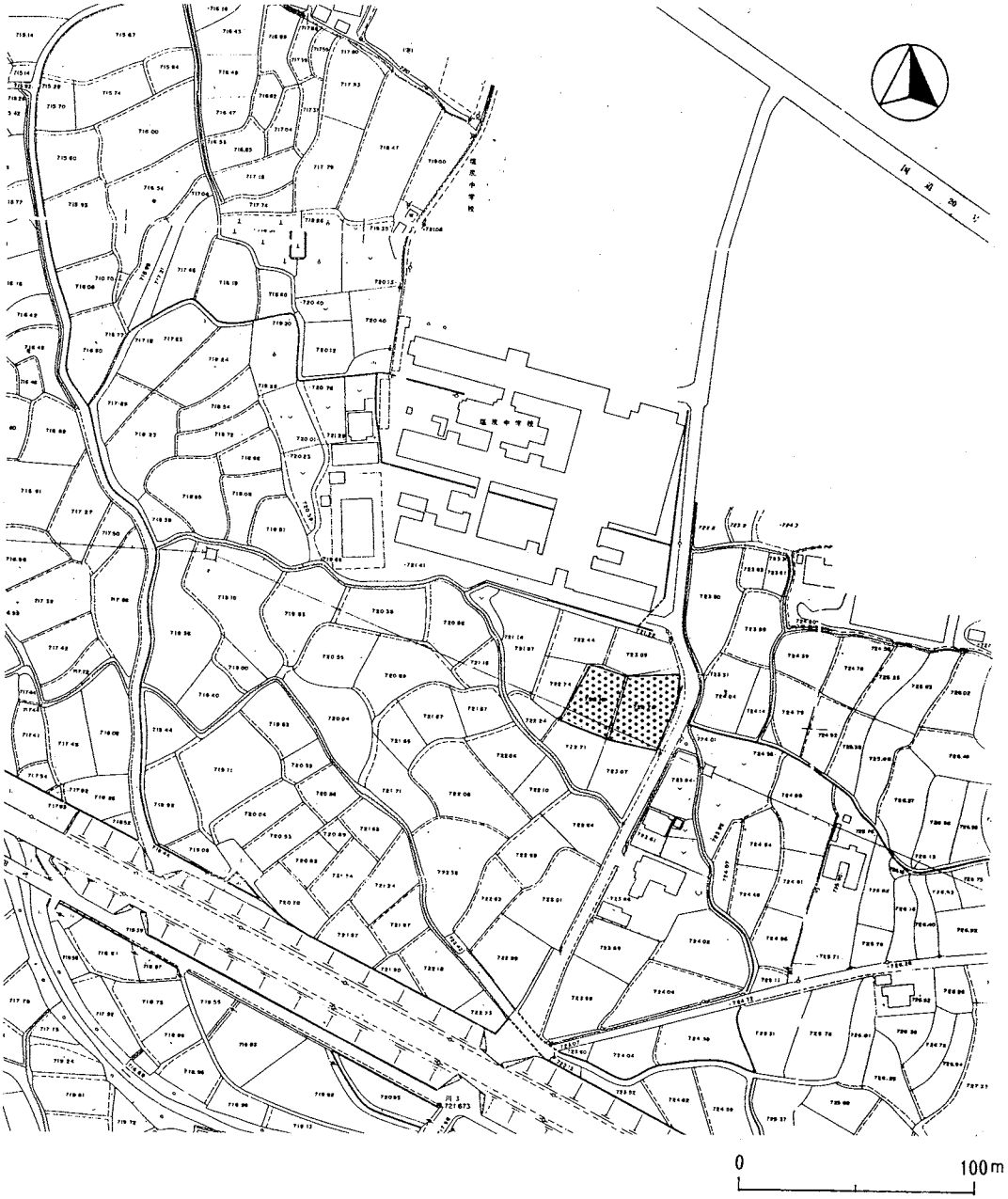
（小林康男）

第3節　砂田遺跡

1．位置

(1)　位置と地形（第26図）

砂田遺跡は塩尻東地区の堀ノ内、下西条、町区の3区にまたがり、塩尻中学校の南側をほぼ中心として展開している。



第26図　砂田遺跡付近図

ここは東山から流下してくる田川が北へ向きをかえる位置にあたり、その内側に2～3段の軽微な段丘が見受けられる。従って遺跡の中心と現田川河床は若干比高差があり、そのために田川本流の影響を直接被った痕跡はみられないが、付近は網状に流れ込む地表水が多く、「砂田」という名称に表現されているとおり、おびただしく砂礫層が表土下に広がる。ちなみに遺跡の北側にも以前、東西方向の窪地帯があり、現在の「塩尻工業」付近にあった泉から流れ出す小河川が流れていたという話しを聞くが、窪地帯を埋めそこに現在の中学校が建設されている。

調査地区は塩尻中学校の南側に面した東西2枚の水田であり、遺跡の範囲内では比較的高所に位置する。付近一帯は水田が広がり、標高722m、約200m隔てた田川河道との比高差6mの南西向き緩斜面である。

(2) 土層

調査地区付近の基本層序は、ローム層を基盤として上位にやや粘土質の暗褐色土が被覆しており、その間に両者の漸移層が見られる。ローム層は東側で非常に発達しているが、約10m西へ寄ったあたりから細粒の川砂に代わる。この漸移層と下位の砂層には酸化鉄の沈殿があり、堅緻な状態となっている。また付近は地下水位が高く、調査区西側の畑では漸移層上面ですでに湧水がみられる。

(3) 発掘区の設定

調査はまずバックホーによる表土除去を行なったのちグリッドを設定した。グリッドは5m間隔で北から南へ向かってA～F、東から西へ向かって1～9を設定した。発掘区総面積は約760m²である。

(4) 過去の調査経過

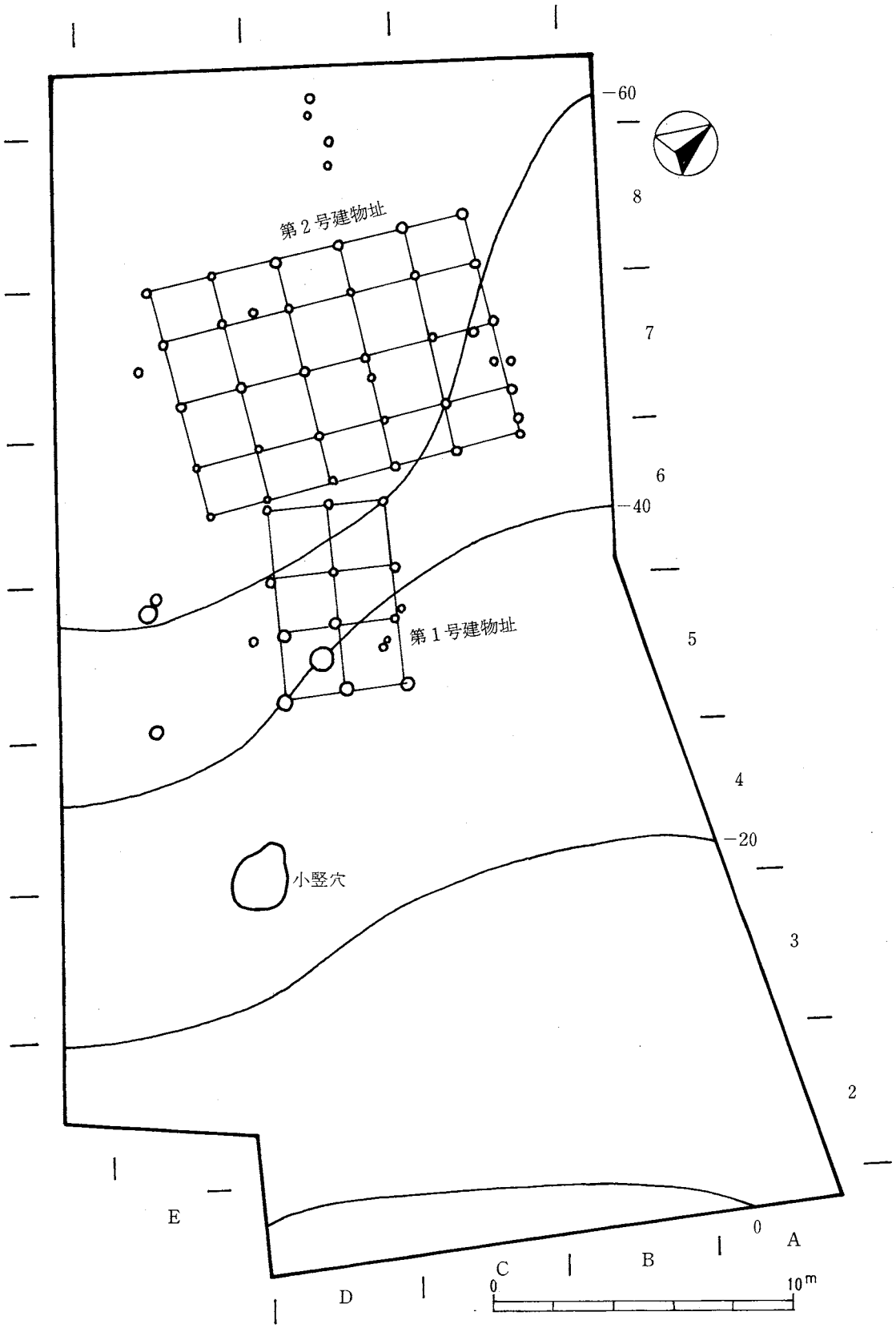
砂田遺跡では、すでに昭和初年に弥生時代の石包丁の出土が知られており、市内でも比較的早い時期から注目されてきた遺跡である。出土した石包丁は全長13.5cmの完好品で、刃部は直線、片刃で背は弓形に緩やかな孤を描いている。2孤が穿たれ1孔は表面からあけられている。本遺跡ではこの包丁以外にこれまでに出土遺物はなく、また遺構も不明であるところから、小林康男他「平出遺跡考古博物館紀要第1集」(1984)によれば、集落址であるという見方のほかに生産址である可能性も強調している。

(鳥羽嘉彦)

2 調査概要(第27図)

今回、調査された砂田遺跡は塩尻市大字大小屋地籍にあり、田川が西から北へ流れを変えるコーナー内側、河川右岸の河岸段丘上に位置する。調査範囲面積は水田2枚、860m²に及ぶ。

調査の結果、集石土壙1基、中世掘立柱建物址2棟が検出された。前者の集石土壙は不整形の掘り込みに底部より集石されており、集石範囲は直径140cmのほぼ円形を呈す。本址より遺物の出



第27図　砂田遺跡遺構全体図

土はなく時期の決定は不可能である。後者の建物址は4間×5間のものと、2間×3間のものが検出された。両者ともに年代を決定づける遺物の出土はなく、また両者の前後関係も判断できない。

遺物としては縄文中期土器片、弥生中期前半の条痕文土器片、土師器坏、中世・近世土器片(かわらけ、山茶椀、天目茶椀、青磁など)が出土し、石器では石鏃、石錐、スクレーパーなどが出土した。これらの各時代遺物はすべて粘土質黒褐色土層中からの出土であり、平面分布、垂直分布ともに時代ごとの規則性がなく、より高所からの流れ込みの可能性が強い。

(龍堅　守)

3　遺構

1)　中世建物址(第28図)

今回の発掘調査において、2棟の建物址が検出された。建物址が検出された地区に散在して、中・近世土器片が出土したが、本址の年代を決定づけるものはなかった。規模などの詳細は次の通りである。

第1号建物址

本址は調査地区中央部に位置する。規模は梁行2間×桁行3間(3.8m×6.4m)を測り、柱間寸法は梁方向で2m、桁方向で2.4mを測る。棟方向はN-69°-Wである。柱穴の平面形状はすべてほぼ円形を呈し、寸法は径12cm～26cmで、深さ5cm～30cmを測る。深さが比較的浅いのは耕作によって上層が攪乱、削平されたためと思われる。

第2号建物址

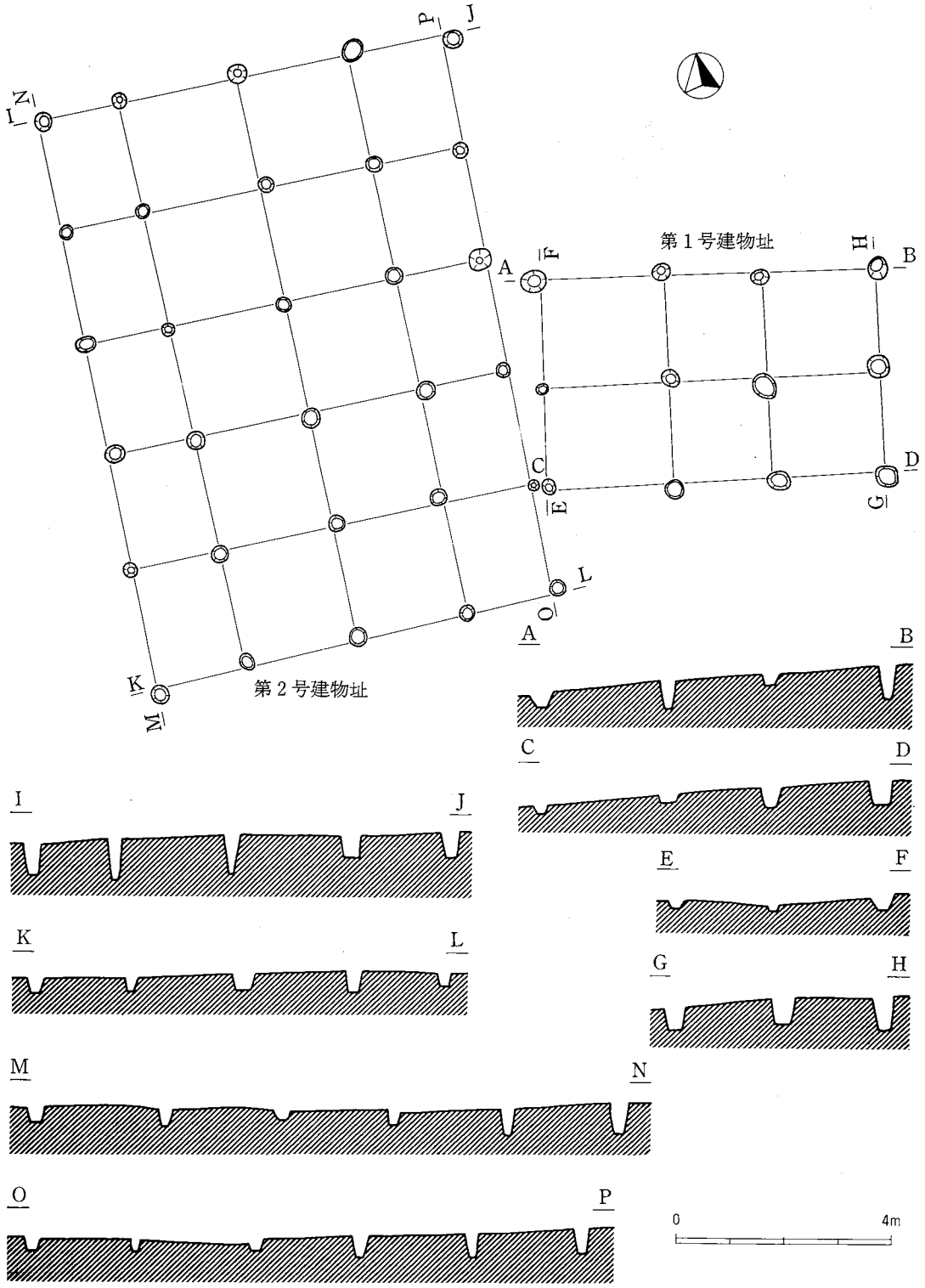
本址は調査地区西側に位置し、第1号建物址の西側に隣接する。規模は梁行4間×桁行5間(7.7m×10.8m)を測り、柱間寸法は梁方向で2m、桁方向で2.2mを測る。棟方向はN-12°-Eである。柱穴の平面形状は、ほぼ円形を呈し、寸法は径約18cmで、深さ6cm～30cmを測る。深さについては、第1号建物址と同一の見解がなされよう。

(龍堅　守)

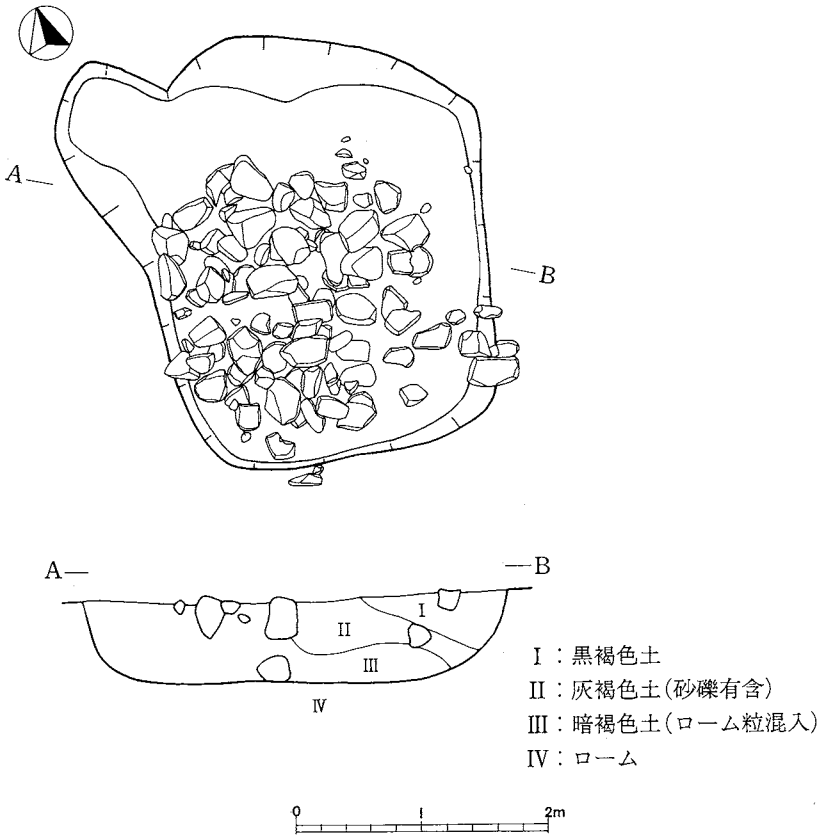
2)　集石土壙(第29図)

調査区の東側D—4、5グリット内に確認された。東西、南北1.4m深さ35cmの範囲内に10cm前後から20cm程の礫約90個が集中して存在した。集石下の掘り込みは、深さ約35cmで遺物は出土せず、その性格は判然としない。

(腰原典明)



第28図　第１号，第２号建物址



第29図　集石土壙

4．遺物

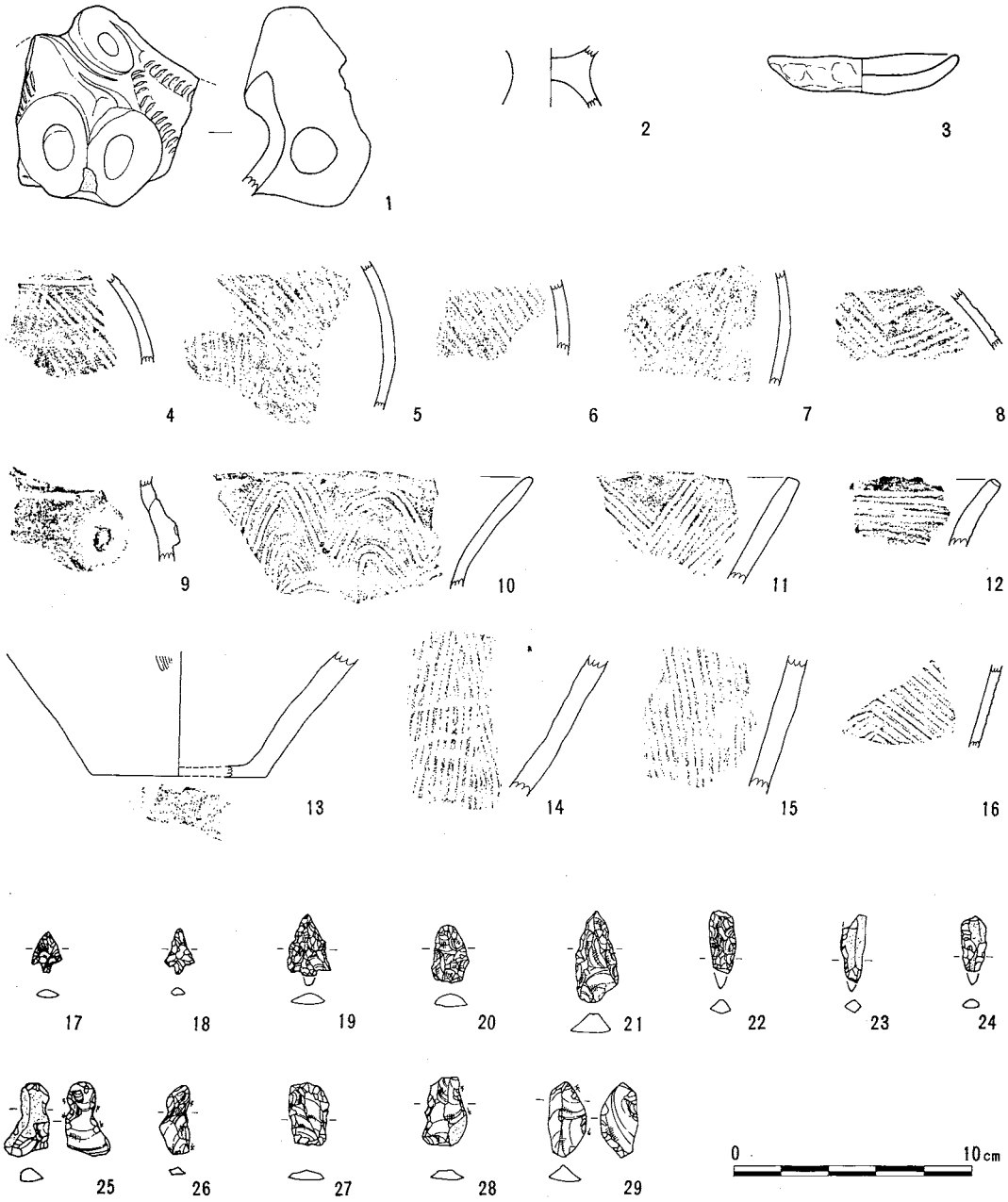
1）　土器（第30図）

(1)縄文土器

第30図１の中期藤内期に属すると考えられるミミズク把手の他、２～３片の中期土器が検出された。周辺からの流れ込みによるものと考えられよう。

(2)弥生土器

量的には少ないが、弥生中期前半期の土器が出土した。遺構に伴うものはなく、周辺からの流れ込みと考えられる。



第30図　砂田遺跡出土遺物

条痕施文の土器がほとんどであり壺、形、鉢形土器の両者が存在する。4～7は同一個体と考えられる壺形の破片で、横位条痕の下に、傾斜のきつい縦位の羽状条痕が施される。条痕施文は櫛状の工具による。8も同様な壺形土器の肩部破片であり、縦位の羽状条痕が施される。また、9はボタン状の貼付文の付される壺形土器の破片で、一条の沈線が施されている。

鉢形土器は、10のように口縁下に波文を施すものの他、11、16のように縦位羽状条痕を有するものや、横位条痕12、縦位条痕13～15などがみられる。いずれも数本単位の櫛状工具、もしくは

棒状工具を並べた施文具により条痕が施され、12には口唇部に刻目が施されている。なお、13～15は同一個体であり、底部13には布目痕が存在する。

条痕施文の壺形土器４や、ボタン状貼付文の９、布目痕土器13を指標として、これらの土器群は、庄ノ畑から阿島式にかけての位置づけが考えられよう。（前田清彦）

(3)中・近世（第30図）

図示できるものとしては30図の１点のみで、他は細片で図示しえない。

土師器

土師器かわらけは、口径8.0、器高1.8cmで、手づくね成形、淡黄褐色で砂粒をわずかに含み焼成は良い。

陶器

鎌倉時代　山茶椀の底部が出土している。高台はなく、糸切り痕を残す。胎土良好で、この種のものではやや古手に属する。

安土・桃山時代　浅鉢片が１片出土。内面に波状の櫛目文があり、織部釉の淡緑色が美しい。

江戸時代　天目茶椀と皿の小片が出土している。皿は緑色の御井戸釉がかけられ、17～18世紀に属する。

以上のほかに、輸入品と思われる青磁の椀片がある。（小林康男）

２）　石器（第30図）

出土した石器は総て黒曜石を素材とした剝片石器である。出土した黒曜石の総重量550g中石器に加工されたものは33g、６％である。石鏃４、尖頭状石器１、石錐３、スクレィパー４の計12点がその内訳である。

石鏃　４点出土し、１～３が有茎、４が無茎である。３は大形の飛行機鏃で、１、２は小形粗雑の石鏃で、ともに弥生時代に属するものであろう。４は無茎平基で、調整は粗雑である。

尖頭状石器　５は、全長4.9cmで、部厚い剝片に粗い加工を施し、鋭利な尖頭部を作出している。断面三角形を呈し、基部は不定形となっている。

石錐　６～８の３点とも錐部、柄部とも欠損している。７、８は原石面を大きく残し、一端に加工を施し、断面三角形ないし菱形に仕上げている。加工は粗雑である。

スクレィパー　９の部厚い剝片の両側縁に択り込みを入れ、石匙状に整形している。しかし、刃部と思われる鋭利な縁辺もみられないことから、スクレィパーというより小池孝氏のいう有抉顕磨石器（平出考古学セミナー第23回発表）に属するものかもしれない。10も９に類似した形態をもつが、縁辺は鋭く、スクレィパーとして機能したものと考えられる。11は全面に細かな調整を施している。

以上、出土石器を概観したが、土器の出土量に比較し、黒曜石の出土は量的に多かったといえる。石器化されたものは少なく、原石が目立つという特徴を指摘できる。

（小林康男）

5　まとめ

砂田遺跡の存在は、昭和初年の石包丁の出土によって夙に知られていた。今回の調査では、当初弥生時代の集落址が検出されるものと予想されていたが、弥生期に属するものとしては中期前半の条痕文土器が若干出土したにとどまった。弥生期の集落は、西福寺から大門３番町にかけての田川下流域に展開していたものと推定でき、当該地域は生産址的な性格をもっていたのかもしれない。砂田遺跡で中心となるのは、鎌倉から江戸時代の中・近世である。その所属時期を直接示す遺物は出土していないが、２×３軒と４×５軒の２棟の建物が検出されていることから、ある時期この場所には館があったことが判明した。この地域には、道成海渡という字名がついており、海渡を垣内と解し、鎌倉明の出土遺物を傍証資料とすれば、中世の館があったのではないかと予想される。当時、この地域は大小屋の範囲に含まれることから、これに関連するものと考えられる。

今回の隣接地を昭和61年度に区画整理事業に伴なう発掘調査が計画されているので、その結果をも総合的に考察すれば、本地域における中世の状況も明確さを増すことと思われる。

（小林康男）

第Ⅳ章　結　　語

昭和60年度の県営圃場整備事業塩尻東地区に伴なう発掘調査は、すでに報告がなされたように柿沢所在の禰ノ神古墳群、塩尻町所在の栗木沢遺跡、堀ノ内所在の砂田遺跡において実施された。以下、遺跡ごとにその成果について述べてみたい。

禰ノ神古墳　今回の3遺跡の発掘中、最も成果のあがった遺跡である。調査した古墳は3基で、松本平の後期古墳では他に例をみない葺石をもち、出土遺物中には松本平4面めという鏡が含まれ、鞍金具の鞍も出土例の少ないものである。また、築造時の祭祀をうかがをせる焼土・鏡片の出土などは、今後おゝいに注目されるべき課題である。年代的・構造的にも3基は継起的に営まれた可能性が強く、かなり長期にわたる権力の存在が予測される。おそらく、牧・畑・水田・交通路を掌握したこの地域の有力者の墓であろう。塩尻市の古代、とりわけこの東山山麓の古墳時代を考察するうえでの基礎的資料となろう。

栗木沢遺跡　筑摩山地山麓に立地する小遺跡で、今回の調査区からは縄文時代の住居址が1軒検出された。昨年度、隣接する中央道長野線用地内での発掘では、縄文早期から平安時代までの遺物が得られ、平安時代には住居址も発見されている。しかし、規模は小さく、長期的な拠点的集落とは考えられず、中核的な平野部の大集落に対する山間地の小集落として把握できる。今回の調査では遺物、遺構とも散在的であったことから、遺跡の中心はより東側上方の中央道での調査区域と考えられ、今回の調査部分は遺跡のはずれの位置であろうと思われる。

砂田遺跡　田川に臨む本遺跡は当初弥生時代の遺跡とされていた。しかし、発掘の結果、中世以降が中心となることが判明し、特に2棟確認された中世の建物址は昨年度の堂の前遺跡に次いで2遺跡めの発見となった。今後地名上、文献上からの考察が望まれる。このほかわずかながら出土した弥生時代初頭の遺物も見過ごしにできない。近時、ちんじゅ、銭宮、福沢、君石、平出など田川流域を中心として縄文から弥生への過渡期の遺跡の発見が相次ぎ、今まで不明瞭であった該期の様相が次第に明らかになりつつある。砂田出土の遺物もこの時代の大きな移り変りを考えるうえで貴重な資料となろう。

上記3遺跡の発掘調査が大きな成果を納め、無事終了できましたのは、地元の方々、土地改良区の役員の皆様等多くの方々の深い御理解と御援助の賜であります。これら暖い御援助に対し心より厚く感謝申し上げます。

（小林康男）

図版 I

禰ノ神古墳遠景

古 墳 群 全 景

図版2

1号古墳調査前

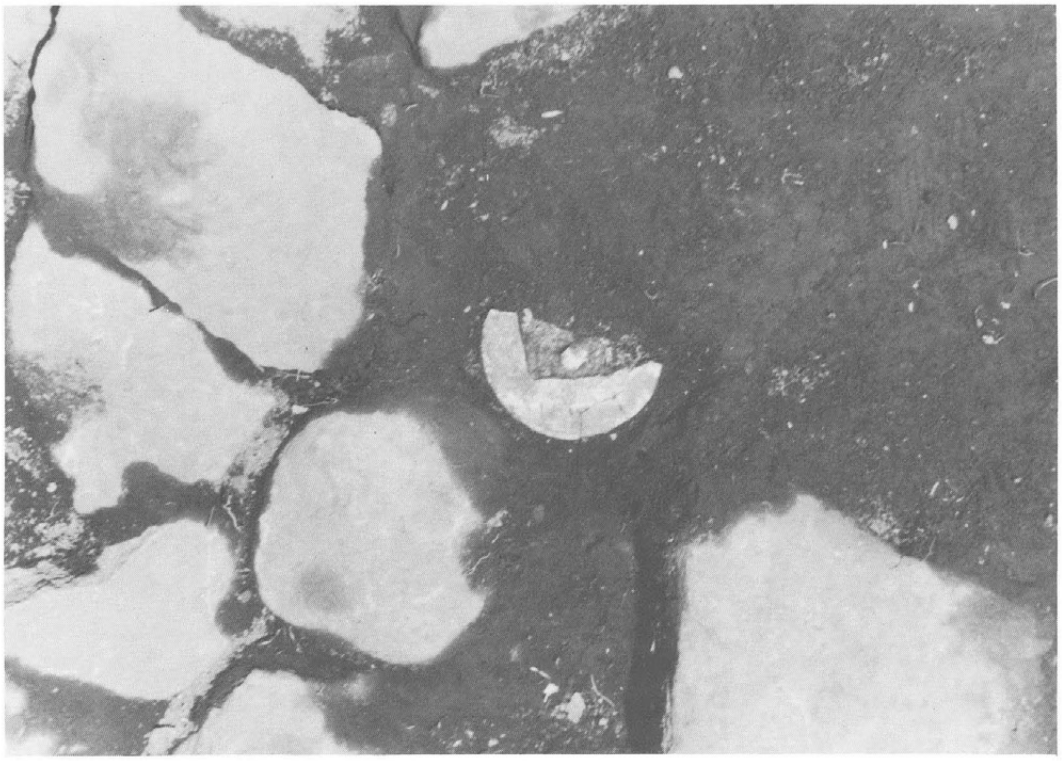
1号古墳全景

1 号 古 墳 石 室

2 号 古 墳 全 景

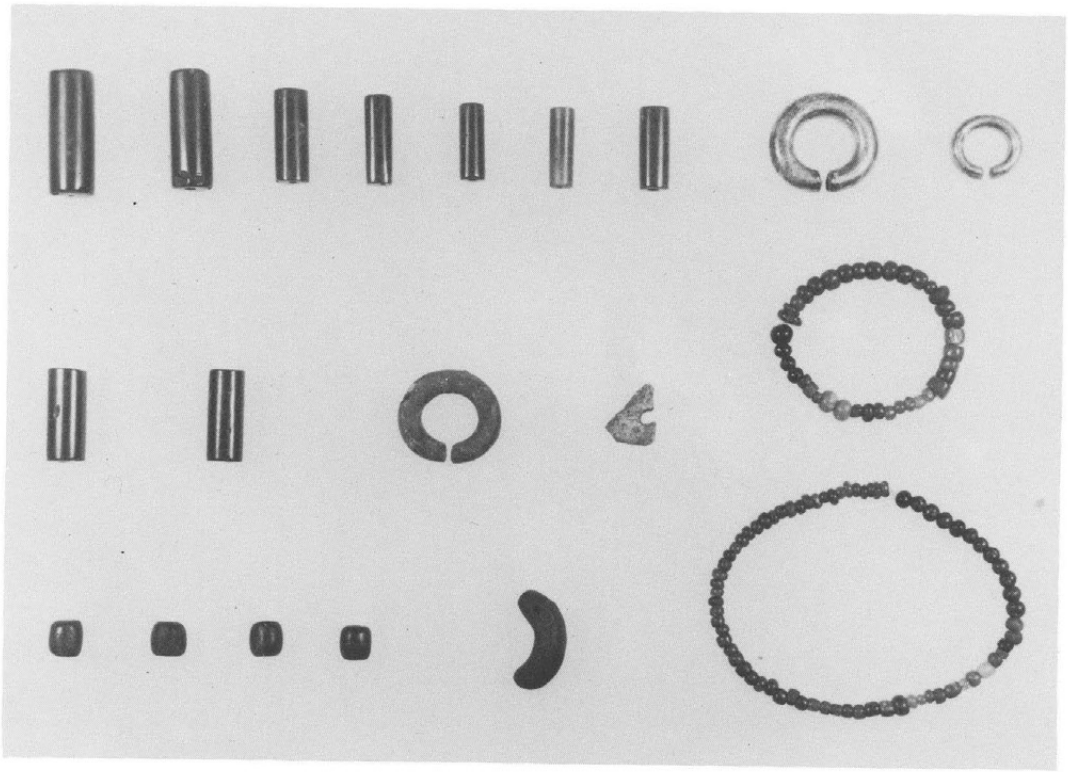
図版4

1号古墳出土土器



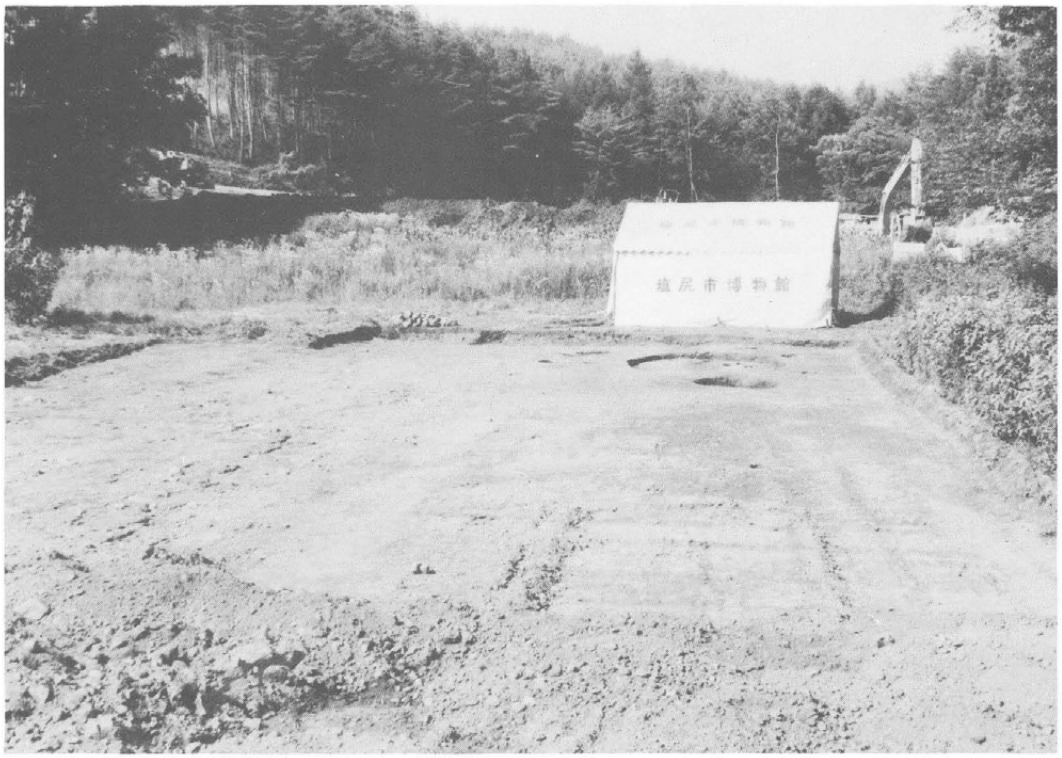
1号古墳出土鏡

1号古墳出土人骨



1号古墳出土飾身具

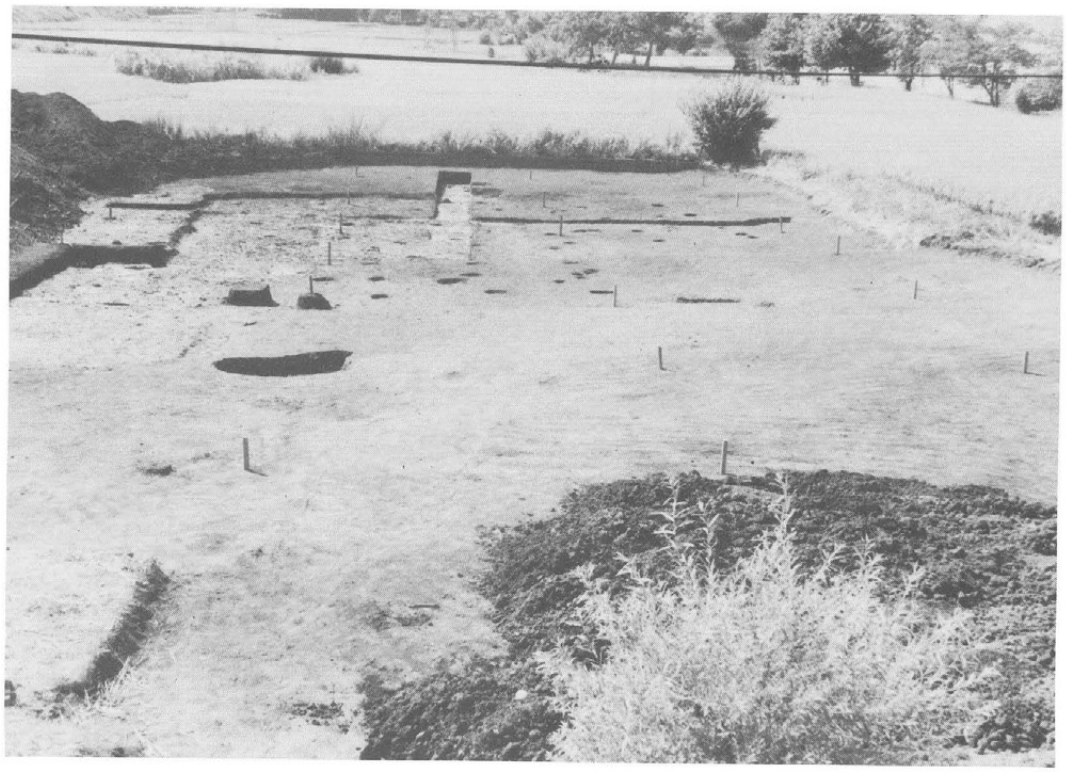
図版6



栗木沢遺跡全景

遺　構　群

砂田遺跡遠景



調査地区全景

禰ノ神・栗木沢・砂田

—塩尻東地区県営圃場整備発掘調査報告書—

昭和61年3月20日　印刷
昭和61年3月22日　発行

発行　塩尻市教育委員会
印刷　㈱高砂印刷所